炎の武士【新装版】

池波正太郎

角川文庫

撮影　三宅　数

池波正太郎
（いけなみ　しょうたろう）

1923年東京浅草生まれ。下谷西町小学校卒業後、株式仲買店に勤め、海軍入隊。戦後、都職員から長谷川伸門下生となり新国劇の脚本と小説を発表。60年「錯乱」で直木賞受賞。「鬼平犯科帳」「剣客商売」「仕掛人・藤枝梅安」の3シリーズで時代小説の第一人者となる。吉川英治文学賞受賞。90年没。

カバーイラスト／蓬田やすひろ
カバーデザイン／平野甲賀

い
8-14
Y476

池波正太郎◉炎の武士〈新装版〉

角川文庫

9784041323403

1920193004762

ISBN978-4-04-132340-3
C0193 ¥476E

定価：本体476円（税別）

天正三年（一五七五）初夏、三河の長篠城は、武田勝頼の軍勢一万七千に包囲され、落城寸前。城を守る奥平信昌の兵は五百あまり。窮状を伝えるため鳥居強右衛門は武田の包囲網を破り、織田・徳川の陣地にたどり着き、四万の大軍が救援に向かっていることを聞かされる。だが、その帰途、強右衛門は武田方に捕らわれ、援軍は来ないと告げるよう強いられるが……。表題作「炎の武士」ほか、男たちの劇的な生を描いた傑作三編を収録。

角川文庫
池波正太郎の本

人斬り半次郎 幕末編〈新装版〉
人斬り半次郎 賊将編〈新装版〉
にっぽん怪盗伝
堀部安兵衛（上）（下）〈新装版〉
近藤勇白書〈新装版〉
戦国幻想曲〈新装版〉
英雄にっぽん〈新装版〉
夜の戦士（上）（下）〈新装版〉
仇討ち
江戸の暗黒街〈新装版〉
西郷隆盛〈新装版〉
炎の武士〈新装版〉
男のリズム〈新装版〉
ト伝最後の旅
戦国と幕末〈新装版〉
侠客（上）（下）〈新装版〉
賊将
闇の狩人（上）（下）
忍者丹波大介

カバー　泉文社

炎の武士

池波正太郎

角川文庫 14764

炎の武士

池波正太郎

角川文庫

14764

炎の武士

池波正太郎

角川文庫 14764

目次

炎の武士　五
色（いろ）　一〇七
北海の猟人――間宮林蔵　一五五
ごろんぼ佐之助　一九九
解説　宮部修司　二四八

炎の武士

一歩ものくな！

それは、鳥居強右衛門が今までに経験をしたことがないような、すさまじい戦闘であった。

夏の烈日の下で、敵も味方も槍と刀をきらめかせ、血のにおいにむせかえりながら、一歩ものこうとはしない。

いまや、強右衛門は故郷へのこしてある妻や子のこともまったく忘れきってしまい、主人の奥平貞能がひきいる二百の部隊とともに、敵軍に包囲され、

（おれは……おれはもう気が狂っているらしい）

脳裡の底のどこかで、そのような自分の声をきいた。

……うわあ、うわあ……。

敵の朝倉軍の突撃が、またはじまった。

「のくな、一歩ものくな！」

主人の声が、血と汗がこもった空間を切りさくようにして、強右衛門の耳へもはいった。

主人の奥平貞能は、このとき三十四歳のはたらきざかりだしまた武勇にもすぐれて、みずから家来たちの先頭に立ち、長槍をふるって敵を突きくずしはじめた。

「わあっ……」

強右衛門も、けだもののように叫び、夢中で槍をふりまわしつつ、敵の中へ駆けこんで行った。

このとき、元亀元年の六月二十八日（現代の八月九日にあたる）というから、現代より約四百年ほど前になる。

この戦争は、岐阜の織田信長が近江（滋賀県）の浅井長政を攻めたもので、信長は、

「われにしたがうものは、すべて近江へあつまれ！」

と、命令を下した。

このため、信長をたすけて、諸国の大名があつまったが、三河（愛知県の一部）の大名・徳川家康もその中のひとりである。

ところで……。

鳥居強右衛門の主人・奥平貞能は、この徳川家康にしたがっている武将なのだ。

だから、強右衛門の主人は徳川のためにはたらき、徳川はまた織田のためにはたらくというわけであった。

敵の浅井軍には、越前（福井県）の朝倉義景というちからのつよい大名が応援している。

こうして、両軍の決戦が近江の国の姉川においておこなわれたわけだが、

「自分は朝倉軍をひきうけましょう」
と、徳川家康が申し出たものだから、これにしたがう奥平部隊も徳川軍とともに、朝倉の大軍を迎え撃つことになったわけである。
「わあっ、わあっ！」
強右衛門は槍をふりまわし、敵と戦っているつもりなのだがからだじゅうがふわふわと宙に浮きあがっているようで、目の前をちらちらと敵の黒い姿がよぎってゆくのが、ぼんやりとわかるだけであった。
のどが、ひりつくようにかわいているのだが、敵の槍や刀が、自分の着ている鎧にぶつかっても、まったく痛みを感じなかった。

けだもののちから

ずっと以前のことだが……。
父親の鳥居角内は、せがれの強右衛門が十八歳のころ、はじめて戦場へおもむくときまったとき、
「病気のわしにかわって、殿さまのお供をするわけだが、いくさはこわいぞ」
にやにやしながら、
「どうだ。行くのがこわいか？　こわいであろうな」

と、いった。
強右衛門はそのとき、父がにくらしくてたまらなかった。
（こわいのは、あたりまえだ）
本物の槍や刀をふるって、たがいに殺し合うのではないか……。
「では、父はどうだ、父は、こわくないのか？」
強右衛門は角内をにらみつけ、反問してやったものだ。
すると角内は、こともなげにいった。
「そりゃ、こわいとも」
「それみろ。父だってこわいのではないか、それみろ」
「うむ、わしだってこわい」
父親はすなおにこたえた。
「わしもな、むかし、若いころに初めて槍をかつぎ戦場へ出たとき……いや出て行く前には、おそろしくておそろしくて夜もねむれず、めしものどに通らなんだものじゃ」
「父も、おれと同じように……？」
「そうだとも」
「そうか……みんな、同じなのだな。おれだけがおくびょうなのではない。そうなのだな、父……」
強右衛門は、なにか心づよい気持ちになってきた。

それまでは、戦場へおもむく恐怖があまりに大きく激しかったので、
（おれは、こんなにおくびょうなのか……だらしのない男なのだな、おれは……）
と、強右衛門は、つよい劣等感にさいなまれていたのである。
「だが、安心をしろ」
父の角内は、がっしりとした両腕をさしのべ、まだ少年のおもかげが、どこかに残っているひとりむすこの肩をやさしくたたいてやりながら、
「いざ、戦場に立ち、槍をつかんで敵に向かい合ってみると、そのようなおそろしさ、こわさはどこかへ吹き飛んでしまうものだ」
「ほ、ほんとうか、父……」
「ほんとうとも」
「そうか、そうかなあ……」
「うむ。この、あたまの中が火のように燃えてきてな、からだじゅうがかっかと熱くなり、もう無我夢中となってしまう。ただもう、敵と戦ってこれを倒すという……けだものののようなちからがわいてきて、何もかも忘れ、槍をふりまわすことができるものよ」
「ふうん……」
「人間という生きものには、山や野に住むけだものと同じ本能がひそみかくれている。つまり、戦って生きのこるためには敵を倒さねばならぬという、生きものの本能が、いざとなれば出てくる。おまえにも、そのちからがないことはないのだ」
そのとおりであった。
それから、十三年の間、強右衛門は、奥平家につかえる身分のかるい武士のひとりとして何度も戦場に出ているが、出るたびにこわかった。
こわかったけれども、戦場へ立ち、敵と向かい合うと、彼は他のだれにも負けずに戦うことができた。
戦って敵を倒すことが、つまりは自分をまもろうとする本能のあらわれだという事実を、強右衛門は、はっきりとわかるようになってきたのである。

はじめての大戦

はなしを、もとへもどそう。
姉川の戦闘は、朝早くからはじまり、午後の二時ごろに終わった。
琵琶湖の東に、北近江の平野がひろがり、この平野を東から西へ姉川がながれ、琵琶の湖へそそいでいる。
姉川を中心にくりひろげられたこの戦闘が終わったとき、織田・徳川軍が八百以上の戦死者を出し、浅井・朝倉軍は千七百以上の将兵が戦死して、ついに負けた。
だが、一時は織田軍も危うかったのである。

総大将の織田信長の本陣まで浅井軍がせまり、
「わしも、これまでじゃ」
と、信長も討死の覚悟をしたそうだ。
これを、はるかに見た徳川家康は、
「織田どのがあぶない。ここでもし、わしが敗れたら、味方は総くずれとなる。けっして負けるな！」
と、さけび、みずから槍をつかんで朝倉軍の中へ突入した。
のちに……。
日本の天下をおさめ、征夷大将軍となった徳川家康だが、このときはまだ三十そこそこの若さで、槍も刀も鉄砲もみな得意だったほど武術にすぐれ、ちからも強かったといわれる。
このときの徳川軍は約一千ほどで、それに奥平貞能などの部隊をあわせても二千に足らなかったろう。
これで、約一万におよぶ朝倉軍を引きうけ、これを打ちやぶったのだから、
「徳川どのがいてくれなかったら、このいくさは信長の負けであったろう」
と、のちに織田信長は徳川家康の手をにぎりしめ、
「徳川どののような味方がいてくれるので、自分はどのようにか心づよい」
感動をかくそうともせずに、徳川軍の武勇をほめたたえたという。

それだけに、徳川にしたがっている武将たちは、いずれも苦戦をした。
奥平貞能も重傷を負ったし、二百の家来のうち半数が戦死をした。
「ああ……今度もまた、おれのいのちは消えなかったぞ」
鳥居強右衛門は、いくさが終わってから、はじめて我に返り、うれしくてうれしくてたまらなくなってきた。
きょうの戦闘が、彼にとっては生まれてはじめての大戦であっただけに、
「これでまた、加乃や子どもたちにも会えるな」
やっと、故郷へのこしてきた妻子の顔をおもいうかべる余裕がうまれた。
強右衛門は、自分がどのようにして戦い、敵を何人討ちとったのか……それもおぼえていない。
ただもう夢中で、槍をふりまわしているうちに八時間以上の時がすぎてしまった。
気がついてみると、その八時間が「あっ……」という間の三十分そこそこにしかおもわれない。
つまり、それほど夢中でいたわけだから、自分が討った敵の首を切りとっている余裕など、強右衛門にはまったくなかった。
それなのに〔若殿〕は、敵の首を一つ腰へ下げていたということだ。
若殿とは、殿さまの奥平貞能の長男で九八郎信昌という。
この若殿は、わずか十六歳であった。

むろん、戦場へ出るのは初めてで、強右衛門の初陣より二歳も若い。だが、奥平九八郎は、たくみに馬を乗りこなし、

「つづけ！」

まっ先に敵軍の中へ駆け入ったのを、たしかに強右衛門は見ている。

そのころの戦場では、まず殿さまが勇気を見せ、死ぬ覚悟で敵にぶつかってゆかなくては、強右衛門のような家来どもがあとにつづくものではなかった。

それにしても、十六の少年が、

「十も二十も敵を突き殺したが、首をとるひまがなくて、これだけ一つ、ようやくに切りとったのだ」

戦闘がすみ、徳川がたの陣所へ帰って来て、こういったそうである。

これを織田信長がきいて、

「奥平のせがれを、つれてまいれ」

と、命じた。

たのもしき若殿

この夜……。

織田軍も徳川軍も竜ヶ鼻というところへ陣をかまえていた。

敵の浅井・朝倉の両軍は姉川のかなた、三里もはなれている浅井長政の本城・小谷山へ逃げこもってしまっていた。

「そちが奥平九八郎か」

織田信長は、十人ほどの兵をしたがえて本陣へあらわれた九八郎を迎え、

「あっぱれである」

と、ほめ、自分が着ていた陣羽織をほうびにくれた。

いま、天下をつかみとろうとしているほどの偉い総大将の信長が、こうしてほめてくれたのだから、非常な名誉だといわねばならぬ。ところが奥平九八郎は堂々と胸を張り、それほどうれしそうな顔もしなかった。

鳥居強右衛門は、このとき九八郎にしたがって織田の本陣へ来た兵の中にいた。

（若殿は、なかなかたいしたものではないか、驚いたな……）

強右衛門は、ひざをつき、あたまをたれつつ、上目づかいに九八郎を見ていた。

主人の奥平貞能のあとには、この九八郎が家をつぎ、強右衛門たちの主人となるわけであった。もしも九八郎が、これからのいくさに死ななければ……。

「ながいいくさで、骨が折れたことであろうな」

織田信長がそういうと、九八郎は、

「別に、なんとも思いませんでした」

こともなげに答えた。

信長は、
「たのもしい小冠者(こかんじゃ)め。よし、よし。これからも徳川のためにはたらいてくれ」
と、いった。
徳川が自分のためにはたらいてくれる以上、三河の小さな国の主である奥平家も信長の味方というわけであった。
九八郎は、それから家康の陣所へ行き、あいさつをしたが、家康も大よろこびで、
「でかしたぞ、九八郎。ほめてやる」
脇差(わきざし)をほうびにくれ、
「疲れたろう」
「私のからだが小さいからでございますか」
「うむ」
「敵を討つのはからだの大小ではきまりませぬ。武術によって勝ちます」
「武術とな……？」
「私は幼いころから、奥山休賀斎(おくやまきゅうがさい)殿に剣法を学んでおります」
「え……」
徳川家康は身を乗り出し、
「九八郎もか……」
と、いった。

奥山休賀斎は、剣聖とうたわれた上泉伊勢守(かみいずみいせのかみ)のでしで、
「奥山は東国一の剣法者である」
と、師の上泉から折り紙をつけられたほどの名人だし、実は徳川家康も休賀斎に剣法を学んだことがある。
「ほう、さようか。奥平のせがれがわしと相でしとは、な」
家康も大よろこびである。
とにかく、この一日で、奥平父子は大いに面目をほどこし、その武勇を天下に知られたことになる。
九八郎は傷の手当てをうけている父・貞能を見舞ってから、となりの自分の陣所へ帰った。
鳥居強右衛門は〔若殿〕の九八郎についている。
出迎えて、寝床の用意をしながら、
「若殿。今夜はいろいろと、おめでとうございましたな」
強右衛門が声をかけると、九八郎はそれにはこたえず、
「強右衛門も、ようはたらいたぞ」
「えっ……それがしのはたらきを……？」
「見ておった」
強右衛門は驚いた。この〔若殿〕は戦いながら家来たちのはたらきまで見ていたと

いうのである。

（まだ十六の若さだというのに……たのもしいおかただ）

強右衛門が、このとき奥平九八郎にいだいた好感は、彼の人生に決定的な影響をあたえることになる。このことを、強右衛門も九八郎も、むろん知るわけがない。ふたりが、この一夜をあらためて思いおこすまでには、まだ五年を待たねばならぬ。

たくましいが、ずんぐりと背の低いからだをうごかし、強右衛門はいそいそと〔若殿〕の世話をやいた。

実力がすべてをきめる

織田・徳川の連合軍は、まもなく陣をはらって北近江から引きあげて行った。敵の浅井長政は小谷城へ立てこもってしまったし、この山城を攻め落とすのは容易ではないからだ。

「まずは、これでよい」

織田信長は、三里のかなたにそびえる小谷城をのぞみ、

「浅井の息の根は、もはや絶えたも同然」といった。

ここで、織田信長についてのべておこう。信長が、この時代に果たした役割は、徳川家康や奥平父子や、それから鳥居強右衛門の一生にも大きく関係してくることになるからだ。

日本の国には、百年もの間、戦争が絶えなかった。

いわゆる〔戦国時代〕とよばれたこの時代のみだれをおさめ、一応、天下を統一することができたのは、織田信長という大名のすばらしいちからがあったからだといえよう。

そのころ、あまりに戦争がつづいたものだから天皇がおられる京の都も荒廃しつくし、天皇のかわりに国をおさめるべき足利将軍の政治力も軍事力も、おとろえてしまっていた。

天皇や将軍をたすけるはずの武士たちは、それぞれ自分の故郷での勢力を伸張させ、町民や農民をしたがえ、

「実力さえあれば何でもできる！」

という自信をもつにいたり、天皇や将軍の命令なぞ、きこうともせぬ。

実力さえあれば身分の低い者でも、いやしめられていた者でも、上の者を押し倒して権力を広げてゆきはじめたのである。

こうなると、将軍の命をうけて、諸国を守っていた〔守護大名〕も、うっかりとしてはいられなくなった。

たとえば……。

織田信長の父・信秀などは〔守護大名〕の家来であったのだが、戦乱がつづくうち

に実力をたくわえ、尾張の国（愛知県）の中でみるみる頭角をあらわし、独立した一個の大名となった。この信秀のような大名を〔戦国大名〕とよぶ。

信長の代になってからは、遠江・駿河（静岡県）から三河（愛知県の一部）までを領国としていた守護大名の今川義元に押しつぶされそうになったが、信長は敢然として今川軍を奇襲し、総大将の今川義元の首を討ちとってしまったのだ。

これが、あの〔桶狭間〕の戦いである。

むかしから天下に、その名をうたわれた今川家が、小さな大名の織田信長に敗北したのである。

天下をわがものに

信長は少年のころから〔敦盛〕という舞いに合わせた文句の中で、「人間五十年、下天のうちをくらぶれば、夢まぼろしのごとくなり」という箇所が大好きであったという。

この意味は、「人間などというものは、五十年も生きれば、やがて死ぬものである。そう考えてみると、世の中のすべてのことが、夢か、まぼろしのようにしかおもえないではないか」とでも、いったらよかろう。

十四歳のとき、信長は父・信秀にしたがい、はじめて戦場へ出たが、そのとき、

「父上。人間には生まれたそのときから、ただひとつ、わかっていることがありますね」

こういったそうである。

「それは何か？」

「死ぬことです」

「なるほど……こりゃ、はっきりしておるな」

「それだけが、はっきりわかっております。あとのことはなにごともわかりませぬ」

信秀は、腕白で乱暴なわが子が、このようなことを突然いい出したことに驚きもしたが、

「子どもながら、人としての覚悟がようできておる。たのもしきやつじゃ」

と、大いによろこんだ。

こうした性格の織田信長だけに、小さな、つまらぬことにはかかりあおうとせず、まっしぐらに、

「おれが天下をおさめてくれよう！」

との大野望に向かって突進していったのである。

今川義元を討ち、さらに美濃の国（岐阜県）の斎藤家をほろぼし、わが本城を尾張から岐阜へうつした。

天下をおさめるためには、まず京都へのぼり、天皇と将軍をたすけて、日本の首都である京の町を〔わがもの〕としなくてはならない。このことを〔上洛〕という。

上洛を果たすためには、その途中にいる大名たちと戦い、これを打ち倒してゆかねばならないわけだが、岐阜へ進出した織田信長は、この点で、もっとも有利であった。甲斐（山梨県）の武田信玄や、越後（新潟県）の上杉謙信など、精強の軍団をかかえた有名な大名たちは、信長にくらべて、京都までの道のりが、あまりにも遠かったからである。

姉川の戦争がおこなわれたとき、織田信長は、すでに京都の治安をととのえ終えていた。天皇や将軍も、信長の経済力と武力と政治力を、たのみにせざるを得ないほど、信長は大きく成長している。

姉川で、浅井・朝倉の両軍と戦ったのは、この二大名が信長の命令をきかなかったからで、ことに浅井長政の妻は信長の妹なのにもかかわらず、

「いったん、われにそむいたものは必ず討つ！」

それが信長の信念であった。

さて……。

姉川の戦争がすむと、鳥居強右衛門は主人の奥平父子にしたがい、故郷へ帰った。

強右衛門の故郷は、三河の国の作手というところで、浜名湖の北方につらなる山脈をいくつも越えて行かねばならない。

作手一帯の村々をおさめているのが、すなわち奥平貞能なのである。作手郷の南端にある石田という小さな村に、強右衛門の家があった。

戦塵にまみれた強右衛門の顔を見たとき、妻の加乃は、よろこびの声をあげた。

「おお、よかった、よかった……」

「うん。今度も死なずに帰って来たぞ。子どもたちに変わりはないか。おお……みんな、そろっておるな。よしよし父はな、ほれ、このとおり生きて帰って来たぞ」

強右衛門夫婦

鳥居強右衛門が、加乃と結婚をしてから八年を経ている。

加乃は、同じ作手郷の清岳に住む黒瀬久五郎のむすめであった。彼女が十七歳のとき、二十三歳の強右衛門との結婚ばなしがすすめられたのだが……。

「あのような男は、いや」

と、加乃は、なかなかに承知をしなかったそうである。

背も高いし、たくましい肉体をもっている加乃は、けっして美しい女ではなかったけれども、

「わたしは、強右衛門どののところへは嫁きとうない」

と、いいはる。

「どこがいやなのじゃ」

父親の黒瀬久五郎がきくと、加乃は、

「あのような、のろま牛はいや」と、答えた。

鳥居強右衛門のことを、作手の人たちは、

「石田村の、のろ牛」と、よんでいる。

さいづちあたまで、ずんぐりとしたからだつきは、見るからに鈍重だし、小さなんぐりのような目も、ふとい鼻も、何ひとつ見ばえのするものがない容ぼうであった。

領主の奥平家の家来ではあるけれども、身分は低いし、戦争がないときは寄子（部下の小者）三人といっしょに、どろと汗にまみれて百姓仕事をしている。

戦場へ出ても、のろのろとうごくだけで目だつようなはたらきもしないから、いつまでたっても出世をしない。

こういう男を夫にすることを、若い女がいやがるのは、四百年も前の昔と現代とくらべて、少しも変わるところがない。

だが、加乃の実家も強右衛門と同じような軽い身分なのだし、

「この父が見こんだ男じゃ。心配せず嫁に行け」

父親がむりにすすめる。

加乃も、ほかに好きな男がいたわけではないし、そのころ十七歳の女といえば結婚適齢期であった。

強右衛門のほうでは、

「どうしても、むすめごをいただきたい。私はきっと加乃どのをたいせつにするし、

いまよりも、もっともっと精を出してはたらくつもりでござる」

と、加乃を妻に迎えたくてしかたがないらしい。

加乃の父・黒瀬久五郎は、

「むすめよ。あの男は、のろ牛なぞとよばれているが、いまにきっと、ひとかどの男になれるやつと、わしは見ておるし、何よりも、おまえを大事にあつこうてくれよう。わるいことはいわぬ。強右衛門の妻となれ」

しきりに、すすめた。

そのころは、両親を子どもたちがうやまい、信頼をしているのが常識であって、親たちもまた、けっしてわが子の信頼を裏切るような生き方をしないようにと、こころがけていたものである。

「父さまが、それほどに申されるなら……」

やっと、しぶしぶながら加乃が承知をした。

さて、結婚してみると……。

むろん、加乃も夫とともに畑へ出て百姓仕事をするし、山村の女に生まれただけに、加乃のはたらきぶりは実にりっぱなもので、三年後には男の子がふたり生まれた。

一日の労働がすみ、家に帰って夕飯がすむと、

「さ、うつ伏せになれ」と、夫の強右衛門がいうのだ。

奥平家がいくさをせぬかぎり、強右衛門も家をるすにすることはない。家にいるか

ぎり毎夜毎夜、強右衛門は妻を寝かせ、その労働につかれてこわばったからだをもみほぐしてやるのである。

しかも一刻（二時間）あまりも休むことなく、マッサージしてやるのだ。

はじめは、加乃もびっくりした。夫が妻のからだを毎日のようにあんまする、などということは、女権とやらいうものが向上したといわれる現代においても、めったにはあるまい。

加乃は、感動をし、

「なぜ、このようにしてくださる？」

問うと、強右衛門が、

「女房どのは家の宝ゆえ、たいせつにせねばならぬ」

こう答えたというのだ。こういう夫をもった妻が、夫へ対し〔愛情〕をもってむくいないとすれば、その女がばかである。

ところが強右衛門にしてみれば、

「おれは、父が母にしてやったことを子どものころから見ていて、夫は妻を、そのようにあつかうものだと思っていただけのことだ」ということになる。

当時、彼の母は病死してしまっていたが、父の角内は、まだ生きていて、むすこ夫婦の間が年ごとに仲よくなってゆくのを楽しげに、だまって見まもっていた。

また戦争か……

こうして強右衛門夫婦の結婚生活が十年を経過したとき、ふたりの子は五人になっていた。

長男が仙吉郎。次男が弥二郎。

長女を於久以といい、次女は於玉、三女は琴である。

これまでに、強右衛門が主人にしたがって戦場へ出て行くたびに、妻の加乃は、

「けっして、討ち死にをしてはなりませぬぞ」

と、強くいって夫を送り出したし、強右衛門もまた、

「うん。てがらをたてるよりも、おまえや子どもたちと死に別れしたくはないからな」

「殿さまが負けてもよいから、けっしてあぶないまねはしてくださるな」

「わかっているとも」

だから、鳥居強右衛門は戦場に出ても、決死のはたらきはなるべく避けてきた。

てがらをたてるためには、どうしても自分のいのちをかけなくてはならない。

武士が主人に対して〔忠義〕をつくさねばならぬとか、主人の恩を忘れては人間ではないとか……そのような武士の道徳がやかましくなったのは、もっともっとあとの

ことで、江戸時代にはいってからであるといってもよい。

強右衛門が生きていた時代には、もしも自分の主人に対して、

「どうも、あんな殿さまのために、はたらきたくない」

と、家来が思ったりすれば、家来のほうから殿さまを見捨てて、どこかへ行ってしまうこともあるのだ。

いのちがけではたらくときも、主人のためというより、

「ひとつてがらをたてて、おれが出世をしてやろう」という強烈な希望があるからである。

だから、強右衛門も、

（子どもたちも多くなったし、ここはひとつ、おれも考えなくてはならぬところだ）

と、思いはじめた。

（おれだって、いつまでも若くはないのだ。はたらけるうちにてがらをたて、少しずつでも出世をしてゆかなくては、男の子たちが一人まえの武士になれぬ）

そこは、強右衛門も、どこの家の父親と少しも変わるところがない。

姉川の戦争から帰って来たときは、あの勇敢な若殿の奥平九八郎が、

「わたくしは、強右衛門のはたらきぶりをちゃんと見ておりました。敵を五人も突き倒しました」

と、殿さまの奥平貞能に証言してくれたものだから、強右衛門は敵の首をとって来

なかったにもかかわらず、いくらか加増してもらえた。

それで田地もふえたし、寄子（部下）も全部で五人にふえたのである。

姉川の戦争がすむと、その年いっぱいは強右衛門にも平和な百姓としての生活がつづいたが、翌年、すなわち元亀二年になると、

「またいくさじゃ」

「こんどは、武田か徳川か？」

と、作手の武士たちは口ぐちに〔うわさ〕をし合った。

こんどは武田か徳川か……ということは、

「こんどは、わが殿さまは武田に味方するのか、徳川に味方するのか？」と、いうことなのである。

去年の姉川戦争に、殿さまは徳川家康のために出陣をした。

殿さまの領地である作手は、三河の国にあり、三河の国をおさめる大名は徳川家であるからだ。

ところが、徳川家康が三河の国を平定したのは、つい二年ほど前のことで、それまでは今川義元がこれをおさめていた。

だから、そのころは奥平家も、今川に味方したり、甲斐の武田信玄に味方したり、たいへんな苦労をしたものだ。

つまり奥平家のように小さな〔殿さま〕は、自分よりも大きくて強い勢力をもつ大

名たちの味方をしてゆかなくては、たちまちにたたきつぶされてしまうのである。

いまのところ、徳川家康に味方している。

徳川は織田信長にしたがっている。

織田信長は、いまや日本の天下をおさめようという偉大な大名だから、奥平家も、

「これで、まず安心じゃ」

よろこんでいたのだ。

それが、ことしになって……。

甲斐の武田信玄と徳川家康が、またも戦闘状態にはいったのである。

武田信玄といえば、織田信長でさえ、

「武田をおこらせてはいかぬ」

と、おそれているほどの英雄だ。

信玄も表面は信長と仲よくしているけれども、

「いつかは、わしが信長を倒して、日本の天下をおさめてくれよう」と、考えている。

そのためにはまず、信長の味方の家康を倒し、三河の国を武田のものにしてしまわなくてはならない。

前から武田と徳川は戦ったり仲直りしたり、そのたびに奥平家のような小さな武将たちは、

「どっちへ味方したらよいか、困ったものだ」

と、苦心してきたのである。

その武田と徳川が、またも戦うらしいというのであった。

奥平貞能は、どっちに味方するでもないような中立のかたちで、とにかく、この年を越した。

次の年、元亀三年が来た。

武田信玄は、甲州から大軍をひきいてあらわれ、遠江・三河などを、どしどしと攻め、徳川家康の城や領地が一つ一つと武田軍に攻め落とされてゆく。

「これはどうも、武田に味方しておいたほうがよさそうだ」

と、考える武将たちが多くなった。

奥平貞能にも、

「わしに味方をせよ」

と、武田信玄が使者をよこした。

むろん、徳川家康のほうからも、

「引きつづいて、徳川のために味方をしてくれるように」

と、いってよこしてきている。

「だがな、加乃」

鳥居強右衛門が妻に、こういった。

「殿さまはな、いよいよ武田信玄公にお味方なさるらしいぞ」

「やはり……」
「うん。武田信玄公は大軍を引きつれ、徳川をほろぼしたのちいよいよ織田信長公を相手に天下わけめの大いくさをするつもりらしい」
「で、わたしたちの殿さまは、武田がたに勝ちめがあるとお考えなされたか？」
「おれもそう考える」
「まあ……」
「おととしの姉川のいくさで、おれは織田軍のいくさぶりを見てきた。武田軍とくらべては、やはり弱い。徳川は強いが、これも武田信玄公相手では、多勢に無勢、とてもかなわぬさ」

三方ヶ原の戦争

その年の十月。
武田信玄は、三万の大軍をひきいて甲府の城を発した。
この武田の大軍は、いくつもの山をこえ、まもなく天竜川のほとりへ押し出して来た。
奥平家では殿さまの貞能も若殿の九八郎も家来たちとともにこの武田軍へ、加わっている。

二年前に味方した徳川家康を、今度は武田信玄とともに攻めるのである。
徳川家康は、浜松の城へたてこもった。
いろいろと、小さな戦闘がおこなわれたのち、浜松の北方二里ほどのところにある〔三方ヶ原〕の台地において、ついに武田軍と徳川軍が戦うことになった。
元亀三年の十二月二十二日であった。
大軍をひきいた武田信玄は、
「どうじゃ。くやしくても出てはこられまい」
と、無言のうちに浜松城の徳川家康へよびかけた。
そして、わざと浜松城のすぐうしろを、ゆうゆうとぬけて三方ヶ原へのぼったのである。
浜松城にいる徳川家康の兵力は、一万そこそこであった。これでは三倍の武田軍に向かって行っても勝てるはずがない。じっと城の中にたてこもっていれば、武田軍も手は出まい。そのうちに織田信長が助けに来てくれるかもしれない。
信長も家康に、
「今度は、がまんしたがよろしい。そうすれば信玄はあきらめて国へ帰るかもしれない」
と、いってきていた。
だから、家康は、がまんにがまんをした。

しかし、武田信玄が自分の国をふみにじり、自分の城のすぐそばを堂々と通りぬけて、

「くやしかったら、出て来い」

と、いわぬばかりのやり方をみているうちに、

「よし！」

家康は、ついに決心をした。

「このまま、だまって武田軍を通させては、おれの名にかかわる。この三河はおれの国ではないか。たとえ負けてもよい。おれの国はおれがまもるのだ！」

そのとき徳川家康は、三十一歳だ。

「武田軍と戦うぞ！」

と、いうと、家来たちは、

「わあーっ……」

よろこびの声をあげた。

武田信玄なぞに「ばかにされてたまるか」と、家来たちも思っていたのであろう。

そして徳川軍は、わずかに五百ほどの兵を浜松城へのこし、ほとんど全軍が城を出て、三方ヶ原に待ちかまえている三倍の敵軍へぶつかっていった。

「ついに出て来たな」

武田信玄は、にやりと笑った。

これを信玄は待っていたのである。

浜名湖の東面にひろがる平原で、両軍のはげしい戦闘がはじまった。

強い風が吹きはじめた。

徳川家康は、姉川のときと同じように、みずから馬上に槍(やり)をふるって奮戦した。

馬とよろい武者と、槍と刀とが、もうもうたる土ほこりの中にうずを巻いてもみ合った。

両軍とも、その軍隊の強さにおいては天下に知られている。

だが、なんといっても三対一のいくさであった。

ついに……。

徳川軍は打ちやぶられた。

「ひけ、ひきあげよ」

家康も、退却を命じないわけにはゆかなくなった。

そして彼は、みずからあとにのこって敵をふせぎ、残る家来たちを浜松へ逃がしたのち、ただ一騎で、浜松へ引きあげて来たという。

なかなかに、できないことだ。

この三方ヶ原の戦争に、徳川軍はたしかに負けた。

負けたがしかし、

「徳川家康という大将はりっぱなものだ。自分の国をまもるためには、あれだけ、い

のちがけで戦うのだからな」

「大敵に対して、すこしもおそれず攻めかけた勇気はおそるべきものじゃ」

「大将みずから最後までふみとどまって、家来たちを逃がしたそうではないか」

「徳川殿は信じてよい大将だ！」

こういう評判で、もちきりとなったのである。

この戦争に、鳥居強右衛門は主人の供をしていなかった。

彼は、作手の城のるすをまもる隊にはいっていたからだ。

若殿の九八郎が、やがて作手へ帰って来たとき、

「おい、強右衛門」

若殿は目をかがやかせ、

「徳川家康公は、まことにりっぱだ。おれは三方ヶ原で徳川のいくさぶりを見て、すっかりほれこんでしまったぞ。ああいう大将の下についていればまちがいはない」

と、いったものだ。

長篠（ながしの）の城へはいる

この奥平九八郎の〔ことば〕は、三年後に実現した。

三方ヶ原のいくさがあった翌年に、武田信玄は五十三歳で急に病死してしまった。

このあとは、信玄の子の武田勝頼（かつより）が家督をついで、武田軍を指揮している。

勝頼も父にはおよばないけれども、非常に勇猛ないくさのうまい大将なのである。

しかし、奥平家では、

「もう武田に味方することはない」

と、考えていた。

殿さまの貞能は、すでに隠居し、若殿だった九八郎が奥平信昌と名のり、いまは作手の〔殿さま〕になっている。

「武田よりも徳川に味方をすべきだ」

というのは、だから奥平信昌の信念だといってよい。

家来たちのおもだった人びとの中には、

「殿さまはお若いから物事がわからぬ。武田はまだまだ強く大きい」

と、反対するものも、かなりいた。

だが、なんといっても大英雄であった信玄をうしなった武田家は、じりじりと、徳川家康や織田信長に圧迫されていった。

武田がたの城の一つであった長篠城が、徳川がたに攻めとられたのも、信玄が死んでからのことだ。

「どうしても、長篠の城を取り返したい！」

と、武田勝頼はおこっている。

むりもなかった。

長篠は、作手の東方四里ほどのところにある。

城は、二つの渓流が合する高いがけの上にあり、北がわは山また山である。そして東、南、西の三方のがけ下を谷川があわをたてて流れている。

まことに要害の城なのだ。

だから、武田も徳川も、この長篠の城だけは、なんとしてでも自分の物にしておきたいのである。

ことに徳川家康にとっては、自分の国の中にある城なのだ。ここまで武田軍にとられてしまっては危険きわまりない。

天正三年の二月に、徳川家康は作手の奥平信昌へ、こうたのんできた。

「いよいよ、武田軍が長篠へ攻めかけてこようとしている。この城だけは、なんとしてもまもりたい。

といって、いますぐに私が岡崎や浜松をるすにして長篠まで行くわけにもゆかない。どうであろうか、ひとつ、長篠城をあなたのちからでまもっていただけないだろうか。私のところへも、まもなく織田信長公が兵をひきいて駆けつけて来てくださるという。そうなればかならず、私も、そちらへ兵をひきいて出向き、武田軍を追いはらってしまう。

それまでの間、どうか、あなたに長篠をまもってほしい。あなたの家の将来については、この家康がいのちに替えてもひきうける。どうか、おねがいする」

この家康の手紙を見て、

「よし！」

すぐに、奥平信昌は家康からのたのみをひきうけることに決めた。

（これからの天下をおさめるものは、織田か徳川だ）

と、見きわめをつけたからである。

信昌は、このとき二十一歳の青年殿さまであった。

そして信昌は、父の貞能を人質として岡崎の徳川家康のもとへ送った。

これは徳川を裏切らぬ証拠としたのである。

同じように、信昌は妻と子を武田勝頼のもとへ前から送っている。

しかし、いまは武田を裏切って、徳川の味方になったのだから、遠い甲州の武田の国にいる妻や子は、どうなるかしれたものではない。

「たいへんな決心をなされましたな」

と、鳥居強右衛門が若い主人にいった。

「妻や子のいのちはあるまい。しかし、奥平の家と領地と家来たちが、この戦乱の世に生きのこるためには、これもしかたがないのだ」

「殿は、かならず徳川がたが長篠の城を助けに来てくれるとおもわれますか？」

「おもう」

「なれど、ご家老がたや、えらいご家来衆は、長篠へたてこもることに賛成してはおりませぬ」

と、強右衛門も、殿さまが子どものころからつきそっているだけに、心配であった。

「三方ヶ原のときのことをおもうてもわかる。家康公は信ずるにたる大将じゃ」

ついに殿さまは反対を押しきって、作手の城を出て、わずか五百の兵をひきい、長篠の城へはいった。

鳥居強右衛門も、妻や子たちと別れ、殿さまとともに城へたてこもることになった。別れるとき、彼は妻や子に、こういった。

「今度は、なかなかに苦しいいくさになるだろう。だが、おれは死なぬ。元気で帰って来るからな」

しかし、妻の加乃は夫を送り出すとき、いつもとはちがう不安を感じて、青い顔の色になっていた。

城をまもる奥平軍

武田勝頼が、二万以上の兵をひきい、甲府の本城を出発したのは、四月にはいってからである。

天下をおさめるのは織田信長か、または武田信玄か……と、世にうたわれた英雄・

信玄の子として、

「父がなくなったからといって、武田家のちからがおとろえたといわれては、わしも天下に顔向けがならぬ」

と、勝頼は、激しい闘志を燃やしていた。

「自分が死んだことを、三年の間はかくしておくように」

と、武田信玄はいいのこしている。だが、とてもかくしきれるものではない。信玄が死んでから二か月もすると、

「武田信玄が死んだという世のうわさは、ほんとうらしい」

徳川家康は、すぐさま浜松の居城を出て、長篠へ向かった。

そして、それまでは武田の城の一つであった長篠を攻め取ってしまったのであった。

これが一昨年のことだ。

それだけに……。

「今度こそは、長篠をうばい返さぬと、武田のちからを天下にうたがわれることになる」

武田勝頼の意気ごみは、すさまじいものである。

武田の大軍は、四月の末になると、作手や野田などを手中におさめた。

これで、奥平信昌の領地も、鳥居強右衛門の妻や子がるすをまもっている土地も、みな武田がたの勢力の下におさめられたことになる。

「次は長篠じゃ！」

武田勝頼は一万七千の兵をひきい、たちまちに長篠へせまり、城を包囲した。

「さあ、いよいよ来たぞ」

長篠城にたてこもる奥平信昌はじめ家来たちは、合わせて三百五十にすぎない。これに徳川家康から、

「長篠の奥平信昌を助けよ」

と、命じられた三河・御油の領主、松平景忠が二百にたらぬ兵をつれて長篠へたてこもっている。両軍合わせて五百あまり。これに反して武田軍は一万七千。

「こ、これでだいじょうぶなのか……？」

「徳川軍は、ほんとうに約束をまもって助けに来てくれるのだろうか？」

城の中にいる兵たちは、がけの下へ、ひしひしとつめかけた武田の大軍を見て、たとえようもない不安を感じはじめた。

だが、二十一歳の殿さまである奥平信昌は、

「十万の大軍をもって攻めかかろうとも、この長篠城は落ちぬ。安心せい」

にっこりと笑い、家来たちをはげましている。

徳川家康も、武田軍が攻めかけて来る前に、米を四百俵も長篠へとどけてくれた。

「その米がなくならぬうち、必ず、助けにまいる」

と、家康は奥平信昌に誓っているのだ。

ここで、長篠城がどんな城か、書いておきたい。

城は、寒狭川と大野川とが合流する地点のがけの上にある。このがけの高さは、五十メートルもあるし、川の幅も約五十メートル。

がけの上の長篠城は——本丸・野牛曲輪・二の丸曲輪・三の丸曲輪・弾正曲輪の五区画があり、その外がわに瓢丸・服部曲輪の二区画がある。

城のうしろ（北面）は、山地であるから、どうしても武田軍は、川をわたって城へ攻めかからねばならないのだ。

武田勝頼は、使者を送り、奥平信昌に、こういってやった。

「千にもたらぬ兵で、とても、その城をまもりきれるものではないぞ。よいか、信昌。おぬしは、わしを裏切り、徳川家康に味方をした。まことに武士にあるまじき仕様である。しかし、いま、いさぎよく、城をあけわたせば、わしも怒りはせぬ。どうじゃ、よう考えてみよ。

おぬしは、わしを裏切らぬというあかしをたてるため、妻と子を、わしにあずけてあるのだぞ。おぬしが、どうあってもわしにそむくというのなら、おぬしの妻と子のいのちはない。わかっていような、信昌。どうじゃ、どうじゃ？」

けれども奥平信昌は、

「城は、わたさぬ」

きっぱりと返事をしてよこしたので、武田勝頼は、怒り、

「よし、甲府にいる信昌の妻子を死刑にせよ」と、叫んだ。

その夜……。

城の本丸の一室で、奥平信昌は、ひとりさびしく酒をのんでいた。むりもない。かわいい妻や子が殺されてしまうのだ。

（だが……武田家についていたのでは、近いうちに、きっと、わしたちも武田勝頼公とともにほろぼされてしまう）

と、奥平信昌は見きわめをつけている。

（いまに、日本の国は織田信長公によっておさめられるであろう）

だからこそ、織田とは兄弟のような関係にある徳川家康に味方することに決心をした。

（なれど……もしも、武田が徳川をほろぼしたら、わしも二度と生きてはおられまい）

奥平信昌も、長篠へたてこもる前には、ずいぶんとなやんだものであった。

「だれじゃ？」

信昌は、ろうそくのうす暗い光りを横顔にうけながら、きっと、戸口のほうを見た。

のっそりと、黒く大きい人影が一つ、この板張りのへやへあらわれたからである。

「強右衛門にござります」

人影が、こたえた。

「なにをしに来た？」

「おこころのうち、お察し申しあげます」

「よい。かまうな」

「なれど……」

「妻や子もたいせつじゃ。なれど、奥平の家には領地もあり家来もある。奥平家あってのわしであるし、妻や子である。いまは、わが家をまもらなくてはならないときだ」

「はっ……」

「どうだ、兵士たちは落ちついておるか？」

「落ちついているとは申せませぬ」

強右衛門は遠慮なくいった。

「あれだけの大軍にかこまれましては、とても……」

「待て。おまえも落ちつかぬのか？」

「いささか……」

正直にこたえる強右衛門を見て、この若い主人は、急に、おかしげに笑いだしながら、

「わしも、落ちつかぬ。だが、みなにいってはならんぞ」

といった。

武田軍の城攻め

武田勝頼は、まもなく一軍をひきいて、徳川家康がこもる吉田城（現・豊橋市）を攻撃するため、長篠を出て行った。

むろん、一万ほどの武田軍は長篠に残っていたから、城の中では相変わらず手も足も出ない。

勝頼は、

「長篠を助けに来ても、むだじゃ」

という闘志を見せるため、吉田城をおびやかしたわけだが、家康があまり出て来ないので、

「徳川の臆病ものめ」

といい残して、ふたたび、長篠へ引き返して来た。

「城は堅くとも、城兵の数は少ない。もみつぶしてしまえ！」

武田勝頼は、ついに城攻めをはじめた。

五月十一日の早朝になると……。

「うわあ……」

武田軍が、川と川の合流地点から攻めかけてきた。

そのころの五月下旬は、現代の七月はじめにあたる。

すでに、夏であった。

ひざから腰のあたりまで川水につかりながら、武田の兵たちは竹の束をいくつもかつぎ、しぶきをはねあげつつ迫ってくる。

「それ、来たぞ」

城内の奥平の兵たちも、川べりの〔野牛門〕とよばれる城門へつめかけ、いっせいに矢をはなつ。

武田の兵が水けむりをあげて倒れる。

「撃てい！」と、対岸の武田軍の中から鉄砲隊が押し出し、

――だ、だあん……。援護射撃をおこなった。

このころ、鉄砲はまことに貴重な新兵器であって、長篠城には五十丁ほどしかないが、武田軍は千以上の鉄砲隊がいる。

武田兵が、川をわたり、かついでいた竹の束を〔野牛門〕の外側へつみかさねはじめた。

「あっ……いかんぞ」

「敵は、あの竹の束へ火をつけるつもりだ」

本丸の〔やぐら〕の上から、これを見た奥平信昌は、

「あぶない。門をひらいて切って出よ！」と、命じた。

川べりから〔野牛門〕まで十メートルほどの高さがあり、武田軍は竹束をつみ重ね、これで上から射かける城兵の弓をふせぎつつ、「のぼれ、のぼれ！」じりじりと押しのぼって来た。

野牛門が内側から、ひらかれた。

先頭に、鳥居強右衛門が、太い鉄棒をもってあらわれた。

「さあ、こい！」

下からはい上がって来る武田兵の頭上へ、強右衛門の鉄棒がうなりをたてて飛ぶ。

「ぎゃあっ……」

五名の武田兵が、鉄棒でなぎはらわれて、川へどっと落ちこんでいった。

奥平兵の弓隊もあらわれ、どしどし射かける。

やっとはい上がった武田兵は、奥平兵の槍に突き落とされる。おもしろいように、敵が川へ落ちこむ。

とにかく、一歩も野牛門へ近づけてはならぬ。

武田兵は竹束へ火をつけたが、とても城門へはとどかぬ。

「いかぬ。ひけい」

武田勝頼も、この攻撃の無謀さがわかったらしい。

総退却を命じた。

「こんないくさなら、らくなものだ」

「いつでも来い、相手になってやるぞ」

などと、城内へひきあげた奥平の兵たちは、だいぶ意気が上がってきたようだ。

翌日。

今度は、武田軍が川にいかだをうかべて攻めてきた。

すでに武田軍の半数は、寒狭川の上流へすすみ、ここから、遠まわりに川をわたっていた。

そして、これらの部隊は長篠城のうしろの大通寺山へ陣をかまえ、山の上から城を見おろすかたちをとった。

こうして城は、前面の川をへだてた下と、うしろの山の上との武田軍にはさまれ、完全に包囲されてしまっている。

次の日の十三日の夜。

大通寺山の武田軍が、突如、城の瓢丸へ攻めかけてきた。

奥平信昌は、

「いよいよ苦しくなってきたな。よし、わしが出る」

みずから本丸を出て、指揮にあたった。

今度は、はい上がって来る敵を突き落とすわけにもゆかぬ。

武田軍は、瓢丸のへいぎわまで来ると、何本もの太い綱をへいへからみつけ、

「えいおう、えいおう！」

おめき声をかけつつ、へいを引き倒そうとするのだ。
こちらもまた、綱をへいへ結びつけ、これを内側から、引っ張りふせぎにふせぐ。
まるで綱引きのかたちになったが……。
「ああ、もういかん」
「倒される、倒される……」
なんといっても武田軍の兵力が大きい。
ちから負けになって、へいが倒れかかった。
「よし、見切れ。ここはもうよい。一同、すぐさま城内へ逃げこめ！」
信昌が叫んだ。
待ちかねたように、奥平兵は綱をすてて〔三の丸曲輪〕へ逃げこんだ。
武田軍が怒濤（荒波）のように〔瓢丸〕へなだれこんできた。
「早く、早く……」
三の丸曲輪は、瓢丸とちがって土塁や濠もあるし、城門も堅固であった。しかし、この城門のとびらをしめきらぬうちに武田軍が押しこもうとする。
ここで、奥平の鉄砲隊が、はじめてあらわれ、いっせいに射撃をおこなったものだから、敵がばたばたと倒れる。
とうとう、武田軍は三の丸へ押しこむことをあきらめた。
が……瓢丸は武田軍に占領されてしまった。

敵は、城門すれすれのところまでみちあふれている。
「もう、いかぬ」
「まだか……徳川軍は、まだ助けに来てくれないのか……」
「来たところで、この武田の大軍に勝てるわけがない」
「徳川家康は、ずるい」
「約束を破って、おれたちだけを見殺しにするつもりなのだ」
「だから、おれは、この城へ来るのがいやだったのだよ」
「うちの殿さまは、うまうまと家康にだまされたのだな」
「そのとおり、そのとおり」
「ああもう、ここで死ぬのか……」
「女房や子どもたちに、もう会えないのだなあ」
奥平の兵たちも、不安になって、さわぎ出したらしい。
いや、兵たちのみではなかった。
奥平信昌は、おもだった家臣たちから、つよい非難をあびせられていたのである。

決死の使者

五月十四日の夜。

長篠城・本丸で重要会議がひらかれた。

重臣たちは、口ぐちに、若い殿さまを批判しはじめた。

「こうなることはわかっていたればこそ、われらもあれほどにおひきとめ申したのでござる。殿よ、ごらんなされ。信玄公がなくなられても、武田の勢力は、いささかもおとろえてはおりませぬ」

「われらのことばを押しきってまで、徳川や織田をたのみになさる殿のおこころがわからぬ」

「いかにも。徳川も織田も、このわれらの苦戦を救うてだてもないではありませんか」

「なんのために、籠城をせねばならんのか、わしは、わからぬ」

みな、古くからの家臣だし、中には殿さまの一族もいる。二十一歳の奥平信昌のことを、

「まだ殿さまは子どもじゃよ」

と、見ているだけに、少しも遠慮をせず、ずけずけといいきるのだ。

信昌の色白の、ふっくりとした顔に血がのぼった。

信昌は、こういった。

「いざとなったら、このおれが腹を切る。そうしたらおまえたち、この城をあけわたし、武田勝頼に降参すればよい」

すると、塔坂半兵衛という重臣が、

「よろしゅうござる。そうしていただきましょう」

と、叫ぶようにいった。

これを、とがめる者はひとりもいない。

重臣たちのうしろには、縁側から外にまで、五十名ほどの家来がつめかけていたが、だれひとり、口を出す者がいなかった。

このころ、すなわち戦国時代の殿さまと家来の間柄は、およそ、こうしたものであった。

殿さまに、少しのすきが出ても、家来たちはついてゆかない。

現代の政治家たちがしているような、なまぬるいことでは、家来や領民をおさめてゆくことはできない。

なにごとにも、命がけなのである。

だから殿さまの奥平信昌も、命がけで徳川家康に味方した。

ところが、家康は約束をまもらず、まだ長篠へ駆けつけてはくれない。これでは信昌も、自分の家来たちへ〔うそ〕をついたことになる。

だから〔殿さま〕のほうが、わるいことになるのであった。

すべての責任は、殿さまにある。これは、どこの大名の場合でも変わりがない。家来と領民をまちがいなくみちびいてゆけないものは〔殿さま〕ではないのだ。

「むう……」

奥平信昌は、かすかに、うめいた。

十六歳の若い妻と子を殺してまでも、家（国）をまもるために決心してやったことが、むだになろうとしている……。

まだ、あきらめきれなかった。

信昌は、けんめいに声を張って、

「おれは、まだ、あきらめぬ。徳川どのが、この長篠を捨てるはずはない。ここが敵の手にわたれば、三河や遠江の国々もかならず武田のものになってしまうであろう。徳川が武田に負ければ、いま一歩というところまで天下をつかみかけている織田信長公も、うしろから武田勝頼に攻めかけられる。ゆえに、徳川も織田も、この長篠を見すてはおくまい」

すると、また、

「殿は、あまりにも徳川と織田を買いかぶりすぎておられる」

「はや、城をあけわたすがよろしゅうござる」

「みれんなふるまいをあそばされるな」

とまで、いいだす重臣がいる。

城をあけわたせ、ということは、殿さまに「死ね」ということなのだ。こうなると、若い殿さまの味方につく家来たちもいないではない。たがいに大声を張りあげて口論がはじまる。

風も絶えた暑苦しい夜であった。

広間から廊下へ、ぎっしりとつまった家来たちの土ほこりと汗と血にまみれたからだから、むんむんと異様なにおいがたちのぼっている。

急に、若い殿さまが立ちあがって両手をひろげ、

「しずまれい！」

と、叫んだ。ざわめきが、ぴたりとやんだ。

奥平信昌は、

「おれが死ぬのはよい。だが、おれも、徳川と織田が、この城を……いや、この奥平信昌のことをなんと考えているのか、それを知りたい。徳川家康公は、このおれをたのみにおもわれたからこそ、この城をまもらせたのだ。おまえたちがいうように家康公が、そのように簡単にうそをつく人かどうか、それをたしかめずに腹を切るのはこころのこりである」

そして、彼は若々しい顔をなおも紅潮させ、

「見よ。われらは敵にかこまれ、外のようすは、まったく、わからないではないか。外のようすがわからずに、ここでいま、さわぎたててもしかたがあるまい。もしかすると、徳川軍が、この城へ向けてすすんでいるやもしれぬではないか……」

「いまさら、なにを申されるか」
「だまれ、殿の申さるること、もっともじゃ」
「うるさい」
「なにが、うるさい」
またも家臣たちが、さわぎはじめる。
鳥居強右衛門は、廊下のすみにいて、このようすを、じっとだまりこんだまままきいていた。
（もうだめだな……）と、彼もおもう。
（あすにも、この城は武田の手に落ちるかもしれない。それよりは……）
それよりは、こちらから先に、殿さまが腹を切って城を敵にわたしてしまったほうがよい。家来たちの命が助かるからだ。
敵も、責任者の〔殿さま〕をゆるしはせぬが、降伏した家来たちを罰することはない。それが当時の掟なのである。
（もうだめだ……）
おもいつつ、強右衛門の頭の中には、五年前のあの姉川の戦争へ〔若殿〕とともに出陣したときの光景が思いうかんだ。
あのときの……徳川家康の戦いぶりは実にすばらしかった。
自分が兄ともたのむ織田信長のために、小兵力をもって死にものぐるいの苦戦をつづけ、そして、ついに勝った。
（あの、家康公という大名は、簡単に人をうらぎるような人物ではない……だが、武田の大軍の前には家康公も手が出ないのだろうか……しかし、ここでもし、殿さまやおれたちを見すてたら、家康公はうそつきだと天下の人たちにいわれるにちがいない。そのことを知らぬ家康公ではあるまい）
三方ヶ原では、負けると知ってなお、武田の大軍にぶつかっていった徳川家康なのである。
そのとき……。

何かいいだした殿さまの声が、強右衛門の耳へはいった。
「だれか、この城をぬけ出して、おれの手紙を岡崎城の徳川どのへ、とどけてくれるものはないか？」
奥平信昌が、こういうと、一同だまりこんだままになった。
決死のかくご……というよりも、それは死ぬために城を出るようなものだ。
この武田軍のかこみの中を、どうして突破できよう。
「いないか。だれかおらぬか！」
はげしい声で、また殿さまがいったとき、鳥居強右衛門は、ほとんど無意識のうちに立ちあがり、こういいだしていた。
「それがしが、やってみましょう」

のろ牛、城をぬけ出す

鳥居強右衛門の声に、広間へ充満している人びとが異様などよめきをあげた。
「高岳の、のろ牛が名のり出たぞ」
「ばかな男だ。この、きびしい敵の包囲の中を、あいつはどうやってぬけ出るつもりなのだろう」
そうした人びとの〔ささやき〕は、
「よし！」
大きくうなずいた奥平信昌の声に、しずまりかえった。
「強右衛門、行ってくれるか……」
殿さまは立ちあがり、両眼をぎらぎらとかがやかせている。
よく名のり出てくれた……というよりも、
（よく、その気になってくれたものだ……）
殿さまのほうでも、びっくりしているのである。
奥平信昌だとて、この敵のかこみを突破し、岡崎の徳川家康のもとへ使者が行きつける見こみは、百のうち一つほどの可能性しかないと考えていたほどなのだ。
それだけに、この若い殿さまはうれしかった。

「強右衛門。まいれ」
こういって先へ立つ信昌のうしろから、強右衛門は、広間の人垣をわけて行った。
「よせ、よせ」
「あぶないぞ、強右衛門」
「女房やかわいい子どものことを忘れたのか」
友だちが、そでを引いてとめたが、強右衛門はかまわなかった。彼は、広間を出て廊下をわたり、奥平信昌のへやへはいってゆく。
その時代の五月十四日は旧暦であるから、現代の六月末か七月はじめごろの気候とおもってよい。昼間のうちは、毎日、はげしい夏の太陽が照りつけるが、夜になると山の中だけに、冷え冷えとしたやみにあたりがつつまれてしまう。
自室に強右衛門をまねき入れた奥平信昌は、
「ま、すわれ」
やさしくいった。
「は……」
「何か、のぞみがあるなら、えんりょなく申してくれ」
のぞみというのは、恩賞のことだ。
決死のかくごで出かけるのだから、もし自分が死んでしまったとき、
（あとにのこった妻や子の身の上は、どうしてくれるか？）

家来が殿さまに前もって聞いておかねばならぬのは、このことであった。それでなくては、安心して働けるものではない。

また、生きてもどったときには、

（どれほどのほうびをくださるのか？）

このことも、聞いておくべきことだ。

戦国の時代には、主人と家来との間は、このように非常にはっきりとした男どうしの約束と約束によってつながれていたのである。

だからこそ、殿さまのほうから、

「のぞみがあるなら、えんりょなくいえ」

と、いいだしたのである。もちろん、強右衛門はこのとき、いろいろと自分の〔のぞみ〕を申したてたし、殿さまもこれを承知した。

「では、行ってまいります」

強右衛門が、ずんぐりとしたからだをもちあげかけたとき、奥平信昌が、

「強右衛門……」

「はあ？」

「それにしても、よく引きうけてくれたな」

「いや……」

「引きうけた理由をききたい」

「それは……それは、それがしも殿さまと同じように、徳川家康公を信じておりますから」

「そうか、そうか」

「しかも、あのように重臣のみなさまがたが反対をなされる中で、殿さまがおひとりで、そのお胸の中にある決心を変えようとなさらぬきついご様子を見て、それがしも殿さま同様、岡崎へ駆けつけ、徳川軍の様子を見てまいりたい……そう思ったのでござります」

「なるほど、なるほど」

「それに、殿さまは強右衛門とのお約束を、かならずおまもりくださることと存じました」

「まもるとも！」

「では、もしも強右衛門が死んだとき、妻やわが子の行く末を……」

「いま、おまえと約束したではないか。安心せよ」

「まことでござりますな？」

「まことじゃ」

殿さまは、ちから強くうなずいて見せた。

これで、すべてはきまったのである。

まもなく……。

このあたりの百姓の姿に変装した鳥居強右衛門は、奥平信昌から徳川家康へあてた手紙を持って、長篠城をぬけ出すことになった。

その手紙は、うすくてじょうぶな紙に書かれ、これを細く細く巻きかため、一本のおはしほどの太さになったのへ、上から〔ろうそく〕のろうをたらしてなおもかためる。これは水にぬれても中の手紙をそこなわぬためにであった。この手紙を、強右衛門は着物のえりの中へぬいこめてしまった。

そして、強右衛門は、城の本丸の不浄口の前へ立った。

不浄口とは、便所のことである。

城の中の便所であるから、大きな穴を掘り下げ、この穴は城のがけ下をながれる寒狭川へ通じている。だから城の中の武士たちがする大小便は、穴から川の中へ落ちこむようになっているわけだ。

つまり、強右衛門は、この便所の穴からがけ下の川へぬけようというのであった。

「強右衛門、たのむぞ」

家来たちとともに、不浄口まであらわれた奥平信昌へ、

「よもや、この穴からふんだらけになって川へ落ちようとは、敵も考えておりますまい」

と、強右衛門はにやりと笑った。

「おう。ようもくふういたした」

家来たちも、あっけにとられた顔つきになり〔高岳ののろ牛〕を見つめている。

「では……」

信昌へ一礼するや、強右衛門は穴のふちから下へたらした綱へ手をかけた。

のろしの合い図

（臭い……）

綱をつたい、穴の中をおりながら、強右衛門は顔をしかめた。臭いのも当然だ、大小便の通る穴なのだから……。

しかし、それだけではすまない。穴の底にたまっている大小便の中へ、強右衛門は胸のあたりまでつかりこんだ。もはや、臭いなどというものではなく、鼻がもぎとられそうに強烈な臭気であった。

呼吸がとまるかと思うほどだが、やっと、強右衛門は寒狭川に面した穴へ顔を出した。

川面は、穴とすれすれのところにあった。

両腕にちからをこめ、大小便の中からからだをもちあげるや、そのまま、彼は川のながれへしずかにもぐりこんで行った。

まもなく夜も明けるようだ。けれども、さいわいに強右衛門が川へもぐったころか

ら、たたきつけるような大雨となった。

川の向こうの三方をかこみつくしている武田軍の陣所の〔かがり火〕も、その雨のためか数がすくない。

川の深さは、四メートルほどもあったろう。

その川底へもぐったまま、強右衛門は武田軍の警戒の網の目をかわしながら、川下へ川下へとすすむ。

呼吸が苦しくなると、しずかにしずかに、川面へ顔を出して空気をすいこむ。また、川底へもぐる。

強右衛門の心臓は、人一倍じょうぶにできていたらしい。

武田軍も、この大雨の中を、まさかに奥平の家来が、このような方法で城をぬけ出したとはおもってもみなかった。

やがて、寒狭川は豊川（とよがわ）のながれに合する。この豊川へ出てから、強右衛門は水面に浮き、泳ぎはじめた。しだいに敵陣からはなれてゆくし、豊川の川幅はひろいから、岸の敵陣からも目がとどかぬ。

さらに一里ほども泳ぎ、川路（かわじ）の村に近くなってから、強右衛門はやっと岸へはい上がったのである。

すでに、朝が来ていた。雨は、まだやまぬが、このあたりにも武田がたの番所や陣所があるし、まったく油断はならぬ。

（さ、いよいよ、これからだぞ）

強右衛門は冷えきったからだをがくがくふるわせながら、雁峰峠（がんぽうとうげ）への山道をのぼりはじめた。

いっぽう、長篠城では……。

奥平信昌はじめ、家来たちが本丸の〔やぐら〕に集まり、西の空をじっと見つめたまま、いつまでも動こうとしない。

「うまく、敵陣の外へぬけ出ましたら、雁峰峠の頂上からのろしの合い図をいたします」

と、強右衛門がいいおいて行ったからである。

十五日の朝となり、雨もあがった。

「まだか、まだか……？」

「いや、もう武田がたにつかまってしまったのかもしれない」

などと語り合ううちに、

「おお！」

やぐらの上の奥平信昌が西の空をさして、叫び声をあげた。

西のかなた、雁峰峠のあたりから、くもり空へ、のろしの黒いけむりが立ちのぼりはじめたのを見たからであった。

「おう、のろしがあがったぞ」

「みごと、強右衛門め、ぬけ出したわい」
一同も、にわかに、よろこびの声をあげはじめる。
あとはただ、なんとかうまく、強右衛門が岡崎へたどりついてくれるのを祈るのみだ。
「強右衛門、よく、やってくれた……」
若々しい奥平信昌のほおに、感激の涙がつたわった。
「使者がひとり、この城を出たところで、どうにもならぬ。たとえ万が一、徳川の援軍が来るとしても、その日までに、この城は敵に攻め取られてしまうわい」
と、老臣たちは、まだ安心をするどころか、
「殿。この城を、いまのうちに敵へあけわたしてしまいなさるがよろしい」
などと、すすめる者もかなりいる。
敵の総大将・武田勝頼は、城のうしろの山すそへ本陣をうつし、それといっしょに武田軍の主力が川をわたり、一昨日の夜に攻め落とした〔瓢丸(ひさごまる)〕のあたりへ、ひしひしと押しよせる。
いまや、川をへだててどころではない。
小さな濠(ほり)ひとつへだてたのみで、長篠城内の四百にたらぬ将兵が、一万の武田の大軍と向かい合っているのだ。これでは、もみつぶされるのを待つばかりだ。
しかもがけ下の川の向こうには、七千の武田軍が戦旗をつらねている。きょうにでも敵の総攻撃がはじまれば、ひとたまりもなく、城は落ちてしまうことだろう。
昼すぎて……。
風が音をたてて鳴りはじめた。雲が走り、青い空がひろがり強い陽ざしが谷間へ落ちかかってきた。
さいわいに、この十五日には、敵の攻撃がなかった。
武田勝頼は、
「もはや、城を取ったも同じことじゃ。ま、急ぐにもおよばぬ。兵をゆるりとやすめ、総攻めにそなえておけ」
と、命令したからである。

織田の大軍きたる

鳥居強右衛門は、雁峰峠で〔のろし〕を打ちあげ、脱出成功を知らせたのち、まっしぐらに山道を走り出した。
このあたりは、強右衛門もよく地形を知っている。
(いまごろは、加乃も、子どもたちも畑に出て、あわをまいているだろうな……)
そんなことを思いながら、彼は、みどりがしたたるような山と山の間の道を駆けつづける。

（待っておれよ、子どもたち。父はな、殿さまの信じていなさることに、このいのちをかけた。きっと、父が徳川の援軍を城へ送ってみせる。父はな、たくさんのほうびを殿さまからいただく約束をしたぞ。畑もふえるし、家来たちもふえるのだ）

岡崎の城下は、長篠城からさしわたしにして、西のかなた、九里ほどのところにある。

しかし、山道だけにほねがおれたことはいうまでもない。

けんめいに、強右衛門は走った。

物も食べずに、走りに走った。

日が暮れた。

なおも走る。

夜が来た。

やすまずに、強右衛門は走りつづける。

自分でも、

（ふしぎだ。おれには、こんなにすばらしい体力があったのか）

と思うほどに、強右衛門の足は疲れを知らなかった。

夜がふけて……。

「ああ、岡崎へ着いた……とうとう着いたぞ」

強右衛門は、向こうのやみの中につらなる徳川軍の〔かがり火〕を見たとき、大声をあげて叫んだ。

叫んだつもりだが、からからにかわいた彼ののどからもれたものは、人間のことばではなく、まるでけもののような、うなり声であった。

「待て！」

番所の兵が数人、突如、強右衛門を取りかこんだ。

「どこへ行く？」

「岡崎のお城へ……」

「何だと？」

「それがしは、いま、長篠へ籠城中の奥平信昌の家来でござる」

番卒の問いに受けこたえしている間も、強右衛門は、岡崎の城下にみちみちている軍団と、かがり火の盛んなことを見てとっていた。

「もし……もしや、織田信長公の軍勢が、ここへ到着なされたのでは？」

その強右衛門の声へ、番所の中からあらわれた武士が、

「いかにも、夕暮れにご到着なされたのだ」

と、こたえた。

「おう、おう……」

強右衛門の歓喜の叫びなのである。

（まちごうてはおらなかった……やはり、信長公は家康公をたすけに駆けつけて来ら

れたのだ。そうなれば兵力も二倍となる。すぐに徳川軍が長篠を救いに……）

なのであった。

（まちごうてはおらなかった。おれも殿さまも、まちごうてはおらなかったぞ！）

鳥居強右衛門が敵中を突破して岡崎へあらわれたとき、

「あの、のろ牛が……？」

岡崎城内の、徳川家康のもとにいた奥平貞能が、驚いていった。

「ようも、城をぬけ出せたものじゃ」

この奥平貞能は、先代の殿さまで、わが子の信昌へ家をゆずりわたしてからは〔隠居〕の身になっている。

奥平信昌は、長篠城へたてこもったとき、

「けっして、あなたを裏切りませぬ」

という〔しょうこ〕に老いた父の貞能を、徳川家康のもとへ送りとどけたのだ。つまり隠居の奥平貞能は〔人質〕というわけであった。

やがて、鳥居強右衛門が岡崎の城へつれて来られた。

「強右衛……ようも来た、ようも来た」

と、隠居の大殿さまは、しわだらけの顔を涙でくしゃくしゃにさせ、

「で、城の様子はどうじゃ？」

「これに、殿よりのお手紙がござります」

強右衛門は、家康にあてたのとは別に、奥平信昌が父へあてた手紙をえりの中から取り出して、わたした。

徳川家康も、この場へあらわれ、自分あての手紙を、むさぼるように読みはじめた。

奥平信昌の手紙の内容を、ここにのべるまでもあるまい。

信昌は、父や家康に対し、最後に、こう書いている。

「……いざともなれば、それがしが腹を切って、家来どものいのちを助けるつもりでござる」

徳川家康は、すぐに、さっき、岡崎へ到着したばかりの織田信長へ、強右衛門のことを告げた。すると信長は、

「奥平家に、そのようにりっぱな男がいたか……よろしい。その強右衛門とやらを、ここへ呼んでいただきたい。あっぱれ、男の顔が見たい」

と、いいだした。

強右衛門が織田信長の前へあらわれた。

（ああ……信長公は、まことにりっぱな大将になられたなあ）

強右衛門は、目をみはったものだ。

あの姉川の戦争のとき、信長の顔を見たこともあるが、それから足かけ、六年の歳月がながれている。そのときとくらべると、いままのあたりに見る織田信長は威風りんりんとして、いかにも天下をおさめてはずかしくないだけの大名に見えた。

信長は色白の顔に血をのぼらせ、たかのようにするどい光りをはなつ目で強右衛門を見つめ、

「ようやった」

大声に、ほめてくれた。

織田と徳川の重臣たちが居ならぶ大広間の中で、信長に直接ほめられたということは、強右衛門のてがらが、日本じゅうにきこえひろまることと同じであった。

「ははっ……」

強右衛門は、平伏した。

その彼の胸の底に、妻と子どもたちの顔が浮かび、

（よろこべ。わしは、天下の信長公から、このように、おほめのことばをいただいたぞ）

故郷の妻と子に胸の中で呼びかけていた。

「強右衛門とやら、恩賞を、たのしみにしておれ」

と、またも信長の声が、

「安心せい、わしはな、三万の大軍をひきいて駆けつけて来たのじゃ」

「さ、三万……」

強右衛門は、驚いた。それほどまでに、織田信長が今度の武田勝頼との戦争にちからをこめていようとは、思わなかった。

さらに、信長がいった。

「鉄砲も三千ほどあるぞ」

「さ、三千も……」

また、強右衛門は驚いた。

この外国わたりの新兵器を三千も持っているということは、

（信長公が、それほどの金持ちだとは……）

むしろ彼はぼう然としてしまった。

長篠を取りかこむ武田軍の数倍もの鉄砲を、信長は持って来たというのだ。

（殿……）

強右衛門は、長篠城にいて（いまか、いまか……）と、自分の報告を待っている奥平信昌の顔を思いうかべ、急に、全身の血しおがわきたつのをおぼえた。

なぜか……？

いまの、この戦乱の世の中には、人びとの耳へはいってくることが、すべて、不安や迷いにみたされている。自分が長篠を出て来るときの奥平の家来たちのさわぎは、どのようなものであったか……。彼らの多くは「城をあけわたせ」といい、「殿さまが腹をお切りなさるべきだ」と考えていたではないか。

その中で……。

（その中で、殿さまとおれだけが、徳川と織田両軍の救援を信じた。そして、まさに

そのとおりであった！）

このことが、強右衛門を感激させたのである。織田・徳川軍は、明朝に岡崎を出発し、長篠へ駆けつけてくれるという。

「しかし、それまで城はもつか？」

信長にきかれたとき、強右衛門はからだに五寸くぎでも打ちこまれたような気がした。

「敵の総攻めがはじまりましたなら……とてもとても、まもりきれませぬ」

彼は、うなだれつつ、低い声でこたえた。

強右衛門の決心

岡崎城下の織田・徳川の連合軍は、明朝の出陣にそなえ、その準備にいそがしい。

しかし、

「それまで、城はもつであろうか……？」

奥平貞能が、しわだらけの老顔を悲しげにしかめ、強右衛門の両腕をつかみ、

「武田軍の総攻めがおこなわれたら……」

ふるえる声でいった。

強右衛門も顔をうつ向け、

「おそらく……？」

「そうなれば、ひとたまりもございますまい」

「やはり、な……」

「岡崎からの援軍が来るか、来ぬか……と、城中の将兵は、みな、まよっております。いや、とても助けに来てはくれまいと思っておりましょうし、この強右衛門が、ここへ、この岡崎へ到着したことさえも、みなみな、考えてもみますまい」

「うむ、うむ……」

「これでは、敵と戦う気力もおとろえ……いや、戦うより先に、城を敵に、あけわたしてしまうやもしれませぬ」

「そうか……」

「御大将のみが、援軍の到来を信じておわします」

「信昌のみがのう……」

貞能は、重臣たちにかこまれ、その反対をうけながら、ひとり敢然として、最後までのぞみを捨てていないわが子の奥平信昌の若々しい顔を思いうかべ、涙ぐんだようである。

「一時も早く……」

と、鳥居強右衛門は、織田信長と徳川家康へうったえた。

うったえたが、この夜ふけに、大軍が山道を行進することは、無理でもあるし、ま

だ出発の準備が完全でない。

信長も家康も、

「一刻も早く、したくを急げ」

と、各陣所へ命令を下しているのだが、いくら急いでも、あと二刻（四時間）はかかるものとみてよい。

「一刻も早く……」

もう一度、口走ったとき、強右衛門は自分でもわからぬ強い感情に全身がつきあげられ、

「このことを一刻も早く、長篠の殿へお知らせいたしたく存じます。このことを知ったなら、殿も城兵も勇気百倍、敵の大軍に立ち向かい、城をささえ切りましょう。それがし、これより長篠へもどりまする」

「何……」

と、織田信長が、

「それはあぶない。これまでの働きにてじゅうぶんである。もどってはあぶない」

家康も、

「敵に捕えられたらどうする。長篠の信昌殿も喜ばれまいぞ」

「いや」

と、強右衛門は激しくくびをふった。

「まいります。もどります」

その理由は、

（なによりも早く、殿に知らせたい）と、いうことだ。

次に、

（おれは、けっして敵につかまらぬ）という自信があったからである。

城をぬけ出し、岡崎へ駆けつけることができた自分に、強右衛門は強い自信をもったからである。

さらに、

（いまここで、城へもどったら、おれのてがらは、もっと大きなものになるぞ）という欲も出てきたからだ。

「熱いかゆを食べさせてくだされ。それをいただき、それがし、すぐさま長篠へ駆けもどります。だいじょうぶ、きっとやってのけてごらんにいれましょう」

そうしてくれれば、それにこしたことはないのであるが、

（どう考えても、あぶない。つかまれば殺されよう。これだけの男を死なせては惜しい）

と、信長も家康も考え、しきりにとめた。

だが、奥平貞能は、さすがに子を思う父親の心があり、

（あぶないが、うまくゆけば、城をまもる信昌のために……）

強右衛門が城へもどることを、胸の底ではのぞんでいる。

「では……」
強右衛門はかゆを食べると、すぐに立ちあがり、またもひきとめる信長や家康へ、
「だいじょうぶでござります」
といいのこし、まっしぐらに岡崎の城下を走り出ていった。

奥平信昌の決心

夜があけた。五月十六日である。
朝がすぎ、昼となった。
長篠城では……。
奥平信昌が、本丸の櫓(やぐら)の上に立ちつくしたまま、じっと、雁峰峠の方角を見つめている。
もしも、強右衛門が、
「岡崎からの援軍が、すぐにまいります」
と知らせてくれるなら、雁峰峠の空にのろしのけむりが上がるはずであった。
(だめか……強右衛門は敵に捕えられたのか……そうかもしれぬ。いや、そうであろう)
しかし、あきらめきれない。

目が血走り、いたみを感ずるほどに、奥平信昌は空をにらみつづけている。
立ちつくしたまま何時間も動かないので、彼の両足はこわばってしまい、絶えず小さな〔けいれん〕をおこしていた。
谷川をへだてた対岸の武田軍が、いそがしく、動きはじめている。岸べには、いちめんにさくを張りめぐらしはじめた。
虎落(もがり)といって竹を組み合わせたかき根のようなものを武田の兵たちが、たくさん作っているのが、がけの上からはっきりと見える。
さくや虎落で、城内の奥平軍ががけを下って逃げて来るのをくいとめようというのだ。
それはつまり、瓢丸(ひさごまる)まで押しつめている武田軍の主力の攻撃をささえきれなくなった長篠城のことを考えての準備なのだ。
城の北がわにみちあふれている武田軍の主力も、あわただしく動きはじめた。
これも総攻撃の準備をしているのであろう。
「もう、だめだ」
「殿が腹を切られて、敵に降参なさるがよいのだ」
またも、家来たちがさわぎはじめる。
夕暮れになっても、奥平信昌は櫓の上に立ちつくしていた。
(もう、だめだ)

信昌も、覚悟した。

しかし、まだ、あきらめきれない。

鳥居強右衛門が、敵に捕えられている場合も考えたのだ。

そうなれば、いまの長篠城が、このような危機に落ちたことを岡崎の徳川家康は知らぬだろうし、またこちらも、織田と徳川の援軍が、この長篠へ向かっていること（もしも向かっているとしたら……）を知るわけがない。

（徳川殿は、この城を見すてるはずがない）

このことだけは、いまも信昌は信じている。

二年前に、この長篠城を徳川家康が攻め取ったとき、家康は、

「この城だけは、なんとしても武田がたへ渡してはならぬ」

といい、たくさんの費用をかけて城を作り直し、鉄砲も弾薬も、できるかぎり運びこませている。

だからこそ、いま、奥平信昌も、わずかな兵力で三十倍もの敵をふせぐことができたのではないか。

西の空は、血のような夕焼けにそまった。

そして、夜のやみが長篠城をつつみこんだとき、奥平信昌は、はじめて櫓の上から降りて来たのである。

信昌は、居室におもだった家臣をあつめ、こういった。

「もはや、これまでじゃ」

重臣たちの中には、

（それみろ。いわぬことではない）

という表情をうかべるものもいた。

「おそらく、あすは敵の総攻めがあろう」

信昌は、いさぎよい態度で、

「敵が攻めて来たら、わしはひとりにて、城門をあけはなち、敵の前へ出て腹を切ろう。おぬしらは兵とともに降伏せよ」

と、いった。

それならば、今夜のうちに腹を切ったらよさそうなものだが、

（最後の最後まで、わしは待つ）

信昌は、まだ徳川の援軍を信じている。

援軍がまにあわぬから、

（腹を切る）

だけのことだと、彼は思っていた。

「おぬしたちも、よく、はたらいてくれた」

家臣たちは、無言で、殿さまの前から引きさがり、別のへやへあつまり、自分たちだけで降伏の相談をはじめたようである。

降伏するならば、できるだけ、自分たちに有利な降伏をしなくてはならぬ。
たとえば、
「われわれが、むりやりに殿さまへおすすめして、腹を切らせました」
と、武田勝頼にいえば、これは自分たちのてがらとなるわけであった。武田軍にしても、自軍の血をながさずに城が取れたことになるから、降参した奥平軍にも悪くはからわぬ。
奥平の兵を武田軍に引き入れることもできるし、そうなれば、一石二鳥ということにもなる。
重臣たちの相談は夜ふけてもなお、つづいた。
奥平信昌は、あすにそなえ、水でからだをふき清め、新しい膚着(はだぎ)と着替えた。
死ぬための用意である。

危機せまる

そのころ……。
鳥居強右衛門は、汗とどろにまみれつつ、必死で夜道を駆けつづけていた。
(一刻(いっとき)も早く、雁峰峠で、のろしを上げなくてはならぬ)
このことであった。

(のろしを見れば、殿も兵たちも、勇気百倍。きっと、一日や二日は城をもちこたえてくれよう。おれは、のろしを上げ、山の中にかくれる。そして夜になってから川へもぐりこみ、城のがけ下へ浮かび上がるのだ)
今度は城へもどるのだから、がけ下へはい上がったところを敵に見られてもよいわけだ。
がけ下へ上がれば、すぐに城兵が助けに来てくれる。
(しかし、けっして無理はしまい。あぶないときは岡崎へ引き返そう。そうすれば途中で、あの織田・徳川の大軍に出会える)
不安なのは、自分のるすに味方が降伏してしまうことだ。
そうなっては、強右衛門のてがらの価値がなくなってしまう。
だからこそ、
(一刻(いっとき)も早く、のろしを……)
と、彼はあせっていたのである。
(なれど……あの援軍の大きさ。あの鉄砲隊のすばらしさを知ったら、殿はなんと思われることか……)
奥平信昌が少年のころからつきそっていただけに、強右衛門もこうなると、ただ自分のてがらのためばかりではなく、若い殿さまに一刻(いっとき)も早く、このことを知らせたくて、胸がわくわくしてきた。

（やはり、殿とそれがしの考えはみごとに当たりましたな）

うれしくてたまらない。

山道から山道へ、彼は最短距離を選び、人間の足とはおもえぬ速さで走っている。疲れなど忘れていた。

気がつくと……。

強右衛門は、妻の加乃の実家がある清岳郷の近くへ出ていた。

ここまで来れば、全行程の三分の二を走ったことになる。

（いま一息だ）

あと五時間ほどで夜もあけるだろうが、

（それからが、むずかしいのだ）

このあたりから武田軍の見張りもきびしくなるであろうし、太陽の光をあびながら城へ近づくことは、危険であった。

（出て来たときのように、強い雨がふってくれればよいのだが）

と思ったが、空には、いちめんの星が光り、あしたの快晴を約束していた。

荒原（あわら）とよぶ村へ出た。

肩を寄せ合うように、かたまり合っている十軒ほどの百姓家には人けもないようである。

このあたりも戦場になると考え、村人たちはどこかへ逃げてしまったものか……。

星あかりに、ぼんやりと見える道を強右衛門はすすむ。

と……。

強右衛門は、ぎょっと立ちどまった。

どこかで、人の話し声をきいたように思ったからである。

（どこだろう？）

このあたりは、武田がたの兵士がうろうろしているはず。

（ゆだんはならぬ）

自分にいいきかせつつ、強右衛門は村をぬけ、村はずれの山道へかかった。

（や……？）

山道に面した雑木林の向こうに小さな農家があり、その家の中に、ちろちろと〔たき火〕が燃えているらしい。

「だれか、助けて……」

その家の中から、女の声が叫んだのを、強右衛門は、たしかにきいた。子どもの泣く声もきこえる。そして、武田軍の兵士らしいだみ声がそれにまじってきこえた。

石田の村へ、妻とかわいい子どもたちをのこして来ているだけに、強右衛門は何か捨ててはおけぬ気持ちになった。

武田の兵たちが、逃げずにかくれていた農家の女と子どもへ乱暴をしているらしいのである。

（しかし……こんなことにかまっているときではない）

強右衛門は、そう思いかえし、山道をのぼりかけた、その瞬間であった。

「ぎゃあ……」

ただごとではない子どもの悲鳴がやみを引きさくようにして強右衛門の耳へ飛びこんで来た。

（こ、子どもが、殺された……？）

そう感じたとき、強右衛門は夢中で雑木林へふみこんでいたのである。

鳥居強右衛門は、こうした人間であった。

いくら胸の中で（こうしなくてはいけない）と、思いこんでいても、自分のからだの中の血潮がさわぎ、感情を強くゆり動かされる事件がおこると、なにもかも忘れてしまう。

つまりは、それだけ人間の血が熱いということになるだろう。

危険な使者の役めを、

（あぶないな）

と思いつつ、若い殿さまの声と姿に心をうたれたとき、前後の見さかいもなく「私がまいります」と、立ち上がってしまったのも、こうした彼の血のさわぎ、性格がもたらしたものであった。

百姓家へ、彼が足音もたてずに近寄って行き、板壁の〔すき間〕から、中をのぞきこんだ。そして、

（あっ……）

おもわず、声をたてそうになった。

五歳ほどに見える男の子が血だらけになって土間に倒れている。おそらく、もう死んでいるだろう。

そして……。その男の子の母親らしい女が、火の燃えている炉ばたへあおむけにころがされ、そのまわりに武田の兵士が三人いて、乱暴なまねをしようとしているのだ。

少しはなれたところに、別の男の子がいる。この子は八歳ほどで、強い驚きのため、声も出ずに、まっさおな顔つきですわりこみ、ぶるぶるとふるえているだけであった。

（敵は三人……）

と見て、急に強右衛門は勇気がわいて来た。

彼は、開いたままの表の戸口から、太刀を引きぬきざま、

「こやつら、女、子どもに何をする」

叫びざま、猛然と中へおどりこんで行った。

「あっ……」

「こいつ……」

兵士たちは、驚き、女のからだのそばからはなれて、刀や槍をつかもうとしたが、もうまにあわない。

「えい！」

強右衛門が横なぐりにはらったやいばに、ひとりが切られて棒を倒したように土間へはった。

「こいつ！」

別のひとりは、片ひざをたてたところへ、強右衛門が打ちおろしたやいばに頭からあごへかけて割りつけられた。

びゅっ……と血が走った。

「う、うわ……」

兵士が倒れふしたとき、早くも強右衛門は最後のひとりへ襲いかかっている。

その兵士が、やっと槍をつかみ、身がまえたとき、強右衛門は下から敵の槍をはね上げ、からだをしずめざま、相手の足を切りはらった。

「あっ……」

がつん……と、敵の足の骨が切り割られる音がし、次いで強右衛門のやいばがすくいあげるように、この兵士の胴をなぎはらっている。

こやつも、倒れた。

あっという間に、三人の敵を切り倒した強右衛門だが、さすがに全身の力を使いきったとみえ、

「あ、ああ……」

うめき声をもらし、へたへたと、そこへすわりこみ、あとしばらくは声も出ず、ただもう荒い呼吸を吐くばかりであった。

女が身をおこし、兵士に殺された男の子へ駆け寄り、これを抱きしめ、声をあげて泣きはじめた。

「こ、これ……」

強右衛門が、あわてて女を呼び、

「し、しずかに……」

「は、はい……」

「声をたててはまずい。近くに、こやつらと同じ、武田がたの兵士たちがいるはず……」

だが、このとき……。

武田がたの兵士がひとり、この百姓家の板壁の〔すき間〕から、中をのぞいていたのである。

この兵士は、強右衛門に切り倒された三人の兵士の仲間で、このあたりを見まわっていたのであろう。そして、雑木林の向こうの山道を通りかかり、強右衛門と仲間たちの戦いの物音をききつけたにちがいない。

「おれは先を急ぐ。子どもひとりを失ったのは悲しいことだろうが……、ここにいるもうひとりの男の子のため、強く生きてくれ」

と、強右衛門は女にいった。

この女は夫に死に別れたのかもしれない。

女が、うなずくのを見て、
「おれのことは、だれにもいうな。早く、どこかへかくれろ」
いいおいて、強右衛門は外に出た。
このとき、すでに、のぞき見をしていた武田の兵の姿は見えなかった。ひとりでは強右衛門に、とてもかなわぬと思ったのであろう。
強右衛門はだれにも見られなかったと思いこみ、雁峰峠めざして山道をのぼりはじめた。

敵の本陣

(いま少しだ……もう、すぐに雁峰峠の頂上へ立てるぞ)
鳥居強右衛門は、見おぼえのある山道を、あえぎながらけんめいにのぼっている。
峠の上で(のろし)の火をあげれば、かなたの長篠城へ、
「織田・徳川の軍が城を救いに来てくれますぞ」
と、伝えることができるのであった。
「おう、もうまもなく……」
おもわず、強右衛門は声をあげた。
両がわの木の茂りがうすくなり、空の星がいちめんに強右衛門の頭上へひろがってきはじめた。
これは、峠の頂上が近いことをしめすものであった。
夜のやみの中をたいまつもつけずにすすむ強右衛門だが、足どりはしっかりしたものだ。
(若殿は、のろしをごらんになって、どんなに喜ばれることかな。おれと若殿の考えたとおりになったのだ。救いの大軍はあすの朝早く岡崎を出て、こちらへすすんで来るのだ)
強右衛門の顔いっぱいに、うれしそうな笑いがうかんだ。
何か、異常な物音がうしろできこえたのは、このときである。
(や……?)
強右衛門は足をとめた。
じっと息を殺し、あたりのけはいをうかがった。
(だれか来る……)
たしかに、山道を駆けのぼって来る足音を、強右衛門はきいた。それもひとりやふたりのものではない。
(いかんぞ、これは……)
彼は走り出そうとした。そのとき、右がわの山林の中から、
「くせ者がいたぞ!」

叫び声がした。
たいまつの火がやみの中に見え、槍や刀が光った。
強右衛門は夢中で、山頂へ向かって逃げた。
「あれだ。あの男だ。さっき、荒原の林で味方を三人も殺したやつだ！」
林の中から山道へおどり出た兵士のひとりがどなった。
この兵士は、さっき、百姓家の板壁の〔すき間〕から強右衛門が農婦と子どもを助けたのを見ていた男であった。
（とても、おれひとりではかなわない）
と、思い、この兵士はすぐさま引き返し、近くの陣所にいる武田がたへ知らせたにちがいない。
「待てい！」
うしろから突きこんで来た武田がたの兵士の槍をかわし、鳥居強右衛門も太刀をぬいた。
「それっ、取りかこんでしまえ」
林の中と、下の山道から、敵の兵士たちが十数名ほどいっせいにあらわれ、強右衛門をつつみこむように、
「わあっ……」
おめき声をあげ、飛びかかって来た。

せまい山道だが、強右衛門は猛然として戦った。
戦ったが、十数倍の敵が一度に、長い槍で遠くからなぐりつけるようにするので、どうしようもなかった。
「怪しいやつだ。つかまえろ。つかまえておん大将のもとへつれてゆけ！」
敵のひとりが叫ぶ。
がつん……と、敵の槍に腕をうたれ、
「あっ……」
強右衛門は刀を落としてしまった。
がつん、がつん……。
いくつもの槍の柄が、強右衛門の頭や肩や腰を、なぐりつけてきた。
さすがの強右衛門も、こうなってはたまらない。
山道へころげ倒れたところを、何人もの敵が折りかさなるようにして押えこみ、とうとう、強右衛門は武田軍に捕えられてしまったのである。
強右衛門がからだをきびしくしばられ、武田軍の本陣へ連れて行かれたとき、夜は明けはじめた。
天正三年五月十七日の朝となったのである。
大将の武田勝頼は、
「ここへ、つれてまいれ」

すぐに強右衛門を引見した。
「おまえだな、おととい朝、城をぬけ出し、雁峰峠にのろしをあげたのは……」
強右衛門は、答えない。
「岡崎の徳川軍へ、助けを求めに行ったのであろう」
勝頼は、にやりと笑ってきいたが、返事はなかった。
「強情なやつめ、名はなんと申すか？」
「鳥居強右衛門と申します」
「ほう、答えたな」
「名まえくらいなら、お答えいたします」
「こいつ、おもしろいことをいう」
勝頼も、さすがは武田軍の総大将だけに、不敵な強右衛門の態度を見てもおこったりはしない。
「どうじゃ。岡崎へ行っても、織田信長の軍勢はまだ着いてはいなかったであろう」
こんどは、答えない。
だが、武田勝頼を見ているうち、
（この大将も、なかなかりっぱだ）
と、強右衛門は思いはじめていた。
天下の英雄とうたわれた父・武田信玄にはおよばぬとしても堂々たる勝頼の風貌（ふうぼう）は、さすがに〔猛将〕とよばれるだけの迫力がある。
（よし）
と、強右衛門は決心をした。
どうせ、いまごろは織田・徳川の大軍が岡崎を出発していることだろう。別に、かくす必要もないのである。このことをいってやったら、この敵の大将がどんな顔をするか、ひとつ見たいものだと思ったのだ。
強右衛門は、そのことを勝頼へ話した。
「何……」
勝頼も、驚いたらしい。
「織田信長が四万もの軍勢を引きつれ、もはや岡崎に来ていると申すのか」
「はい」
「ふうむ……」
武田勝頼は、急に、だまりこんだ。
「そうか……それでおまえは、そのことを城中へ知らせるため、引き返して雁峰峠へのぼろうとしたのじゃな」
勝頼のそばにいた馬場信春（ばばのぶはる）という武田がたの重臣が、強右衛門にいった。
「さようでござる」
「ふうむ、大胆なやつめ」

と、馬場信春はあるじの勝頼を見て、
「おそらく、織田信長めは全軍をひきいて出てまいったにちがいありませぬ。くれぐれも無謀ないくさをなさらぬよう」
「わかっておる」
「では……」
「織田・徳川の両軍が、ここへ到着する前に、わしは、あの長篠城を攻め落としてくれるぞ！」
武田勝頼は、いさましくいいはなち、
「ところで鳥居強右衛門とやら」
「はい」
「わしがいうことをきけ。もしもきかぬなら、そのほうの命はないものと思え」

生か死か！

武田勝頼が鳥居強右衛門へ命令したことは、次のようなことを城中の奥平軍へ向かって叫ぶように、というのであった。
「岡崎からの援軍はまいりませぬぞ。武田軍へこうさんしてください」
もし、そのとおりにするなら強右衛門の命を助けるばかりか、

「そのほうを、わしの家来にして、りっぱな武士にしてやろう」
と、勝頼はいうのだ。
強右衛門は考えた。
いまここで、自分が死んでしまってはどうにもならない。
妻の加乃や子どもたちにも、もう会うこともできないではないか……。
（援軍が来るなどと、いわなければよかった……）
と、思ったが、すでにおそい。もっとも、何もいわなければ殺されてしまっただろうから、同じことなのだ。
（もうしかたがない）
あきらめた。あきらめて決心をした。
強右衛門は、うなずいた。
武田勝頼のいうことを承知したのである。
「よろしい」
と、勝頼はうなずき、
「そのほうは、まことに、いさぎよい男じゃ」
と、ほめた。おせじでもなんでもない。そのころは、命を惜しむことがけっして恥とされなかった時代なのである。
勝つときも負けるときも、いさぎよくであった。

強右衛門としても、やれるだけのことはやった。
成功の〔のぞみ〕があったから、命をかけてやった。
ところが、いまこうなっては成功の〔のぞみ〕は一つもない。
城の中にいる殿さまの奥平信昌や味方の兵士たちにはすまないが、成功の目あてもないのに死ぬわけにはゆかない。
これは強右衛門ばかりでなく、そのころの戦乱の世に生きていた男たちのだれもが、あたりまえのこととして考えていることなのだから、
（若殿も、おれの気持ちはわかってくだされよう）
と、強右衛門は思った。
朝の陽ざしが山の上から落ちかかってきた。
鳥居強右衛門はからだをしばられたまま、武田軍の兵士十名にかこまれ、城の野牛門と川をへだてたかわらへあらわれた。
「あっ……」
「強右衛門だ！」
「敵につかまってしまったぞ！」
城中の兵たちは、これを見つけて大さわぎとなった。
「なんと……強右衛門が敵に……」
奥平信昌も知らせをきき、すぐさま城の〔やぐら〕の上へ駆け出して来た。

武田軍が鉄砲を空へ向けて撃ちはなし、
「おーい。よくきけい！」
と、城へ向かって叫んだ。
「いま、鳥居強右衛門の申すことがある。よくきけい！」
渓流はあわをかみ、すさまじい音をたてて流れていた。
その渓流の向こうの長篠城では、奥平軍がいっぱいにひしめき合い、こちらを見まもっている。
「さ、申せ」
強右衛門をしばっている縄をつかんだ武田の武士がいった。
「おーい」
強右衛門は声を張りあげた。
「鳥居強右衛門でござる。殿に、殿に申しあげたい」
本丸〔やぐら〕の上に、小さく見える奥平信昌に向かって、
（若殿、それがしの申すことは、みなうそでござるぞ。それがしのことばをおききになっても、早まって城をあけわたされるな。それがしのうそを、どうか見ぬいてくだされ）
胸の中で、そう念じつつ、
「殿！　強右衛門にござる」

もう一度、よびかけた。

奥平信昌が、うなずいたのを強右衛門は、はっきりと見た。

（若殿。それがしは時期を見て、きっと武田軍から逃げ、そちらへもどりますぞ。どうか、それがしのいうことを信じてくださいませぬように……）

まだ、胸のうちに祈っている。

「こら！」

縄じりをつかんだ武士が、

「早く申せ！」

強右衛門の肩を強くたたいた。

「殿！」

強右衛門は、顔の表情もわからぬほど小さく見える奥平信昌に向かって叫んだとき、信昌が手にした青竹のつえを高く上げて打ちふった。

（よしよし。おまえの心はよくわかる。よく働いてくれた。敵に捕えられても、おまえの働きはりっぱなものであったぞ）

とでもいっているように見えた。

その殿さまの青竹のつえが何度も高く打ちふられるのを見たとき、強右衛門は強い感動に全身がふるえはじめた。

（おれと殿さまはまちがってはいなかった……織田と徳川の援軍が、かならず来てくれると信じていたのは、殿さまとおれだけだったのだ。それが、みごとに当たった。おれはうれしい。殿さまとおれのこころが一つになったのだものな）

殿さまは、まだ青竹のつえをふっている。

それは……やさしく、あたたかく、強右衛門をなぐさめているかのように見えた。

「殿。織田と徳川の援軍は……」

と、ここまで叫んだとき、強右衛門は自分でも押えきれない激しいものが胸へつきあがって来た。

彼は無我夢中で、こう叫んでしまった。

「四万の援軍は、けさ早くに岡崎を発し、いま、ここへ進軍ちゅうでござる。早まって城をあけわたしてはいけませぬぞ。いま一日のごしんぼうでござる」

強右衛門の最期

それは、強右衛門自身でさえ、思いもかけぬことであった。

彼は、武田勝頼のいうままに、

「援軍は来ませぬ。おあきらめください」

と、いうつもりだったのである。

しかし、若い殿さまが自分に向かって青竹のつえをふって見せたとき、強右衛門は

激しい感動をうけ、ついにほんとうのことを口ばしってしまったのだ。
「おのれ！」「うらぎり者め！」
武田の兵士たちが、強右衛門の縄を引っぱり、よろめく強右衛門をなぐりつけた。
長篠城の中から、
「うわあ……」
どよめきが鳴りわたった。
「織田・徳川の大軍が、ここへ、まもなく来るというぞ」
「強右衛門のおかげじゃ」
「よかった、よかった」
つい今までは、殿さまや強右衛門の信念を〔ばか〕にしていたことも忘れ、城中の将兵は、喜びの声をあげている。
だが、そのどよめきも、すぐにぴたりとやんだ。
鳥居強右衛門が、武田の兵士たちにかこまれ、陣所の中へ消えてしまったからだ。
（強右衛門。よくぞ、よくぞやってくれた……）
〔やぐら〕の上で奥平信昌は身じろぎもしない。
信昌の両眼からは熱いものが、ふつふつとわきあがってきた。
いっぽう、このありさまを見ていた武田勝頼は、
「おのれ！」

怒って立ち上がり、
「強右衛門め、おのれがしたことをわきまえているつもりなのか——よし。ただちに殺せ。殺してしまえ」
と、わめいた。
かわらに、太い〔はりつけ〕の柱がはこび出されたのは、それからまもなくのことであった。
川をへだてた城の中では、奥平の将兵が目をみはり、息を殺して、このありさまをながめている。
「いよいよ、強右衛門は殺されるらしい」
「気の毒にな」
「あの、石田村ののろま牛が、よくもやってのけたものだ」
「命も捨て、妻や子どもたちを捨てても、な」
彼らは、ひそひそとささやきかわしている。
「あっ……」
だれかが叫んだ。
「出て来たぞ」
かなたの陣所から、またも鳥居強右衛門があらわれた。
強右衛門のからだから、着物がはぎとられている。

彼が身につけているものといえば〔ねずみ色〕の下帯ひとつなのだ。
たくましい強右衛門の裸体へ、強い陽ざしがふりそそいでいる。
空は、まっさおに晴れあがっていた。
「それっ！」
兵士たちは、強右衛門を〔はりつけ柱〕へくくりつけた。
強右衛門をしばりつけたその柱が、かわらへ立った。
城の奥平軍は、もう声もあげずに、みんな顔色を変え、こちらを見まもっている。
（強右衛門よ。おまえの妻や子たちのことは、わしが、かならず引きうけたぞ）
奥平信昌は、こころの中で堅く誓った。
かわらの向こうの竹林で、しきりに夏うぐいすが鳴いていた。
槍をつかんだ武田の兵が四名、ばらばらと〔はりつけ柱〕の下へ駆けあつまって来た。
（これで、おれも、この世から消えてしまうのか……）
強右衛門は、あまりのあっけなさに、自分でも驚いていた。
（死ぬなんて、こんなに、かんたんなものだったのか……）
妻や子どもたちの顔が頭の中へうかび、自分に笑いかける。
（加乃。子どもたち……おれは、とうとう、こんなことになってしまった。なぜかわからぬが、ゆるしてくれい。だがな、あの若殿は、きっと、おまえたちのことをしあわせにしてくださるだろうよ）

妻や子によびかけつつ、ふしぎなほど強右衛門の胸のうちは静かであった。
（死ぬことは、もっとおそろしいことだと考えていたが――いざ、死を前にしてみると、それほどでもない。こんなものなのかな、死ぬということは……）
このとき、柱の下で槍をかまえた兵士たちが、
「強右衛門。かくごはよいか！」
と、どなった。
かっと、強右衛門は両眼を見ひらいた。その目は、いつもの三倍にも大きく見ひらかれている。彼は、ひたとかなたの奥平信昌を見つめていた。
（殿……それがしも若殿もまちごうてはおりませんでしたな。やはり、救いの軍勢は駆けつけて来ますぞ）
強右衛門の声にならない心がとどいたのか、小さく見える奥平信昌が両手を合わせて、こちらをおがむかたちをした。
強右衛門の裸体は緊張のため、堅く堅く引きしまり、血の色がのぼってまっかになっている。
それはそうだろう。
ぎらぎらと光る槍の穂先を、四つも、このからだは受け入れねばならないのだ。
（さあ、来い。さあ突け！）
強右衛門は、死ぬことへ勇敢に立ち向かうことにした。

どうせ死ぬのである。
戦えぬまでも戦って死にたい。
びくびくして死ぬのはいやだ……と、思った。
「えい！」
「おう！」
するどい声とともに、まず二本の槍先が強右衛門の胸板を突き通した。
血がしぶいた。すぐに次の二本が腹を突き刺した。
おそろしいほどのいきおいで血がふき出し、強右衛門のからだを炎が燃えあがるかのように赤く染めていった。
がくりと、強右衛門のくびがたれた。
鳥居強右衛門は、こうして死んだ。
ときに三十六歳である。

まもなく、駆けつけて来た織田・徳川の大軍を迎え、武田勝頼は長篠城をうばい取ることをあきらめ、重臣たちがとめるのをふりきって決戦をいどんだ。この結果、武田軍は大敗北をこうむり、やがて、織田信長と徳川家康のために、ほろぼされてしまうことになるのだ。

色（いろ）

一

新選組の土方歳三といえば、青白く鋭い面貌に陰謀と残酷の臭気をただよわせ、豪傑肌の隊長近藤勇にぴたりとよりそい、新選組の黒幕として敵にも味方にも恐れられていたという印象がつよい。

芝居や映画などに現われる土方も、ほとんど、そうしたイメージによって裏うちをされているようだ。

数少い新選組生き残りの人びとのうちには、後年になってから、

「武張ってはいても局長の近藤さんは、あれでなかなか親しみやすいところもあったが、副長の土方歳三、これだけはどうもいけなかった。無口で冗談ひとつこぼすのも惜しいといったふうだし、実際、何を考えているのだか、ちょいと腹の底が知れないようなところがありましたよ。だが、あの人の剣術は相当なものでしてね。敵と斬合いになったときの凄さというものは隊内の暴れ者が息をのむほどで、それア強かった。それのみか、われわれ隊士一同の取締りについても、それはもう実に厳しいものでした。土方さんが屯所へ出て来て、じろりとこっちを見ると、がやがや騒いでいた隊士どもは、ぴたりと鳴りを静めたものです。土方さんはどういうわけか、何時も妙に沈んだ青白い顔のいろをしていましたが、きりりとしまったいい男で、総髪を何時もき

ちんと後へたばねていました。いかなる時にも黒の紋服にきちんと袴をつけているのですが、そいつがまた実によく似合って……」

美男だが、どうも隊士一同に疎まれていたようである。とにかく、こうした風評がつもりつもって、土方歳三のイメージをつくりあげてしまったのであろう。

歳三も、自分と隊士達の間に流れている冷たい空気を知っていたものとみえ、

「このごろは、おれが道場へ出て行っても、みんな相手にならん。みんな、一刻も早く、おれの傍から離れたがっているようだよ」

従僕の平吉だけには、こう言って苦笑を洩らした。

「土方先生のことを一番よく知っていたのは、わしとお房さん位なものじゃったろうねえ。他にも少しはいたろうが、そんな人達は、あの戊辰の戦さで、みんな死んでしまったろうからねえ」

と、明治末年まで生きていた山口平吉老人は述懐している。

土方歳三は、天保六年に、武州多摩郡石田村の農家に生れた。五人兄弟の末っ子であった。

子供の頃から激しい気性で、よく働きもするが、自分になっとくが行かないと、大人の言うことでも頑としてきかない。十一歳で江戸下谷上野広小路の〔いとう松坂屋〕へ奉公へ上ったときも、半年ほどのうちに店の番頭と喧嘩をして飛出してしまった。

歳三の飯の食べかたが遅いと叱られたのが原因で、このとき歳三は「早飯は体に悪いと、おじいさんから聞いた」と喰ってかかり、激怒して拳を振り上げる番頭の臑を蹴飛ばし、ぱッと夜の往来へ駈け出すと、そのまま息もつかずに九里の道を一人きりで村へ戻って行った。

二度目の江戸奉公は、かなり永くつづいたのだが、十九歳の春に奉公先の下女と関係が出来てしまった。大柄な腋臭のつよい女だったそうで、女は歳三より三つ年上だ。うまく持ちかけて歳三を誘惑し、すでに手代として主人からも目をつけられていた歳三と世帯をもとうというのが、女のはじめからの狙いであったらしい。

「子供がお腹に入りました。困ります、困ります」と主家にも訴え、歳三にもかきくどいて執拗に迫る。主家の方でも、少し早いがこうなったからには二人を一緒にしてしまおうというところまで行ったが、歳三は、ぴしゃりと撥ねつけた。

自分を誘った女の小賢しい打算が、どうにも我慢ならなかったのである。

(先に手を出しておきながら算盤をはじいていやがったのだな)

そのくせ、女は歳三に手をさしのべたとき、

「ねえ。遊ぼうよ、ねえ……」と囁いたではないか。

「だからその気になったんだ。もし本当に、子をはらんだというんなら、おれが引取る!! けれど金輪際、お前と夫婦にはならないぞ」

主人の前で、歳三は堂々と女に宣告し、さっさと帰郷してしまった。美男の上に女

好きな歳三は、このときまでに、もう何人もの女を知っていたが、主家にも店のものにも女遊びの実態をつかまれるようなことは絶対にしなかった。頭のきれる働きもので通っていたのである。

ともかく、女の妊娠がまるで嘘の皮なのだということを見破ってしまっていたし、江戸からも、それっきり何とも言ってこなかった。

帰村した歳三は、すぐ上の姉が縁付いていた日野宿の名主佐藤彦五郎方の厄介者となり、家伝〔石田散薬〕と称する打身の妙薬を行商して歩くようになった。歳三は、薬をつめた荷へ竹刀や面籠手を結びつけ、武州から甲州へかけ、到るところの道場を訪れては稽古をつけてもらうのを常とした。

武州多摩一帯では、いわゆる武州気質といって武道が盛んなところだ。鋤鍬を握る百姓に竹刀胝や面ずれのあとを見るのは決してめずらしいことではなかった。

歳三も子供の頃から剣術が大好きだし、帰郷後は自分の小遣稼ぎだけをやればよいので暇もうまれ、ふたたび武道への執着が燃え上ってきたわけだ。

当時の近藤勇は歳三より一つ上の二十一歳。同じ武州石原村の生れだが、江戸牛込に天然理心流の道場を構える近藤周助の養子となり、老齢の養父に代り道場を切廻していた。勇の実父の久次郎も百姓だが、自宅に道場をこしらえ、勇の幼年時代から、時たま近藤周助を招き、村人に稽古をつけてもらっていたのである。

こういう関係で、勇も月に二度ほどは郷里へ来て稽古をつける。自然、歳三との交

情も生れ、ついに歳三は、勇の高弟として江戸の道場へ起居するようになった。

近藤勇の道場は、江戸で一流というわけには行かなかったが、勇は、歳三をはじめ沖田総司、井上源三郎、永倉新八、原田佐之助、山南敬助など腕利きの門弟配下と共にたゆまず鍛錬を行い、荒稽古ではかなり評判をとっていたものである。

この近藤一党が、幕府の〔浪士隊募集〕に応じて京都へ上ることになったのは、近藤勇三十歳、土方歳三が二十九歳になった文久三年二月であった。

二

徳川幕府ともあろうものが、浪人を集めて京都市中の護衛にさし向けようというのは、幕府の保守政治も、いよいよどんづまりに来たわけなのだが、それは後になって言えることであって、そのときからでも幕府の腰が立ち直れば何とか盛返すことも出来たろうにと思う。

勤王といい佐幕といい、どちらにしても皇室を上にいただき権力者が政治をとるということは昔も今も変りがないので、日毎に沸騰する勤王運動には幕府も閉口し、何とか皇室と仲よくして、みずからも勤王の実をつくし、苦しい政局を切抜けようと懸命になっていたわけだ。

このところへ、英、米、仏など外国の勢力が東洋進出の辣腕をのばしてきて、日本の門戸開放を迫ってくる。永い間の鎖国を解けと威嚇されても、外国事情にはまるっきり盲目の日本は、いや、徳川幕府としては、することなすことすべてがうまく運んでくれない。

日本のどこもここも行手の不安に脅かされ、確固たる目的と進路を見出すのに戸惑うばかりであった。こんなときに革新勢力が擡頭するのは当然なので、諸藩のうちでも薩摩・長州の勤王運動は、皇室のある京都を舞台に熾烈の度を加えるばかりである。

これら勤王志士達の暗躍と暴動を押えようために幕府が派遣した浪士隊が新選組となるまでのいきさつは、周知のことでもあるし、はぶきたいと思う。

はじめは微力だった新選組も、ときの京都守護職、会津侯の庇護によって、新たに隊士をつのり武器もととのえ、意気さかんに市中の護衛、浮浪人の取締りなどに働きはじめた。

局長は水戸出身の剣客、芹沢鴨と近藤勇の二人。土方歳三は副長に就任したが、早くも、この年の九月十八日の夜更けには、芹沢鴨が暗殺され、新選組は名実ともに近藤の手に握られることになった。

この粛清の主謀者は土方歳三である。

「そうも行くまい。まだ、そこまでやっては……」

などと、近藤は煮えきらなかったが、

「芹沢さんの人間が生れ変らんかぎり、とうてい局長の言われるような穏便な解決はつきますまい。先生は芹沢局長の振舞いを何とごらんなのだ」

「そりゃ、おれにもようわかっとるが……」
「単に酒乱だといって済まされることじゃアない。あの男は気違い腹から生れたんだ。商家の女房を横取りして妾にする。廓へ出かけては取扱いが気にくわんとあって、揚屋うちの器物を叩きこわす、飲代をゆすりに出かけて断わられた腹いせに、先日は一条通りの町屋へ隊の大砲を引張り出して撃ちかけたじゃありませんか」
「あれはいかん。あれは許せん」
「当り前です。こんなことがつづいたら、発足早々の新選組の信用はどうなります。御公儀でも会津侯でも折角われわれの働きを認めているところなのに……」
「あれで、芹沢も気のいいところもあるのだがなあ」
「局長！　局長はお忘れか。江戸を発つときに、百姓上りのあなたと私が、一剣もって天下の大事に働く機会を得たのは男の冥加。命を投げ捨て事に当ろうと誓い合ったことを……」
「忘れはせんよ、歳」
「あなたは芹沢と新選組と、どっちが大切なんです!!」
こういうときの歳三は、兄事し尊敬している近藤に対し一歩も退かない。切長の眼がぎらぎらと白く光って、さすがの近藤も持てあましたかたちになる。
「では、やるか」と、近藤も決意した。
歳三は三日のうちにすべてを運んだ。

十八日の夜は、親睦会と称して島原廓内の角屋に全隊士を集めて酒宴をひらき、泥酔した芹沢が一味の平山・平間の二人と壬生村の屯所へ帰り、女を抱いて眠ったところを、歳三以下四名の刺客が襲撃し、芹沢を殺してしまった。
この間だれ一人として、この変事の気配すらも感ずるものはなかった。後になって、どうやら一同にものみこめたようだが、ここまで素早く隠密裡に計画をたて実行につした歳三の策謀と働きは、隊士の畏怖をさらに強めたと言ってよい。
以来、近藤勇の人間はがらりと変った。統率者としての責任感も大きかったのだろうが、とても百姓出身だと思えない貫禄もつき、進退のすべてが立派になってきた。
これは歳三も同様で、二人は多忙をきわめる中にありながら、夜更けから未明まで、人に気づかれぬように習字や読書を励んだものだ。
芹沢の暗殺は当然のことだったが、歳三は個人的にも芹沢が大きらいであった。無口な歳三がめずらしく昂奮して、近藤に言ったことがある。
「暴力で他人の女を引っ攫うなどとは男の風上にもおけぬ奴ですよ。思ってみただけでも虫酸がはしる。私も女は好きだが、厭がるものを無理無体になどというのは、とても出来ない。第一、体が言うことをきいてはくれん。金で買った女にしても、向うが、こっちと同じに楽しみ、よろこんでくれるのでなければ、私は手も足も出ません」
かなり女には神経質だったようだが、この言葉を裏返すと、商売女をも夢中にさせ

てしまうだけの自信があったに違いない。

歳三も近藤とは、よく一緒に島原の廓へ出かけたものだが、はじめての相手の小松太夫というのには何度も夜を共にして事を行ったのは二度か三度にすぎない。のちに東雲太夫というのが歳三の相手をつとめるようになり、この女とはかなりうまが合ったようだ。しかしそれも、お房というものが出来てからは、ぷっつりと島原へは泊らないようになってしまった。

土方歳三が初めてお房を見たのは、京へ来てから二年目の慶応元年夏の盛りで、お房は歳三より六つ下だから、当時二十五歳の女ざかりであった。

去年の夏に、新選組が三条小橋の旅宿池田屋に集合する勤王志士達を襲撃し勝利をおさめてからは、その実力をようやく天下に誇示出来もしたし、ことに池田屋の長州藩士を主軸とする会合の内容が（御所へ火をかけ、その混雑にまぎれて天皇を長州へ御動座したてまつる）という大陰謀だっただけに、これを未然に粉砕した新選組の名は洛中洛外にとどろきわたったものである。

歳三は幕府から毎月四十両もの給料を貰うようになった。年に十両もあればどうにか暮せる世の中なのだから大変な収入だ。会津侯からも手当が出る。

しかも近藤と共に歳三だけは別格で旗本の扱いをうけるようになっていた。

いえば新選組が得意の絶頂にあった頃である。

漆黒の総髪に黒紋付・仙台平のまち袴という好みのスタイルに身をかためて京の町

を歩む土方歳三の風姿には、垢くさい下女と狎れ戯れていた面影は全くない。おしゃれで、身のまわりには贅沢だったし、どこから見ても立派な江戸の旗本であった。

「平吉よ。お前、先に屯所へ帰っておれ。今日は割に涼しいようだから、おれは久しぶりに清水へ詣ってみようかと思う」

その日――早朝から伏見の奉行所へ公用があり、従僕平吉一人を従えて出かけた歳三は、夕暮れ近くになり、京へ戻って来た。騎乗である。

山なみに囲まれた京の夏の暑さもひどいものだが、歳三の体には、しんしんと底冷えのする京の冬の方が苦手だ。

「お一人でぶらついたりして、何かあったら、おれが近藤先生に叱られますで」

平吉は、歳三にもいっぱしの口をきく。半年ほど前から歳三を頼って京へやって来た平吉は、まだ二十になったばかりで六尺に近い大男だ。

平吉も武州の生れで天涯の孤児であり、八王子に丁稚奉公をしていた頃、薬行商の歳三にはよく飴玉を買って貰ったり小遣いを貰ったりで、可愛がられていたものである。

「いいから行けよ」

「でも先生。近頃は物騒だというでねえか。勤王の奴らに嚙みつかれて怪我でもしたら、つまりませぬよ」

口をとがらせ、にきびだらけの赤ら顔に汗をびっしょりかいている平吉は、遠慮な

くずけずけと言う。

平吉が歳三の一人歩きを不安に思うのも無理はなかった。

池田屋事件ののちに長州藩では軍をととのえ攻め上って来て、京都御所のまわりで会津・薩摩の連合軍と戦い敗北を喫した。このときも新選組は会津軍の下にあって活躍したわけだが、以来長州藩は、朝廷からも疎まれ、京都に於ける勢力は全く衰微してしまった。それだけに長州の志士達の怒りは倒幕一辺倒に結集しており、ことに新選組へ向ける憎悪は筆舌につくしがたいものがある。勤王・佐幕入り乱れて暗殺や決闘が絶えぬ血なまぐさい京の町であった。

近藤と土方だけは何としても早急に暗殺してしまえという動きも密偵の報告によってもたらされていたし、隊士の一人歩きは禁じてある現在なのだ。

しきりに反対する平吉に乗馬をひかせ、其頃は壬生村から移転したばかりの西本願寺内の屯所へ帰すと、歳三は、まだ照りのつよい西陽を白扇に避けつつ、ぶらりと五条の方へ歩き出した。

頃日は多忙をきわめている。

（たまには、ひとりきりで、ぼんやりと時をすごしてみたいものだなあ。清水寺へ詣ってから四条へ出れば夕闇も濃くなろう）

それから祇園の行きつけの茶屋へ上って、女気なしで、ひとり酒を酌み、しんみりと故郷のことでも思い出してみようという心境なのである。歳三にはそういう詩的な一面があった。

歳三が京から親類の佐藤家へ送ってきたものの中に〔豊玉集〕と題した句帳があって、

白牡丹月夜月夜に染めてほし

公用に出て行く道や春の月

などという、あまりうまくない俳句が書きつらねてあり、その中に、こんなのがある。

いいわれば迷ひ、しなければ迷はぬ恋の道

三

鳥辺野の墓地は、ひぐらしの声にみちていた。此処は平安のころから名高い墓地で、墓地を抜ければ清水であった。

（ひぐらしや……ひぐらしや……）

歩を運びつつ、しきりに首をひねって苦吟中の歳三の背後から、凄じい気合と共に白刃が襲いかかった。

「卑怯!!」

夏羽織と帷子を切裂かれた左肩に浅手をうけながらも、歳三の体は毬のように飛び、

背後の刺客には見向きもせず、早くも前面に立ちふさがった別の一人へ殺到している。
悲鳴をあげ、その刺客は刀を放り捨て、夏草の中へのめりこんでいった。
「誰だ？」
歳三は、最初の刺客へ振向き、低く言った。
まだ若い浪士風の男だが、歳三は、こいつ長州者だなと直感した。
だらりと刀をさげたまま突立っている歳三へ迫って来る男の顔は青ぐろく怒張し、眼はつりあがっていた。
勝負はたちまちにきまった。
二人の体が飛違ったときに、歳三の刀は深く相手の胴を薙ぎ、絶叫して立直ろうと足を踏ん張る男の首のあたりを狙い、歳三が次の攻撃を加えようとしたときであった。
「やめとくれやす!!」
女の声である。
声と共に体が飛込んで来た。
「知り合いのものでござります。もう……もう、これで、おやめやしとくれやすな」
倒れ伏した若い侍を抱くように庇い、女は必死に叫んだ。
「お前さんは、この長州侍の知り合いなのか？」
わざとくだけた口調で訊き、歳三は刀をおさめ、お前さんは？　と何度も押しかぶせた。

女は恐怖でまっ青になっていたが、もう観念した様子で、
「はい……、長州さま、お出入りのものでござります」
「ふむ……」
歳三は、女を凝視した。
白粉気のない小麦色の顔立ちは京の女のものではないようだ。鼻の先がちんと可愛らしくしゃくれていて、受け唇であった。町家の女というのはわかるが、若いのか年増なのか、それも一寸見当がつきにくいところがある。淡香色の無地の単衣をまとった女は、決して素人ではないのだが、江戸や京の女にはない異色の魅力が歳三をとらえた。
女が低く叫んだ。若い侍が絶息しているのに気づいたらしい。
「とめても無駄だったようだな」
「へえ……」
「だが、私も危いところだったよ」
「へえ……そうどしたなあ」
「私を憎んでいるかね？」
「いいえ、もう……男はん同士のことどすよって、うちのような女には何もわかりまへん。ただもう、このお人が助かるもんならと、夢中で……」
意外に、あきらめの早いさばさばとした態度になり、女は、歳三のものやわらかな

訊問を素直にうけた。
「お前さんの、名は？」
「ふさと申します」
「よく恐れげもなく刀の中へ飛込めたものだ」
「新選組の土方様ほどのお方ゆえ、女には手をおかけやすことはあるまいと思いまして……」
京言葉にまじって折目正しい言葉づかいが出るのも、お房の亡夫、勢次郎が河原町にある長州藩京都屋敷出入りの経師屋だったためかも知れない。二年前に病歿した勢次郎は、お房と同じ因州鳥取城下に生れ、腕一本で叩きあげ、京でも名の通った経師屋になった。人柄もよく気さくな性格だったので藩邸の侍達とも仲よくなるし、酒好きなので若い侍達が七条の家へよくやって来ては、勢次郎と酒を飲んだものだという。
お房が庇った刺客は、長州藩士岡部喜十郎というもので、もう一人は岡部の友人の土州脱藩の侍だったらしい。
「さっき、五条の通りで、ばったり岡部はんに出合いましたんどす」
挨拶を交しているうちに、連れの侍が急に岡部の袖をひき、彼方を指し、「新選組の土方だ」と、呻くように言ったのがお房にも聞こえた。
「やるか」
「よし」

お房にはもう見向きもせず、清水へ向う歳三の後をつけて行く岡部を見送るうち、お房も気が気でなくなった。というのは、一人っ子の又市が疫病で死にかけたとき、子供好きの岡部が藩邸を抜け出して来て徹夜で看病をしてくれたことが胸に残っていたためでもあろう。
「何やもう、岡部はんでは心もとない気ィがして、何とかおとめ申そう思ううちに、ついつい此処まで来てしもうて……」
お房には、また不安がつきあげてきたようであった。市中に名高い土方歳三につかまってしまったわけだし、長州藩と少しでもかかわりのあることなどがわかればどんな目にあうか知れたものではない。訊かれるままに悪びれず答えてしまったが、何とか嘘をついてしまえばよかった……と思うと、お房はまたも全身に冷汗がふきあがってくるのをおぼえた。
だが、それまでのお房の悪びれない態度が歳三の警戒を解いた。
その上、女への好感を倍加させた。
「お前さんには済まなかったが、これも仕方のないことだな」
「へえ……」
すらとしたお房の姿態が、歳三の食欲をそそった。
（死んだ芹沢なら、いきなり此処で押し倒すところだろうが……）
そんなことを考え、歳三は好みの女に向うと我ながら初心な気持になるのが、自分

でも可笑しかった。

「では、ともかく――ま、これで別れようかな」

お房の満面に安堵のいろがどッと出た。

歳三は、もう清水へ行く気もしなくなり、女をそのままに五条へ引返し、駕籠を拾った。肩の傷はごく軽かった。

（女の家のところを、くわしく訊いておくのだったな。何となくもう一度会ってみたい女だった）

屯所へ戻ってから、ふっとそんなことを思ったりしたものだが、それから七日ほどして、また歳三はお房に出合ったのである。

その日も快晴であった。騎乗の歳三は隊士五名を従え、市中見廻りを久しぶりで行ったのち祇園町会所で昼食をすますと、隊士を会所に休ませておき、ひとり戸外へ出た。近くの薬屋へ私用があったのだ。

何時ものように一点の乱れもない服装の歳三は陣笠をかむり、徒歩で四条大橋を渡って行った。

橋の東詰で人だかりがしている。寄って見ると、中風病みの老人が飼猿に芸をさせているのだ。

猿も老いていた。竹馬に乗ったり、唄とも呻きともつかぬ老人の濁み声に合せて踊ったり、懸命に働くのだが、笑いさざめく人だかりのうちからは、なかなかに銭が投

げられない。

（哀れな猿め……）

じわりと歳三の眼がうるんできた。

歳三も猿には深い愛着がある。子供のころに山猿を〔三公〕と名づけ飼育していて、病死したこの猿を埋めた裏山には、いまも歳三が据えた墓石が残っている筈であった。

三公の命日なれば我しづか――と、これも京へ来てからの歳三がよんだ一句である。紙にくるんだ小粒が歳三の手から老猿の前へ放り投げられると同時に、横合いからも喜捨が飛んだ。ふっとそっちを見て、歳三は目を瞠った。

人垣の頭ごしに、お房の顔が、おもはゆげにうつむき、ちらりと上眼づかいに歳三へ一礼を送ると、すぐに人垣から離れて行った。

追って出たが、一瞬、女へかける言葉を探しかねてためらううちに、お房は盛り場の雑沓へ溶けこんでしまっていた。

（何故呼びとめなかったのだ。おれも、どうかしておる）

歳三は、嘆息と舌打を交互にくり返した。

翌慶応二年になると、一時はおとろえていた長州のうごきが活潑となり、薩摩・土州・肥後などの諸藩も微妙に動きはじめ、諸国の勤王浪人もこれに呼応していよいよ倒幕の道ひとつに革新勢力がかたまってくる気配濃厚となってきた。

新選組では大津街道の日岡に番所をもうけ、東海道から入りこむ浪人達を警戒する

ようになった。

奈良東大寺のお水取がすんだばかりで、京の町を包みこんでいた寒気冷気が、日毎に薄紙をはぐように消えてゆく、そんな或日の早朝に、土方歳三は単身の騎乗で屯所を出て、抜打的に日岡の番所を見廻った。

詰めている隊士達の勤務ぶりに遅怠がないのを見きわめ、歳三が蹴上まで引返して来ると、驟雨がきた。

馬を飛ばし、歳三は街道から少し引込んだ〔ゆみや〕という茶店に入った。山林を背負ったこの茶店は店もひろく奥には小部屋もあるし、ここで遅い昼飯をとりながら、雨のやむのを待つつもりであった。

薄暗い店先へ入ったとたんに、歳三は、よろこびの声をあげずにはいられなかった。

「や!! お房さんではないか」

「ま……」

「よう会うなあ」

「へえ……ほんに……」

「何処へ行く?」

山科の豪農の屋敷が、永年の得意先でもあり、亡夫の遠縁にも当るので、その家の婚礼の祝いに出かけるのだと、お房は答えた。

お房が姑と子供を守り、女手一つに職人をうごかし家業をつづけていることは、

鳥辺野の問答で歳三もうすうす知っている。

お房を乗せて来たらしい駕籠と駕籠かきが向うの隅で休んでいた。

お房も今日は盛装をこらし、化粧もかなり濃く、後家島田に結いあげた髪がつやつやとして、なかなかに立派である。

女房や娘なら我慢したろうが、お房は未亡人である。歳三の腹はきまった。

「よかったら、雨がやむまでつき合うてくれぬか。一緒に飯を食べよう」

「へえ……けど……」

「さ、おいで」

忘れかねていただけにこの機会を逃したくはなかった。ためらうお房を引張るようにして奥の小部屋へ連れ込み、まず抱きすくめてみた。

茶店のものにも駕籠かきにも素早く金をやり、目顔で言いふくめてある。

「お房さん。無駄は言わぬ。いいだろう?」

「あ……いやどす……」

お房は歳三の腕の中で、変に声をあげたりはせず、ひそやかにもがきつづけている。とにかく拒んでいることは確かなのだが、そうかといって必死に逃れよう嫌悪の表情でもない。歳三の唇を項にうけたときには、一瞬だが酔ったように両眼を閉じさえもした。

かなりの間、二人はあくまでも静かにもみあい、求め、拒みつづけた。

部屋の中には雨音がこもり、遠くで春雷が鳴っている。
（厭でもないようだが、何故、拒むのか……？）
嫌悪されたら、いさぎよく手を引くつもりだ。
「いや。いやどす……」
「いかんか？」
「へえ」
今度は決意をこめ、キッパリとお房が首を振った。
そのとき、歳三の脳裡にひらめくものがあった。
「わかった。これア済まんことをした」
お房は厭ではないのだ。しかし、一分の隙なく着飾って、これから婚礼の式へのぞもうという女が、髪や衣服の乱れを気にもせず情事に飛込めるわけがないではないか。まして歳三の好みに合う女であれば尚更のことであった。第一そんなことのあとで、すぐに祝いの席へ出て行くことなどは、この女にとって好ましいことではあるまい。
女の体から腕をとき、歳三は（おれとしたことが……）と恥入った。
「悪かったな。まあ、許してくれ」
髪へ手をやるお房に、歳三は詫びた。
「大丈夫だ。髪も着物も、くずれてはいないよ」
お房が、じいっと見返してきた。双眸が見る見るうるんできた。

襟あしから頬のあたりへ、かあーっと血がのぼってきたようである。歳三の思いやりが嬉しかったのであろう。
「お前さんのよいときに、どうだろう、私と此処で、また会ってくれぬか？」
お房の右頬に浅い笑くぼが生れた。
「会ってくれるなあ？」
「……」
「そちらのよいときに、屯所へ手紙でもくれぬか」
うなずいて、お房は小走りに部屋を出て行った。
雨はやみ、薄陽がもれてきた。
障子を開けると、お房を乗せた駕籠が街道へ出て行くところであった。
庭の木立の一隅に白椿が花をひらきかけている。
歳三は手を叩いて、嬉しげに酒を命じた。
（あの女との色事なら仕甲斐がある！）
恋でもなければ、夫婦になろうという前提でもないのである。恋というものならば必ず男女が一つの道を歩み共に暮すという欲求が付随するものだと歳三は考えている。
成熟した男と女が、出合いの度びに何も彼も忘れて楽しみ合うのが色事というものだ。
お房には家業があり、家族がある。歳三には生命を賭した男の仕事がある。だから

恋が芽生えよう筈がないのだ。

妻帯をすすめるものも多勢いるのだが、歳三は、明日にもわからない自分の命を知った上で妻を迎える気などは針の穴ほども持ってはいない。

「こんなことに働くのだったら、女房など貰うのではなかった。いたずらに女子供へ嘆きをかけるばかりだものなあ」と、近藤勇も何時だったか、しんみりと歳三に言ったことがある。江戸に残して来た妻子に、近藤は二年余も会ってはいなかった。

数日のちに、蹴上の〔ゆみや〕で歳三とお房が色事の第一歩を踏み出したとき、お房は、

「お互いに、こうしてお目にかかるだけの土方はんとお房どす。深入りはやめときまひょなあ」

「わかっているとも」

「お目にかかるときには、お互いの苦しみ哀しみは、きっと表には出さぬ約束しておくれやすな」

「むろんだ。会うときは互いに嫌われたくないものだなあ」

「へえ。それでのうては、男と女が忙しい中に暇をこしらえて、たのしみ合う甲斐がのうなります」

「その通りだ。お房さん。お前さんは何といういいひとなんだろうね」

「ふ、ふ、ふ……」

お房の、清潔でぬめやかな肢体は、蜜の香りにみちていた。

ことが終ったとき、お房は可笑しそうに言った。

「しばらく遊ばなんだので、何やもう、しんどうて、しんどうて……」

四

事態は、まさに急迫してきた。

一時は仲の悪かった薩摩（島津家）と長州（毛利家）の両藩は、土佐藩士坂本竜馬などの周旋によって同盟を結んだ。今や両藩は西郷吉之助（薩摩）や桂小五郎（長州）などの若い革新派によって保守派が一掃され、あげて勤王倒幕の気勢におおいつくされている。

それにひきかえ、幕府の内部は、いたずらに紛擾をかさねるばかりだ。

将軍家茂は何度も西下して天皇の御機嫌をうかがい、幕軍は一日も早く前年の長州出兵を罰し、これを征討してしまおうと焦るのだが、その実力もなく、天下の人心は刻々と幕府から離れて行くようで、ことに西南の諸大名は、もう徳川の威望を全くみとめなくなってしまっている。

この混乱に乗じ、フランスは幕府を、イギリスは薩長を援助して、それぞれに自国の日本政局への介入を有利にみちびこうと暗躍しはじめる。

慶応二年の夏には、ついに幕府もたまりかねて長州征伐の軍を起したが、十日ほど

のうちに幕軍は、さんざんに負けてしまった。長州軍はイギリスの手引で精鋭の近代兵器を買いととのえ、軍隊を組織化していたし、薩摩もこれを応援するといったわけで、ただもう、やたらに刀槍をふりかざして立向う幕軍の古めかしさでは歯が立たなくなってしまっている。

あれほど外国を追い払えと絶叫していた長州や薩摩なのだが、フランスを背景にしている幕府に対抗するため、進んでイギリスと結びついたのだ。

歴史でも政治でも、人事に至るまで、人間の世界というものは先の見透しなど全くきかないのが真実であり、急変、変転の様相は理屈だけで説きつくせるものではないのだ。

二年七月には大坂に来ていた将軍家茂が病歿し、幕府親藩の水戸家から出た一橋慶喜が十五代将軍となるのだが、この年の十二月に、幕府を信じ、好意をよせておられた孝明天皇が突然崩御されてしまったのである。

孝明天皇を失ったことは、幕府に痛烈な衝撃をあたえた。今まで遠ざけられていた勤王派の公卿が蹶起し、宮中の佐幕派は粛清され、ここに朝廷は、薩長の勢力をうけ入れることになってしまった。

こうした情勢の推移は、必然、新選組内部にも波紋をひろげてきた。

(現在こうなってしまっては、単に薩長を目の敵にして過激な反抗をする新選組のやり方はもう古い。幕府の崩壊は目に見えていることだし、勤王といい佐幕といい、どちらにしても国のためにつくすのだから、何も時代の波に自ら乗り遅れることもあるまい)などという新選組参謀、伊東甲子太郎の考え方に同調する隊士も出てくる。

(もう馬鹿馬鹿しくなったから逃げてしまえ)と脱走するものも殖えた。

発足以来の同志、山南敬助ですら、現在の自分に迷い苦しみ、脱走をくわだてたあげく捕えられ、土方歳三の裁決によって切腹をさせられている。それも二年前の、まだ屯所が壬生村にあったときのことだから、以来、近藤や土方が、ともすれば動揺しかける隊士達を引張って行くためには言うに言えない苦労をしたものだ。

壬生の組屋敷内の自室で、歳三は山南を訊問した。

脱走の理由は？　といくら訊いても、山南は一言も答えない。歳三も終いには、じりじりしてきた。

山南は仙台の浪人で剣もよくつかうし学問もある。でっぷりとした体つきの、眼もとの涼しい、隊内一の君子と称されたほどの温厚な人物だが、歳三とは、どうも気が合わなかったようだ。

「山南さん。あんたが答えぬのなら、もう何も言うまい」と歳三は、相変らず光沢のない面を沈痛に曇らせ、

「山南さん。あんたとは、とうとう腹をうちあけて語り合うこともなかったな」

「ふん……」

山南が、かすかに笑った。その笑いの底には自分への軽蔑が潜んでいるのを歳三は

見逃さなかった。

理論よりも尖鋭な行動をもって幕府への誠意をつらぬこうとする農家出身の歳三と、根っからの武家育ちで内省的なインテリの山南との間には、事ある毎に反目が内攻し積りかさなってきている。

「新選組というは、もともと分が悪くなった徳川の力を盛返そうがために生れたものだ。何も今更あわてることはない、初めから分が悪いのだ。山南さんもそれを承知で我々と行を共にしたのではなかったのか？　あなたも武士だった筈ですからな。今はどうか知らんが……」

歳三が激怒を押え、あわれむように、冷たく皮肉を言ってやると、山南はたちまちに眼をむいて、斬りつけてでも来るような激しい声で、

「私はただ、この重大な時局にあって、やたらに斬り合い、人の血を流すことが厭になっただけだ。貴公に皮肉られるおぼえはない、副長がお望みのごとく、早く処罰したらよいでしょう」

「わかりました。では……」

脱走は切腹という隊規である。

翌日の夕方に、山南敬助は沖田総司の介錯で切腹した。

人格者で、しかも古参の山南処刑については、

「何とか命だけは助けてあげてもよかったのに」

「土方さんの血は凍っているのか!!」などと、蔭では大分非難の声もあったようだ。

これを知って平吉が心配すると、歳三は、

「おれのようなものがおらなんだら、よいわよいわの前例が残り、取締りがつかなくなる。憎まれもので結構だよ」

眉一本動かさない。

山南につづいて、行先に不安をおぼえ脱走するものもふえ、歳三の厳格なやり方に反撥し、反って風紀、規律を乱すものも多くなってくる。

隊の柔術師範をしていた松原某というのが、市中で喧嘩して斬殺した浪人の妻女と仲良くなったときなど、みじんも許さぬ処罰を加えたので、このため松原は失望し、その未亡人と心中をしてしまったような事件もあった。

「我手にかけた男の女房に、よく手が出せたものだ」と歳三は、吐き捨てるように松原へ言ったものである。

暴れものが多い隊士達を、ぴしりと押えつけて行くためには、歳三も必死で気を張りつづけていなくてはならなかった。

「何せ一癖も二癖もある連中だし、そこへもってきて、おれは武州の百姓上り。うっかりすると見下されてしまうし、これでなかなか骨が折れてなあ」

一度だけだが、平吉に、しみじみこぼしたという。

それでもまだ薩長の勢力を京都から追い退けていたころは、何とか盛返そう、何と

かなる!!　という希望に燃えてもいたし、まだよかったのだが、歳三が京へ来てから四年、今や幕府の劣勢はおおうべくもなくなった。

現在、初志を守って傍目もふらず働きつづけているのは会津藩と新選組のみだと言ってよい。

会津侯松平容保は、四年前に京都守護職を命じられてからというもの、無政府状態にあって諸国浪人の乱暴と跳梁にまかせていた京の町の治安をはかると共に、幕府と朝廷の間に立ち、会津は徳川の親藩であるが平和到来のため誠心誠意働いてきている。この間に会津の領国へは一度も帰らず、莫大な出費にもほとんど自腹をきっている有様であった。こうした容保の苦衷は孝明天皇にも通じ、天皇の信頼は一方のものではなかったようである。

「会津侯のみのために、何時死んでも惜しくはないとおれは思っている」とさえ、近藤勇も歳三に言った。

「全くです。局長、私は何故みんなが徳川を助けてやらんのかと言いたい。こうなれば将軍だとて昔のように威張っていられるわけでもないのだ。結局は天子をもりたてて共に事に当るというに変りはない。薩長の奴ら、すべての権力を奪いとろうという汚い目的があればこそ、気違い犬のように刃向って来るのだ!!」

薩長二藩に対する歳三の悲憤と激昂は、幕府衰亡の度が深まるにつれて、いよいよ熾烈なものになって行ったのだ。

歳三の刃は、数えきれぬほど薩長の士の血を吸いつづけた。

この中にあって、歳三とお房との出合いは、たゆむことなくつづけられていた。

月に三度ほど、二人は蹴上の〔ゆみや〕で落合うのである。

二人の間の連絡は、すべて従僕平吉が行った。隊内ではだれひとり、近藤すらもこのことに気づかなかったようである。

精励恪勤、ほとんど眠るひまもない歳三だが、その日だけは入浴整髪に身をととのえ、衣服その他にもお房の好むものをと心をくだいて、悲憤や苦悩のいろをいささかも面には見せないようにした。

お房にしても同じことであった。

市中が騒然となるにつれ、昔から厭になるほど戦火を浴びてきている京の町では、経師屋のような職業は傍へ退けられてしまう。何時なんどき、戦争が始まるか知れたものではないからだ。

「景気はどうだね？　お房さん。あまりよくはなかろうが……」

或日の出合いに、歳三が心配そうに訊いた。

そのとき、お房は、むしろ厳しい口調になり、睨むような視線を歳三へ射つけつつ、

「先生は、お約束をお忘れになりましたんどっか？」

「約束……？」

「お目にかかるときは、お互いの苦しみ哀しみを、決して……」

「おう。そうだ、忘れてはおらん」
「お忘れやしたら、厭どすえ」
「許してくれい、つい、うっかりしておった」
「今の世に、お侍さまでも、うちらでも、苦しうないものはおへん筈どす。うちも、新選組の土方先生ならお目にかかりとうは……」
「ないと言うのだな。もっともだ」
お房は、今もって長州藩出入りのものである。その気になれば、長州の刺客を誘導して、土方歳三を暗殺させるということは可能すぎるほど可能であった。歳三がうたぐってみればきりのないお房なのである。
けれども歳三は、そうした疑惑の一片だにも持ってはいない。
男女の心底にひそむものは言葉や態度に出さずとも〔色事〕のうちに判然と滲み出てしまうものだ。〔色事〕に熟達した歳三とお房ならば尚更、互いの裸身を抱き合う反応のうちに、すべてを確かめ合い理解し合っていたようである。
それにしてもお房は、別に痩せているわけではないのだけれども歳三の顔色がいつもすぐれないのが気にかかった。体がわるいのではないかという彼女の問いに、歳三は事もなげに、
「私はなあ、若いころから体の調子がよいなどということは一日たりともなかったよ」

「まあ……それで、お医者はんには……」
「生れて一度もかかったことはない。したがって病気なのかどうなのか、それも知らんし、まあ自分勝手に持薬をのんでいるだけだが、寝込むこともない。気が強い方だからね、私は……」
歳三は、もしかすると結核だったのかも知れない。精神力で押えつけてしまっていたようだが、ついに発病することもなかったし、彼の生涯は発病の余地がないほど激動的な、そして短いものであった。

五

慶応三年正月、明治天皇践祚。
同年六月、薩長土三藩の王政復古会議。
つづいて十月になると、混乱紛糾する政局に自信をうしなった十五代将軍、徳川慶喜は、ついに朝廷へ政権返上を奏請した。
「将軍もどうかなされたのではないか。そんなことをなされては、我々のしてきたことが水の泡じゃアないか!!」
新たに隊士を徴募するため江戸へ出張して、二か月ぶりで、京へ戻ったばかりの土方歳三は、このことを聞き切歯扼腕の体である。
「将軍はお気が弱すぎる。いかん!!　危い!!　薩摩や長州はこれをいいことにして、

どんな謀計をめぐらすか知れたものじゃアない」

「将軍家も、あっちから責められ、こっちから突飛ばされて、我々とはまた違ったお苦しみなのだろうが……それにしてもなあ」と、さすがの近藤勇も苦虫を嚙みつぶしたような顔になった。

「とにかく、こうしてはおられません。何とか——何とかせんことには——」

いくら急ぎ、どんなに逸っても、徳川の挽歌に蓋をかぶせることは出来なくなっていた。

十二月九日の夜。宮中小御所に於て、天皇親臨の下にひらかれた会議の席上で——二百余年もの間、ともかくも日本全土に平和をもたらした徳川家の業績を主張し、新政府の一員として徳川も加えるべしと論ずる土佐・越前の両藩主の強調も、岩倉卿や薩摩の反撃にあって排除された。

ここに、徳川将軍は速かに官職辞退及び領地返上をすべしとの処置が決定されたのである。

十二月十二日——徳川慶喜は天皇おわす京師に流血の惨を見ることをおそれ、京の二条城を出て、大坂へ移った。

新選組へは〔会津・桑名両藩と共に伏見を鎮撫、警衛せよ〕との指令が下り、局長以下六十六名の隊士は、堀川の屯営をひきはらい、慶喜の大坂入城と前後して、伏見町奉行所へ移ることになった。

歳三にとっては、もう一日が何時明け何時暮れ、昨日が一昨日のようでもあり、明日が明後日にも思えるような、目まぐるしい毎日であった。

江戸から帰る早々、すでに脱退していた元参謀伊東甲子太郎一派が薩摩屋敷と気脈を通じ、しかも近藤・土方暗殺をもくろんでいることが密偵によってもたらされたので、歳三は謀略をもちい、去る十一月十八日夜、伊東一派を七条の辻油小路にさそい出し、隊士三十名をもってこれを襲撃。甲子太郎他三名を斬殺している。

その三日前には、薩長連合の立役者だった土佐の坂本竜馬が、京都見廻組の手に暗殺されるといったわけで、京の町も、にわかに騒然となってきた。

こうするうちにも長州軍は摂州西宮へ押寄せ、すぐにも京へ入って来ようという態勢だ。

市中は混乱の極に達した。米価も昂騰し、田舎へ逃げるものあり、鉄砲や刀、鎧まで売り捌こうと狂奔するものあり。京都詰めの薩長藩士達は武装も凛々しく御所周辺を警固。三年前とは逆に、彼等が幕軍を、新選組を追い払おうというのである。

明日は伏見へ移るというその前日の午後に、土方歳三は平吉に手紙を持たせ、お房をまねいた。

もはや蹴上の〔ゆみや〕どころではない。

危険だし、時間もなかった。結局、今のところはまだ新選組の縄張り内にあって薩長の連中も近づかない島原の角屋へ来てもらうことにしたのだ。

角屋は寛永十八年に建った茶屋だが、その瀟洒な、しかも二百年の歳月に耐えぬき、びくともしない、がっしりと黒光りのした構築は、歳三が好むところのものである。

扇、御簾、どんすなどと名づけられ数寄をこらした部屋部屋にも骨太い工匠の気魄がこもっているようで、ことに歳三が好きな楼上の青貝の間の壁や欄間は精妙な螺鈿風な細工によって彩られていた。

青貝の間へ入って来たお房は、みずみずしく髪を結いあげ、渋い正装をこらしていた。

歳三も黒羽二重の紋服、袴に身をととのえている。

「土方はん。これで何も彼も、おしまいどすなあ」

お房は、火桶をはさみ歳三に向い合うと、はんなりした微笑を浮べて見せた。

歳三もうなずき、

「此処は、おれが、さんざ遊んだところ。お前さんを迎えるにふさわしくないのだが……時もなし、場所にも困ってなあ」

「かめしまへんどす。今日からは……今からは、もう色ごとする二人やおへんよって……」

「うむ……その通り」

見かわした二人の視線は空間に走り寄って、そこで凝固した。

永い間、二人とも黙っていた。

お房の顔は、能面のように動かなかった。

いまに雪でも落ちてきそうな、冷え冷えとした日で、あたりは森閑と静まり返っている。

仲居が酒の仕度を運んで来て、すぐに去った。

「一ついこうかね」

「へえ」

「一度も見たことはなかったが、子供さんは元気でおるか？」

「へえ」

「これは、先達て江戸へ行ったときに求めてきたんだが……以来、お前さんにも会えなかったもので、渡すのが遅れた」

言いながら懐中をさぐり、歳三は袱紗包みを出してひろげた。

凝った細工をほどこした銀の脚に珊瑚玉の簪が一本……。

「やくたいもないもんだが、似合うと思ってね」

「ま……」

「受けてくれるか？」

「おおきに……」

簪をとるお房の、細く、しかもほどよく肉の充ちた手を、指を見たとき、全く予期しなかった激情が歳三の全身へつき上ってきた。

「お房!!」

女の手をとって引寄せ、歳三は、母親の乳房へすがりつく赤子のような、ひたむきな、しかも泣くような甘え声になり、

「もういかん。もう何も彼も、駄目になってしまったよ」

抱きしめたお房の襟へ顔を埋め、

「お房……お房……」

切なげに名をよびつづけた。

「お約束が違います!!」

お房が叱りつけるように言った。

歳三を突き退けて立ち、窓障子を引き開けたお房は、そのまま振向きもしなかった。

奥庭の黒板塀の向うは、田や畑や、雑木林のひろがりがつづき、遠く西山の山なみは灰色の雲に溶けて、よく見えない。

歳三は、すぐに、きりっと背を正した。

「お房さんには、負い目だらけになってしまったな」

お房は答えず。

「間もなく地獄の門を潜るおれだが……お前さんを忘れないという言葉も、あえて言うまい。永い間、いろいろと、有難かった」

お房を残し、歳三は角屋を出た。

精根の限りをつくして邁進した幕府再興の夢は無惨に破れ、歳三の胸に渦巻く悲嘆の感情が、お房ひとりを頼りに爆発したのは、歳三にとっても意外なことであった。

しいれば迷ひ、しなければ迷はぬ恋の道――の一句は、あくまでも他人が悩む恋の姿を傍観してよんだつもりだったのだが……。

（おれは、お房に惚れていたのか……だが、事ここに至って尚、女のなぐさめの一言を聞きたかったおれは、情ない奴であった）

苦笑は哀しく、自嘲は鋭かった。

馬上に島原の大門を出て行く歳三の双眸は、闘志と殺気にみち、燐のように燃えていた。

（最後まで、やるぞ!!）

歳三の陣笠に、雪が舞い降りてきた。

六

（生涯に、あの女を知ったおれは、幸せものだったな……もうこの世に何一つ、おれは思い残すことはない）

敗戦に次ぐ敗戦である。

勤王軍――いや官軍の砲火と刀槍をくぐって闘いつづける土方歳三の心身は、お房を想うたびに精気をはらんでくるかのようであった。

伏見へ移って間もなく、近藤勇は伊東一派の残党に狙撃され重傷を負い、そのさなかに始まった鳥羽伏見の戦いでは、薩長の近代兵器の威力が完膚なきまでに幕軍を粉砕した。

幕軍と共に江戸へ逃げた新選組は、甲府城乗取りをくわだてたが失敗。勝沼の戦いにも破れて再び江戸へ戻った。

このどさくさまぎれに、歳三は従僕平吉と別れ別れになってしまった。いくら「帰れ」と言っても承知しなかった強情者の平吉も、勝沼あたりで土方とはぐれ、後を追おうにも押し寄せる官軍に阻まれて、どうすることも出来なくなったのであろう。

四月には、下総流山に於て、近藤勇は官軍に捕縛され、二十五日朝、板橋刑場で首をうたれた。

当時、東北に結集する幕軍の情況を見るため会津へ潜行していた土方歳三は、のちに近藤の死を聞き、憤激止むところを知らなかった。

「畜生!!　首に縄をつけても一緒に引張って来るんだった。土方一生の不覚だ!!」

それも近藤が自首したのだとわかり、

「くそ!!　この土方がついておれば……馬鹿!!　局長、あんた、昔から人が好すぎるんだ!!」

抜刀して滅茶苦茶に振りまわしては、狂人のごとく絶叫しつづけた。

会津若松、愛宕山に、陣中の歳三が近藤勇の墓をたてたとき、会津藩士の中に、

「屍も、髪の毛すらも入ってはおらぬ空墓をたてて……」という声があった。

そのとき歳三は、厳然と、

「何を言う!!　墓をたて、その墓に葬られた人をしのび、これを供養した人の心がある限り、それは立派な墓なんだぞ」

会津の戦いもまたみじめな敗北に終ってのち、歳三は二十名ほどと共に、仙台へ廻航してきた幕府海軍へ投じた。

開陽丸ほか八隻の軍艦をひきいて江戸を脱走した幕府海軍総裁、榎本武揚は北海道函館へ進軍。十月二十五日には守備の松前藩兵を突きくずして、函館と五稜郭を占領した。

〔五稜郭〕は、安政三年に幕府が外国船に備え築城したオランダ築城法による洋式堡塁である。堡塁といっても周囲二里、高さ二丈六尺に及ぶ土塁をもうけ十万両の大金を投じて幕府が完成した堂々たる〔堅城〕である。

これにたてこもる旧幕軍の胸は、北海道の天地に徳川の国を創設しようという夢にまでふくれ上った。

函館へ来てから、土方歳三の人柄は、がらりと変ったように見えた。

青ざめていた顔にも血がのぼるようになったし、誰とでも気がねなく語り合い、笑い合った。京都時代には、歳三の笑顔でも見つけようなものなら、ものめずらしげに、

「おい、土方先生が笑っとった!!　これア雪になりゃせんか」

などと噂されたものであった。

「先生は、すっかり変られましたな」

京からずっと一緒だった元隊士の野村利三郎が驚きをこめて言うと、歳三は、明るいさばさばした声で、

「もう、おれは君らを取締らんでもよいのだもの。一応は部将の一人だということだが、まあ榎本総裁の下で君らと共に闘い抜く、それだけでよいのだから、もうこんな気楽なことはないのさ。後はただ、亡き近藤さんの後に一日も早く追いつきたい。それだけだよ」

「しかし、何とかなるかも知れませんよ。イギリスやフランスなども、我々が蝦夷に新しい国をたてることを認めたというじゃありませんか」

榎本武揚は、早くも函館を中心に徳川仮政府としての施政を行い、十二月十五日には蝦夷地全島平定の祝賀祭が市中に催されたほどだ。

「外国の奴らなど当にはならんさ。日本のどんなところでもいい、割って入って火事場泥棒をやろうという魂胆に変りはないのだ」

「しかし、官軍はあわてているそうです」

「駄目だ！」と、歳三は沈痛に、

「負けて負けて、負けつづけてきたどんづまりが、この函館だからなあ。もう死ぬより他に道はない。将軍は恭順。江戸城には官軍が入っておるのだ。もう勝てるわけがないよ」

しかし、榎本軍に加わってからの土方歳三の活躍は凄じいものがあった。

福山城奪取に、諸方の斬込みに、歳三の働きは〔剣鬼〕そのもので、死場所を求めては常に先頭を進み、暴れ狂った。

翌明治二年三月――歳三は、宮古湾（岩手県）に集結する官軍の軍艦八隻を幕軍艦三隻をもって襲撃し、暴風雨にさまたげられ、勝利をおさめることは出来なかったが、官軍旗艦へ決死隊を斬込ませて暴れ廻った壮烈さには、官軍の肝も大分冷えたらしい。

この海戦で、新選組以来の同志、野村利三郎は凄惨な戦死をとげた。

江戸は東京となり、明治新政府は続々と新政令を発しつつあった。

函館軍総裁、榎本武揚が、朝廷及び新政府へ送った陳情書の、〔今や生活の糧にも困る徳川家臣三十万に蝦夷地を賜わり、これを開拓させて頂き、合せて北門の守りに働くべく、我々は函館に寄り集ったのである。その他に何の私心なく、我々もまた日本帝国の繁栄を祈るのみである〕という主旨は明治政府に容れられることなく、約一万の政府軍は、刻々と函館に肉薄してきた。

「薩長が舵をとる新政府です。とても総裁のお心は通じませんよ」

歳三は、気の毒そうに榎本へ言った。

「そうかも知れねえが……」

榎本は歳三に向うとき、いつも丸出しになる江戸育ちの伝法な口調で、

「だがねえ、土方君のように、白黒をはっきりけじめをつけてしまうのも、どうだろうかねえ。旧幕府にも薩長にも、厭な奴もいりゃア好い奴もいた。馬鹿なのも偉いのも、人間らしいのもらしくねえのも、入り交じっているのさ。こいつが人間の世界てえものだ」

「総裁は、薩長のやり方を眼前に見て来ておらんから、そう言われるのだ。その日その日の風向き次第で、奴らは何をこそたくらむか知れたものじゃアないのです」

「向うさまでも、こっちのことをそう言いもし、思ってもいるだろうよ」

榎本武揚は歳三より一つ下の三十四歳だが、ヨーロッパ留学の学識は新政府にも高く評価されている。そして歳三にまさるとも劣らぬ端正な美丈夫であった。

榎本は、自分の意が通らなかったのは残念だがと言い、

「どっちにしても新しい時代が来るし、またひらけても行くのさ。私ア、新政府が立派にやって行くと思うがねえ。どうだえ、土方君――」

「わからん!!　私には、まるでわからん!!」

「湯呑み茶碗には、湯茶の他に酒も入るし、しる粉も入るんだ。わかるかえ?」

「わかりません!!」

四月中旬から開始された戦闘は、たゆむ間もなく激烈に反復され、五月十一日の未明になって、政府軍の函館総攻撃の火ぶたが切られた。

砲声は北海の空を裂き、砲煙、火煙は函館の町を溶かし、突撃反撃の叫喚が消えては起り、起っては止んだ。

情理をつくした名将黒田清隆の、再三の勧降により、榎本が自らの死と引換えに残余の部下将士の無罪解放を願出て降伏したのは、五月十七日である。

その前夜――榎本は、本営に副総裁松平太郎ほか大鳥圭介、荒井郁之助の三将を集め、「すでに戦いつくし、我らの使命は終った。この上は、もはや疲れ果て戦意の消失した将士の命を失うことは出来ぬ。堂々たる降伏の意義もまた、あるべきである」と断じ、同意を得た。

その夜、自刃を決行せんとして小姓大塚某に阻まれた榎本は、翌十七日、死罪を願って政府軍陣営に降った。

前夜の会議への出席も許されなかった土方歳三は、榎本が本営を出発するのと前後して、ただ一騎、敵軍の充満する市中へ向った。

すでに髷も切ってあり、例のごとく洋軍服の腹に白縮緬の帯をしめた歳三は、この日、二尺八寸の和泉守兼定の愛刀に一尺八寸の国広を差添えていた。

歳三には、どうしても、次の時代を見透している榎本の心情が理解出来なかった。

(何故、一兵も残さず討死をせんのか!!　何故、最後まで薩長の犬を叩き斬らんのか!!)

戦争が終った以上、歳三の生きる途はない。

近藤の処刑があきらかに示すように、たとえ歳三が降伏したにせよ、その命は、た

ちどころに絶たれたことであろう。

薩長の新選組への憎悪は、歳三の薩長へのそれと同じ強さであったからだ。

（鳥羽伏見以来、いくら願っても、敵の弾丸が当ってはくれなかったものだが……）

にやりと、歳三は馬上に笑った。

このときの彼の脳裏に、お房がどんなイメージで浮び上ったか、それは知らない。

彼と志を同じくする数人が後をしたって来て、この人びとと共に、土方歳三は一筋の奔流となって、ひしめき合う政府軍の中へ突撃した。

兼定の銘刀が、手練の早業にきらめいたのも束の間であった。

歳三の体は、弾丸数発の命中によって馬上から投げ出され、ようやく彼の本望は達せられたのである。

武州多摩にいて、歳三の死を知った平吉が、明治三年の晩春に、思い出ふかい京都へ来て、七条の家にお房を訪れると、お房は涙あふるるままに、

「もう、土方はんのおいやしてやない京の町には、住む気ィがのうなりました。最後に島原の角屋でお目にかかったときのこと、うちは、思い出しては、口惜しうて口惜しうて、たまりまへんのどっせ。なんで一言……一言でも、土方はんに……」

死ぬ思いに気を張り、色事が恋に変っていた心を打明けなかったのは、敗残の土方と共に家業と家族を捨てて歩む暗澹たる行手にためらった女の打算であったと気づいたとき、すでに、土方歳三は京にも大坂にもいなくなっていた。

「冗談を言いなさるな。先生はお房さんを苦しめるようなことは決してしやせんです。あのときの先生は、もう生きていても死んどったんだ。だから一言、やさしく、なぐさめてあげてくれていたらなあ」と、平吉が不満げに言うと、お房は深くうなずき、素直に、

「ほんになあ……うちは唯もう、土方はんが一緒に逃げてくれお言いやすのが怖おした。そのうちの心の底には、土方はんに頼られているに違いないと思う女のおごりが、むさ苦しう隠れていたのんどす。それに気づいたとき、うちはもう、京に住む気がのうなりました」

「そうか……やっぱり、あんたは、先生のお房さんだったなあ」

土方歳三の面影ひとつを抱き、近いうちに家をたたんで、姑と子供を連れ、お房は故郷の鳥取へ帰るのだと、平吉に語った。

山口平吉は、後年になって錺職の息子夫婦と四人の孫を得、浅草馬道に歿した。

「どうもねえ、負け戦さというやつは、負けた方のアラばかりが残るもんだが……土方先生も大分損をしたねえ」

折があると、平吉は息子夫婦にこう語っては、歳三をしのんだという。

北海の猟人——間宮林蔵

一

徳川幕府は、初代将軍・家康から十五代慶喜にいたる二百六十余年間を、日本の〔統治者〕として君臨した。このような長年月を、日本は国内戦争（小さな動乱は別として――）を一度も起こすことなく、しかも海外諸国との交際を絶ったまま、すごしつづけてきたのである。

徳川政権は――もともと三河国の小領主から成り上り、血族の犠牲を積み権謀のかぎりをつくして、血みどろの戦いをくり返し、力ずくで天下をつかみとった〔政権〕である。

だから、天下をとったとき、幕府は何よりも〔戦争〕再開による、みずからの失墜を恐れた。

わが天下を永久に存続させるためには、他の大名たちの戦力を徹底的に押えきってしまわねばならぬ。

このため〔封建制度〕の土台をきずいた徳川家康の政治家としての卓抜さは、さておき、ともかく、家康がつくりあげた〔政治機構〕は、どうみても戦時体制にそなえたもの、つまり〔軍政〕のかたちをなしていたものだといえよう。

永い戦国の世が、ようやく統一された当時にあって、それは当然なことであったかも知れぬ。

しかし、国内に戦火は絶えた。

何十年もたつうちに、将軍も大名も戦争などを起こす気力さえ失ってしまったし、それでいて、幕府は臣下の大名に対する警戒と圧迫に奔命した。

平和な世にそぐわぬ不可解な政治体系の上に、複雑な制度と儀礼のみが増え、武士は〔官僚〕化し、その一方では、擡頭する町人階級の財力と、たくましい生活力が武家自体を圧迫しはじめる。

官僚なら官僚でよいのだが、武家はまだ刀槍に身を鎧った戦士としての〔体面〕にかじりついた。

戦争もなく、経済的な実力さえ下層階級にうばわれてしまった武家は、戦国のころの確固たる意味を失って行ったわけだ。

西暦一七〇〇年代の後半にいたると、西洋諸国は、次第に東洋方面への進出をはじめ、彼等の視点の中に〔日本〕という小さな島国が、はっきりと浮び上った。

西洋諸国のアジア進出によって、日本がしめる位置の重要さは、いやでも彼等の眼と心を、ひきつけずにはおかなかった。

このことは、世界地図をひろげて見れば、よくわかる。

気候もおだやかだし、風光も美しいというばかりではない。

太平洋と日本海にかこまれた日本の国土が、その歴史の上において、一度も外敵の

侵入するところとならなかったことを考えてみるべきだ。

現代においては、いかに広い海があり、嶮しい山岳にかこまれていても、決定的な戦争が始まればどうなるか、それは誰でも知っている。

それでいてなお、現代の日本にも、日本海側の、狭い幾つかの海峡が大陸とわが本土をへだてているだけで、日本は、国境の緊張感をおぼえず、そのために起こる動乱にも巻き込まれずにすごしていられる。

一国の政治も歴史も、その風土の上に成り立つものである。

とすれば、探検家・間宮林蔵の生涯も、幕末の日本にあって意外な役割をつとめているのではなかろうか……。

二

間宮林蔵は、安永四年（西暦一七七五）に生まれた。九年出生説もあるほどで、その月日は明確でない。

常陸国（茨城県）筑波郡・上平柳村の百姓・間宮庄兵衛の子に生まれた。

当時の百姓がみだりに、〔姓〕を名乗ることはゆるされぬが、代々、庄兵衛の家は〔間宮〕姓を私称していて、

「わしが家のご先祖は、むかしむかし上杉謙信公に仕えた立派な武士でナ。それが、何でも寛永のじぶんに、この常陸へ流れつき、この村に住みついたのだときいている」

庄兵衛は、少年のころの林蔵に何度も、いいきかせたものだ。

おそらく、代々いい伝えられた話なのであろう。

庄兵衛は、百姓をするかたわら籠職をもしており、そのため暮しも割合に楽な方であったし、庄兵衛自身も読み書きが出来、林蔵も九歳の春から、同村〔専称寺〕の和尚に、四書五経の素読をうけたという。

これは、教育をうける子弟の父兄が、寺にいくらかのものをおさめなくては出来ぬことであるから、百姓の間宮家には、ともあれ、子の林蔵に学問をさせるだけの余裕があったのであろう。

庄兵衛は、妻のクマとの間に、結婚以来、永らく子が生まれなかったので、十年目に出来た一人息子の林蔵を、

「おれは、この十年の間、ひたすら神さまにいのりつづけて来た。この子は神さまに授かった子だ」

溺愛した。

それでも母親の方は、しっかり者だったらしく、

「甘やかしては、この子のためになりませぬ」

というので、林蔵が寺から帰ると、日の暮れるまでは田畑で草むしりをさせたり、父親が手職の材料になる竹を削らせたりした。

とにかく、この母親のしつけは厳格をきわめたらしく、
「わが忍耐の力は、亡母のしつけのたまものである」
と、林蔵は後年に語っている。
十三歳のときに、林蔵は村人の筑波山詣に加わった。
ところが、下山をして旅宿についた村人たちが、ふと気がつくと林蔵がいない。
大変な騒ぎになり、捜索につとめたが発見出来なかった。
間宮の一人息子をあずかって来ただけに、一同青くなったが、翌朝、林蔵は、ひょっくりと帰って来たものだ。
「どこへ行っていた？」
ときけば、
「山の頂きの立身岩にお百度まいりをすると、筑波の神さまが何でもいうことをきいてくださるというものだから、行って来た。百度も二百度も、ローソクが燃えつきるまでおまいりをして、そのうちに夜もふけたので洞穴の中で寝てしまったのだよ」
林蔵は事もなげに答えた。
あきれるものもいたし怒り出すものもいたが、
「もしも道に迷って山の中へ入り込み、出て来られなくなったらどうする？」
長右衛門という老人が、こういうと、林蔵は涼しい声で、
「おれは、一度通った道なら決して迷わない。けれど夜道は何かと危いので洞穴へ入って寝たのだよ」
と、いった。

十三歳の少年にしては、出来すぎた答えである。
もともと林蔵は、村でも変りもので通っている。
少年のころから、外で遊ぶのにも、用意の竹竿をもち、近くに流れる小貝川の深さを測ったり、樹木や道路の長短を測りくらべたりして、それで満足らしい。
村人が、こころみに、
「ほれ、向うに見える火の見櫓の高さはどれくらいあるかい？」
などと、きくと、林蔵は一町もはなれたところから望見したのみで、計ったこともない物の高さをいい当てた。これは平常の測量訓練によって、目の感覚にみがきをかけていたからだといえよう。
体軀も別に大きくはなく、むしろ小柄な方であったし、幼年のころは痩せていて、両親も心配をしたが、林蔵は一度も寝込まなかった。
その上に怜悧な天性をもち、強情我慢では人に負けをとらぬというわけで、十四歳になると、近くの蛯原庄右衛門について算術を習いはじめた。
二年後の寛政二年――。
間宮林蔵の人生が決定づけられたといってもよい事件が起こった。
近くに〔岡ノ堰〕とよばれる堰があって、これは小貝川の水を灌漑用水として幕府

領の下総・相馬郡の村々へ送りこむためのものである。

従って〔岡ノ堰〕の土木工事は幕府がこれに当る。この年の何度目かの工事に、幕府普請役の某がやって来て工事の指揮に当っていたところ、見物にあらわれた林蔵が、

「ちょいと、おうかがいしても、よろしゅうございますか」

と、普請役の傍へ来た。

「何だナ？」

「実は……」

林蔵が、質問と意見を同時に吐露するのをきいて、その普請役は瞠目した。

どのようなことを林蔵がいったかは、あきらかでないが、とにかく堰の工事について独創的な意見をのべたものらしい。

ときに、林蔵は十六歳である。

幕府の役人は感嘆して、

「こんなところに、こんな若者がいたとはなア――よほど学問をしたものとみえる」

すると林蔵は、十歳のころから日に二刻（四時間）とは眠らない、と答えた。

「ほほう、なぜだ？」

「本を読まねばなりませぬし、畑へも出るし、竹も削らにゃなりませぬので――忙がしゅうて眠る間なぞございません」

「ふむ。ともあれ、よいことをきかせてくれ、大いに得るところがあった。よかった

ら毎日来ぬか」

「来てもよろしゅうございますか？」

「いろいろと意見をききたい」

と、この役人も実に立派な役人であった。

その名がつたえられていないのは惜しい。

それぱかりか、この人の口から林蔵のことが、村上島之丞につたえられた。

村上島之丞は、伊勢の生まれだが、どうやら林蔵のように旅をしたり測量をしたりするのが大好きで、ついに一流の〔探検家〕となった人物である。

村上は、天明八年に老中・松平定信に見出され、地形調査のため諸国を一廻し、幕府に数種の〔地図〕や〔地誌〕を差し出している。

「その少年に会って見たいな」

林蔵のうわさをきくと、村上島之丞は、すぐに上平柳村へやって来た。

専称寺の庫裡で、村上は林蔵と会った。

一目見て、村上が、

「おぬしは、わしが幼少のころと同じ面がまえじゃ。珍重、珍重――」

手を打って、よろこんだという。

すると、めったに笑顔を見せたことのない林蔵が、さも嬉しげに満面を笑みくずし、

「お弟子にして下されませいな」

と、いったものだ。

「なるか？」

「お願い申します」

これで、きまった。

おそらく、この日は、村上は林蔵の才能を試験したものと見える。

「あれだけの才能を腐らせることは、国の損失となる。わしが引きうけようから江戸へ出しなさい」

翌日、村上が間宮家へ来て、そういうと、林蔵の両親は心細げな顔を見合った。

「引きうけたからにはただではおかぬ。立派に士分に取りたてて見せよう。どうかな」

「あの、林蔵めが侍に……？」

「なれる。いまの世は、どこにもすぐれた人材が不足しておる。わしにまかせてくれぬか」

林蔵も傍から、

「ならいおぼえたものをしまっておいては、もったいない。私は村上様の御供をして江戸へ出ます」

懸命に、たのむ。

ついに両親も、たった一人の愛児を村上の手に托すことにした。

村上は用意周到なもので、

「将来、士分に取りたてられるためには、籍屋の倅ではよろしくない。わしが知っている隣村の名主・飯沼甚兵衛の養子にしておいた方が好都合だ」

早速に事をはこんでくれ、ここに林蔵は、狸淵の名家である飯沼家の養子となり、名も倫宗とあらためた。

以来、林蔵は村上島之丞に従い、諸国を巡り歩いて測量の技術と地理を学んだのだが、その間の事情は、あまりわかっていない。

だが、村上と行を共にしていたことは確からしいし、

「わしが師匠は、何しろ一日に十三里は平気で歩く、それを一月も二月もつづけてなお、いささかの疲れも知らぬという豪傑なのだ。もう、たまったものではない。わしも若かったし足には自信もあったが、はじめのうちは、音をあげたものだ」

老年になってからの林蔵が述懐しているように、村上とすごした十年ほどの歳月が、林蔵の肉体と性格とをさらに強固なものとした。

寛政十一年四月――。

二十五歳の間宮林蔵は、村上島之丞と共に、はじめて蝦夷（北海道）の地へわたった。

そのころの林蔵は、小柄ながら筋骨たくましく、敏捷な身のこなしにも足のはこびにも一分の隙がない探検家に成長していたことと思われる。

一年の大半が雪と氷におおわれる北海の地へ足を踏み入れたとき、
（これだ!!）
林蔵の血はおどった。
ロシアと対立して北海周辺に紛争をくり返していた日本は、いやでも北海への関心をたかめ、異国の侵略にそなえての測量や地図作成を急がねばならない状態にあった。
こうした国際情勢が、日本の知識階級や探検家と結びつき、村上島之丞ばかりではなく、伊能忠敬、近藤重蔵、中村小市郎、高橋次太夫、富山元十郎などの探検家が、世の脚光をあびることになる。
その中でも、間宮林蔵の名は世界的なものになった。
カラフトとシベリア大陸をへだてる海峡を〔間宮海峡〕という。
林蔵が、これを発見したからである。
林蔵が実際に、これをたしかめるまで、カラフトは大陸と地続きであるか、または島嶼であるか、それは不明であった。

三

日本本土の北辺は津軽海峡をへだてて、蝦夷地に通じ、蝦夷は根室海峡をへだててクナシリ島をのぞみ、その背後に、点々とのびる千島列島は、飛石づたいにロシアのカムチャツカ半島へ通ずる。

蝦夷の地は古くから日本の領土となり、江戸幕府がひらかれてよりは、松前藩が此地を領していた。
松前城下は蝦夷の南端にあり、本土とのつながりをもつ南部一帯はひらけていても、中央部から北方にかけては、わずかにアイヌなど土着の民が住んでいるのであった。
それでも松前藩は、寛永のころからたびたび、カラフトに調査員を派遣しているが、それもただ未知の国へ、積雪と寒気がゆるむ季節の短い間を利して足を踏み入れただけにすぎない。
カラフトの北部は、もともと中国の手がのびていて、元・明・清の時代には、カラフトの土着の民も中国に屈していた。
中国も国内の相次ぐ戦乱と政権の交替によって、なかなかカラフトまでは手がのびないのが実情であった。
ロシア帝国が南下侵入の野心を抱きはじめたのは、いつごろからであったか知らぬが、ともかく間宮林蔵が生まれる前後から、
「北海の地を放っておくことは危い」
幕府も、本気になって、
「松前藩のみにまかせておくこともなるまい」
北海の地における防衛と、同時に開拓が急務となった。
林蔵が四歳になった安永七年には、ロシアが艦船をもって蝦夷へ来て、松前藩に交

易通商をもとめている。

むろん、松前藩は、これに応じない。

応じられるわけがない。

江戸幕府は、そのころより百四十年ほど前の寛永十六年に〔鎖国令〕を発し、中国とオランダ以外の貿易と、日本人の海外渡航をきびしく禁じてしまっている。

〔鎖国〕は、キリスト教の伝播を恐れて、幕府が施いた法令である。三代将軍・家光のころに起こった、あのキリシタン宗徒の狂信的な叛乱と恐るべき団結力と闘志を幕府は目のあたりに見た。

これを制圧するのに、幕府は大軍を九州へ派遣し、しかも、大いに手こずったものである。

将軍や幕府は、国内大名の叛乱を恐れると同時に異教徒の反抗を恐れ、国を閉ざした。

幕府は、異国の文明が侵入して来て、これに国民の政治への不満がむすびつくことを徹底的にきらった。

前にものべたように力でつかみとった政権であるから、あくまでも、その力の下にすべてを屈服せしめなくてはならない。

これらの結果が生んだ是非を、現代に生きるわれわれは迂闊に判断することは出来ない。

ともあれ、二百数十年にわたって国を閉ざした日本は、そこに特有な文化と国民性を開花するにいたったからである。

東洋も西洋も、あげて弱肉強食の戦乱時代が錯綜反復しているのに、日本はまったく戦火を忘れつくした二百数十年を送ったのである。

徳川政治の善悪は別として、このことは、あらためて日本の地理的、風土的な……いえば国としての〔天性〕について考えざるをえなくなってくる。

五百年も前に、蒙古軍が海をわたって九州へ攻めかけて来て、これを撃退したのは北条政権（鎌倉幕府）だが、以来、日本は外敵の侵入をうけていない。

江戸幕府が、ロシアの南下政策に神経をとがらせたのも当然のことで、

「ロシアには充分、気をつけるように――」

オランダからも、くどいほど念を押されている。

間宮林蔵が筑波山の洞穴に夜を明かし、村人をあわてさせたころには、幕府も松前藩に命じて調査もすすめたし、やがてはカラフトの南端に番所をおかせ、住民との交易所もひらき、カラフト経営の第一歩を踏み出した。

林蔵十八の寛政四年には、ロシアの使節・ラクスマンが軍艦に乗って蝦夷の根室の沖へあらわれ、通商をもとめたが、幕府は、もちろん拒絶するのである。

このころには、最上徳内が幕命をうけ、カラフトの西岸と東岸の一部を探検している。

翌年になると、ロシアは千島列島の一つであるウルップ島へ植民地を建設しはじめた。

事態はいよいよ急である。

「ロシアばかりではない。イギリスも北海をねらいはじめているようだ」

と、師の村上島之丞が、二十四歳の林蔵にきかせてくれたのは寛政十年の春であった。

「イギリスもでございますか？」

「さよう。昨年の夏に、イギリスの船が、ひそかにカラフトの西側の奥ふかく入ったというぞ」

「おそろしいことで――」

などといっているうちに、その年の四月、幕府は二百名に近い大調査隊を北海道へ派遣し、著名な探検家として知られる最上徳内や近藤重蔵などと共に、村上島之丞も、

「このたびは待っておれ。こうなれば遅かれ早かれ、おぬしにまかせてもらうことは必定だ」

林蔵にいいおき、蝦夷へ出発して行った。

村上のいう通りであった。

翌寛政十一年一月、幕府は松平忠明、大河内善兵衛などを主任とする〔蝦夷地御用掛〕を任命、いよいよ北海探検に本腰を入れはじめた。

間宮林蔵が、はじめて蝦夷へわたったのは、このときである。

二十五歳のときから、およそ二十三年間にわたって、間宮林蔵は北海の辺境と江戸との間を何度も往復し、その精魂を北海探検にそそぎこむことになる。

妻も迎えず、したがって子もない。

後年になって、林蔵は、

「雪と氷の中で木の実や草の根まで食いながら歩きまわって、手も足も凍傷にふくれくさり、われながら、このような苦しみをなぜに好んでしているのかと……実は不思議に思えることもありましてな」

と、語っている。

これをきいた幕府の儒官・古賀侗庵が、

「なるほど……」

うなずくと、林蔵はにやりとした。

「この胸のうちは、おわかりになりますまい」

「わかっているようでいて、さて、わからぬ」

「あなたも、これで蝦夷へおいでになってみると、案外に私のような男になってしまわれるやも知れませぬよ」

「ハ、ハハ、まさか……」

「いや……」

と、林蔵は首をふって、
「人間の本質と申すものは、まこと意外なところに隠れておるものです」
「なるほど――」
「私の親父なぞも、一生、竹を切ったり削ったりして箍をはめるを職としておりましてナ。毎日、よくも、このようなつまらぬことに熱中しておられるものだと、私もあきれておりましたが……なれど、手前親父の申すには、世の中に、これほどおもしろく、たのしい仕事はない、と、目を細めておったもので――」
「ほほう」
「私なども、あまりの艱難辛苦に、それこそ、大の男が、ぼろぼろと涙を落したものでして……なれど、それをあえて耐え忍ぶというのも……」
いや、耐え忍ぶことすら愉楽をおぼえるのは、ただ一つ、目ざす〔未知の世界〕を発見し、これを我が物とする探検家の精神を、林蔵は生まれながら身につけていたのであろう。

四

間宮林蔵は十年ほどの間に〔蝦夷地御用雇〕という職名から〔天文地理御用掛〕に昇進をしている。
もはや、一人前の〔幕吏〕であった。

この間に、林蔵は蝦夷地において、伊能忠敬という傑出した探検家に出合った。
忠敬は、下総・佐原の酒問屋の主人である。
五十一歳になって志をたてた。
それから江戸へ来て西洋の暦学や測量術を学び、さらに幕府からゆるしをえて日本全国を、くまなく巡廻し、完全な日本地図をつくりあげることに生涯の情熱をかたむけた。
こうした伊能忠敬と間宮林蔵が、蝦夷の函館で出合ったとき、
「わが子のように思える」
と、忠敬がいえば、ただちに林蔵も、
「先生――」
と、よんだ。
忠敬から学んだ測量術は、以後の林蔵の活躍をさらに能動的なものにしたろう。
林蔵は、忠敬に出合った翌年に、エトロフ島へわたった。
幕府が、ここに駐在所を設置したからである。
この島の一つとなりの島が、ロシア植民地のあるウルップ島なのだ。
ロシアは、飛石づたいに、まず千島列島を手中におさめようとする。
これに対して幕府が、あわててエトロフ島まで進出したわけだから、日本もロシアも見る間に殺気立って来た。

文化四年四月――間宮林蔵が三十三歳のときだったが……。

七年間の睨み合いの末、ついにロシアがエトロフ島へ攻めかけて来た。

ロシア海兵隊は軍艦二隻をもって、エトロフ島・シャナの沖にあらわれた。

このころになると、幕府のエトロフ経営もかなり進んでおり、十数か所の漁場がひらかれ、七郷・二十五村の制も施かれ、住民の長を、その長に任命したりしている。

エトロフ島の中心地が〔シャナ〕であって、ここに会所もおかれ、南部藩と津軽藩の陣屋もあったし、両藩の士卒や、林蔵たち幕府の役人、大工、船頭などをふくめて三百十余名が駐在していたし、中には妻子をつれていたものもいるというから、日本人も捨てたものではない。

四月二十九日――。

シャナ海にあらわれたロシア軍艦を見て、日本側では、すべての人員を会所に収容し、これを迎え撃つことになった。

ロシア海兵隊は上陸するや、たちまちに大砲を撃ちはじめ、小銃の弾丸は烈風を裂いて雨のように会所に集中する。

日本側は、もうまっ青になってしまった。

こちらにも銃はあるが、数も微々たるものだし、一発放って、いちいちまた弾丸をつめるのであるから、とても話にならない。

大砲の一つや二つはあったろうが、大砲役の大村次五平という侍も、

「こりゃア、いかん。もういかぬよ」

大砲を捨てて山の中へ逃げ出してしまうという始末だ。

ともかくこんなありさまで、国防第一線の前衛基地のつもりでいたのだから、

「これは、まったく、うかうかしていると日本全国、異敵の餌食になってしまうぞ」

間宮林蔵が、慄然としたのも無理はない。

会所も陣屋も、大砲の射撃によって燃えはじめる。

死傷者が続出する。

もう仕方がなくて、一同、シャナから五里ほど南にあるルベツへ退却することになった。

この攻防戦では、林蔵も大分はたらいたらしい。

老年になってからも、林蔵は背中にうけた銃創を自慢にして、

「わしは、敵を打ち払ってくれようと戦ったのだが、ほかの連中が青息吐息で逃げることばかり考えているので、どうにもならなかった」

かなりの誇張をまじえて武勇談を語るのを、たのしみにしていたらしい。

誇張もあったろうが、しかし、当時の武士などというものが、いかに戦闘とかけ放れた存在であったかは充分に知れることだ。

刀をさしても、これを抜いて戦う術を知らぬ武士が多いのだから、林蔵が嘆くのも無理はない。

この、ロシアのエトロフ島襲撃は、

「異敵の侵略の、いかに恐るべきものかを、わしは身をもって知った」

と、林蔵の身心に強烈な影響をあたえたようである。

後年、江戸へもどってからも、ともすれば外国の文明に心酔して、これを迎えようとするものがいたりすると、林蔵は痛烈な舌打ちを鳴らした。

「江戸にいて書物を読んでいたのでは、何事もわからぬ」

吐き捨てるようにいったものだ。

エトロフ島の凄惨な体験は、老年に入ってからの林蔵の行動にも意外な影響をおよぼすことになる。

幕府からカラフト探検を命ぜられた文化五年から六年にかけての約一年半にわたる探検の旅は、間宮林蔵の人生のピークであった。

この旅によって、彼はカラフトが大陸から離れた一個の島であることを、わが眼によって確認したのである。

林蔵は時代の〔花形〕になった。

そして、このときを境に、林蔵は自分が思いもかけなかった異常な運命に立ち向って行くことになったのである。

五

文化五年三月、間宮林蔵は第二回目のカラフト探検を幕府から命ぜられ、四月十三日に、同僚、松田伝十郎と共に、カラフト南端の〔ソウヤ〕へ到着した。

そして、林蔵はカラフトの東岸を、伝十郎は西岸を探検しつつ、北上したのである。

ロシア侵略にそなえ、カラフトの全貌を知ることは急務であった。

しかも、ロシア人でさえ知悉せぬ、いわば敵領域内の未開地を探るわけだ。

住民に対する警戒だけでも、なみなみではない。

「このたびの見分については、わしも決死の覚悟で奥地へわたるつもりだ。一昨年以来、ロシアのわが北辺へ対する侵略は絶えることもない。もし、奥地において死ぬるか……または異敵に捕えられるか……年を越してなお、消息なきときは、わしがソウヤ出発の日を忌日と定めよと、家のものたちへ申しつたえてくれい」

と、松田伝十郎は従僕にいい残したし、林蔵もまた、

「このたびの見分は、どこどこまでもやりとげぬうちは帰らぬ。おぬしにも、ふたたび会えるかどうか……なれど、始めあって終りなきは、およそ、人のならいというものだからな」

と、山崎半蔵という者へ語り残した。

そして二人は、それぞれ単独の探検行に出発したのである。

かくて難行苦闘の末に、西岸を進んだ松田伝十郎はリヤク岬のラッカというところまで北上した。

海をへだてて、沿海州の大陸が手にとるようにのぞまれる。

ここで伝十郎は、アイヌ人から、あと七日ほども北上すればカラフト北端をまわって東海岸へ出る、ということをきき、

「まさにカラフトは島である。大陸と狭い海峡をへだてた離島である」

と、見きわめをつけた。

だが、ラッカより先へ北上することは、まことに困難であり、アイヌたちの船も海岸に沿って進むことはむずかしいらしい。浅瀬なのである。

また陸路も海岸線は泥地で歩行至難、というわけで、伝十郎はひとまずノテトまで引返した。

ここで、伝十郎の後を追い東海岸からやってきた間宮林蔵と出合うことをえた。

「よし。いっしょにまいりましょう」

と、林蔵は勇み立った。

「とても、いかぬ。おれはラッカを大日本国と清国との国境いにきめて帰ってきた」

「いや、カラフトが離島なら、その地図をつくらねばなりません。地図をつくるためには、測量せねばならぬ。測量せんがためには、この目で見とどけねばなりますまい」

林蔵は一歩も退かずに、探検続行を主張した。

伝十郎は、疲労の極に達していたらしい。

しぶしぶ、ラッカまで引返したが、

「わしは、ここを国境いと見きわめることにした。なれど、おぬしがなお、これより奥へ進むならば、それはおぬしの手柄だ。行きたければ行くがよい」

伝十郎も林蔵の強烈な探検精神にあきれはてて、ついに林蔵を残し、引返して行った。

残っては見たが、さすがに手が出ない。

林蔵はついに断念し、一度は伝十郎と共に蝦夷（北海道）へ戻ったが、あきらめきれず、すぐさま松前奉行に再調査を願い出て、休む間もなく、またカラフトへ渡った。

単独行といっても現地人を雇って探検にかかるわけだが、あまりにも苦労が多いのでかれらも今度はいやがる始末であった。

九月になると、カラフトは冬だ。手も足も凍傷（しもやけ）にかかり、氷と雪に追いのけられ、林蔵は探検をあきらめてカラフト西海岸のトンナイへ逃げ帰ったが、翌文化六年一月も末になると、

「こうしてはいられぬ」

奮然として極寒の原野と海にいどみかかったものである。

一月から五月にかけて、松田伝十郎があきらめ切った西海岸の未踏の土地を、一隻の丸木船をあやつり、アイヌの従者数人をつれ、ついに林蔵は、カラフトと大陸との切目にあるナニオーへ到着した。

なお、カラフト島は先端の陸地を残しているが、海峡の行手にはオホーツク海が豁然と横たわっているではないか。

「見た!!」

林蔵は叫んだ。

このとき、林蔵が残るカラフト島の北端をあますことなく調査していたら、後に彼が歩んだ点も、おのずから違っていたことと思われる。

ロシアやイギリスの軍艦も、この海峡を見つけようとしてやってきたのだが、大きな船で大がかりな探検をやったため、海峡の浅瀬を見ると、船も進めないし、

「これは、やはり大陸と地つづきなのであろう」

と、彼等は速断してしまったようである。

小舟一つで戦いぬいた小さなひとりの日本人が、その見すぼらしい装備ゆえに、反って〔海峡〕を発見することが出来たのであった。

むろん、林蔵はカラフトの先端をたしかめたいと思った。だが海峡とちがい、行先は海である。小舟一つでは、どうにもならぬ。

山を越え東海岸へ出て、反対側から島の先端をたしかめたいと思ったが、従者たちにとっては、ここまでの苦闘が限度であったらしい。何といいきかせ、なだめすかしても林蔵のいうことをきき入れようともしないのだ。

あきらめざるをえない。

そのかわり林蔵は、ノテトの酋長が大陸へわたり、黒竜江上流にある清国（中国）の役所へ供物をとどけに行くというので、これに同行をもとめ、ついに許可をえた。

かくて間宮林蔵は、カラフトと大陸をへだてる海峡の世界的発見をしたばかりでなく、シベリア大陸にまで足をのばして貴重な見聞をかさねたのである。

この年の十一月……。

一年半ぶりで蝦夷・松前へ帰ってきた林蔵を見て、松前藩の人々も幕吏たちも、

「生きていたのか……」

瞠目した。

林蔵は、にやりとして、

「睾丸が、凍傷だらけになってしまいましてな」

と、いった。

ときに林蔵は、三十五歳であった。

そして、恩師・村上島之丞が江戸に没したことを、このときはじめて林蔵は知ったという。

六

むかしも今も、前人未到の冒険をなしとげた者への称賛と拍手はセンセーショナルなものであって、しかも林蔵の場合は国際的なスケールをもつ冒険であったのだから、

江戸へ戻った彼の周辺は、にわかにはなやかなものとなった。

永く鎖国をつづけ、外国の事情にうとい日本だけに、未知の土地への関心は大きい。諸大名の招きをことわるのに、今や名士の間宮林蔵は一苦労だった。

〔東韃紀行〕や〔北蝦夷図説〕などの作成によって、林蔵は探検の成果をまとめ、幕府へ差し出した。

次いで林蔵は〔松前奉行支配調役〕の下役格に昇進し、ふたたび蝦夷へ戻ったのである。

それはさておき、幕府天文方の長官と御書物奉行を兼任している高橋景保も、

「さすがは間宮だ。よくもやりぬいてくれた」

と、大よろこびであった。

〔天文方〕というのは、天文・暦術のみか、測量地誌ならびに洋書の翻訳までもつかさどる幕府機関であり、役所も長官邸も、浅草の天文台下にあった。

天文方役所は、頭の高橋景保の学究的な性格と情熱に支配され、高尚で進歩的な知性の匂いが充満している。

景保は新たに作成した〔新訂万国全図〕に、林蔵の発見した海峡を書き加え、それを〔間宮の瀬戸〕と命名した。この万国全図は、日本で初めてつくられた本格的な世界地図といってもよい。

天文方の長官として、林蔵をはじめ北海に活動する探検家たちをたえず支援し、激

励しつづけてきた景保だけに、カラフト半島説を見事にくつがえしてくれた林蔵の活躍に、

「わしも、カラフトは離島だという確信を持ってはいたのだが……それを間宮は、彼の目をもってたしかめてくれた。こんなうれしいことはない」

それだけに、

「残るカラフト島の北端をくまなくたしかめねば、われらの万国図も完全なものとはならぬ」

高橋景保も間宮林蔵も、このことだけが気にかかってならなかった……。

そのうちに状況が一変した。

文化八年六月――ロシアの海軍少佐・ゴロヴニンがクナシリ島において捕えられ、蝦夷・松前へ護送投獄されるという事件が起こり、二年をへて、ロシア側の陳謝により彼は釈放されたのだが、この前後から、ロシアは日本北海への侵略の手をゆるめはじめたのである。

あたかもヨーロッパでは、ナポレオンの全盛時代で、ロシアも、このフランスの英雄に対する警戒と、やがて開始された大戦争に奔命して、カラフトや蝦夷まで手がまわりきれなかったものであろう。

ロシアとの間がうまく行くようになると、たちまちに幕府は北海への警備を解いてしまった。

「ここで手をゆるめては、おれたちのしたことが無駄となってしまうではないか――」

林蔵たち、北海の地にあって永くはたらいてきたものは、大いにくやしがったが、どうにもならない。

「今はよくても、先々のことを何故考えぬのか。あの恐ろしい敵の軍艦と大砲の襲撃がふたたびはじまる前に、今こそ蝦夷・カラフトの防備をかためておくべきではないか」

林蔵は、七、八年前のカラフトを襲ったロシア軍艦のすさまじい火砲の偉力を片時も忘れたことはない。

「異国の武力は端倪すべからざるものだぞ」

ひとりで力んでみてもはじまらない。

幕府は、津軽・南部の両藩をもって守備隊をつくり、蝦夷へ出張せしめていたが、これも廃止してしまった。

かくて、一時はあれほどの騒ぎになった北海への関心も日に日にうすれはじめて行った。

すべては時流である。

やがて、林蔵の恩師のひとり、伊能忠敬も没し、忠敬最後の力作〔大日本沿海輿地全図〕が残されたが、これには林蔵の資料によって蝦夷図が作成された。

林蔵の父も亡くなったし、母も病没した。

林蔵は、五十になっていた。

彼は江戸へ戻り〔勘定奉行〕の支配下に属していたが、このころから異国の船が日本近海に出没するようになり、林蔵はこれにそなえるための一役としてはたらくことになる。

古賀侗庵は、幕府の儒官で林蔵より十余も年下であったが、よく深川の林蔵宅を訪問しては探検談をききたがった。

二人で釣舟を出して遊んだりして、気むずかしい林蔵も侗庵とは仲がよかった。

「これで江戸に居をかまえたことでもあるし、間宮殿も妻女を迎えられたらいかが？」

侗庵がいうと、林蔵は、

「いやあ、いけませぬよ」

まったく取り合おうともしない。

「私がお世話申しましょう」

本気で切り出した侗庵に、林蔵が、

「いかぬのです。肝心のものが凍傷にかかって以来、役に立ちそうにもないのでしてな」

事もなげにいい、からからと笑った。

真偽はわからぬが、ともかく間宮林蔵は一生を独りきりですごしたのである。

七

ドイツ人の医師、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトが、オランダ政府から命ぜられた日本の〔国情研究〕の目的を秘め、表向きは長崎のオランダ商館付の医師として来日したのは、文政六年七月のことで、間宮林蔵が江戸へ戻った翌年であった。

オランダと中国のみにかぎり、日本は長崎の港をひらき、交易をつづけてきていた。シーボルトが来日四年目の文政九年三月に、将軍へ拝礼のため江戸へやってきたとき、日本橋・本石町のオランダ宿〔長崎屋〕にシーボルトを訪問した天文方長官・高橋景保の期待は強烈なものがあったといってよい。

何しろ、西洋諸国のうちでは唯一の交易国であるオランダなのだから、新興知識階級のひとりである高橋景保が、オランダを通じて世界の文明の実態を吸収しようという熱情はまことにはげしい。

西洋の学問や文明に対する関心は、統治者の幕府のみが持つべきもので、一般の耳には入れたくないのが幕府の方針である。取り締りもきびしい。

うっかり洋学もできぬわけだが、そこは幕府の役人であり、洋学を一手に取りしきる役目についている景保であるから、シーボルトとの会談も思うままであった。

何度目かの会談を終えて、役宅へ戻った高橋景保を、ちょうど役所へ遊びにきていた間宮林蔵がつかまえ、

「あまり、シーボルトに深入りなさらぬがよろしいかと存じます」

と忠告をしたものだ。

「まあ、きけ」

と、景保は夢中で、

「わしはきょう、オランダ宿でシーボルト殿から、クルーゼンシュテルンの〔世界周航記〕を見せてもろうた」

「ははあ……」

「世界周航記にはな、わしやおぬしが、ついに今まで調べつくすことができなかったカラフトの北端と東海岸の一部が、あますところなく記されていたのだぞ」

「ほう……」

「間宮。おぬしが発見した海峡によって、カラフトは一個の島であることが証明された。そしていまや、世界周航記による残りの部分を合わせれば、完全なカラフト図が出来上がるのだ」

「御公儀が、あれから後も、ずっと探検をつづけさせてくれたなら、私はすでに、カラフトをあますところなく調べあげておりました」

「いまさら申しても仕方のないことではないか」

「それで？」
「シーボルト殿はな、その周航記を、わしに贈ってもよいといわれる」
「その代りに、向うさまは何をよこせと申しましたか」
と、するどく間宮は突っ込んだ。
「それがな……」
景保は目をふせて沈黙した。
「わかっております。相手は伊能先生の日本図と、私が調べたカラフト図を所望しておるのでしょう。向うさまは向うさまで、自分のたりないところをおぎないたいというわけでしょうな」
「そ、そうなのだ」
「冗談ではございませぬよ、高橋様」
「何――」
「わが国の地図を異国人にわたすことなど、かたく禁ぜられております」
「むむ……わかっておる」
だが、あえて国禁を犯しても、学問のためにあぶない橋をわたる決意は高橋景保の胸のうちに、ゆるぎないものとなっていたようである。
不満そうな長官の顔を横目でながめ、林蔵は苦笑をした。
学問のため、文化交流のためというだけで、現下の国際状況をも無視し、国禁違犯の相談を自分にかけてきた景保を、
（甘いわえ）
林蔵は、内心舌うちをしたものだ。
なおも景保は、このことは内密にことをはこぶ自信があるし、誰にも迷惑をかけないから、シーボルトへ贈る地図の複写に協力してくれと、林蔵にうったえた。
「そりゃ、オランダやシーボルトは、あなた様のおっしゃる通り、あくまでも学問のためと考えておるのやも知れませぬが……なれど、いったん異国へ流れわたったわが国の地図は、何枚にも複写され、オランダ以外の、どんな国の手へ落ちるやもはかり知れませぬ」
林蔵は、こんこんといいふくめた。
現に、オランダの国力は昔ほどではない。フランスやイギリスに押されて、ちぢこまっているらしいし、近年とみに大国の様相をそなえるにいたったイギリスの軍艦が、しきりに日本近海へ出没しているという。
「ロシアのみならず、西洋諸国の目は、日本に向けられつつあるというではございませぬか。私めは、かつて蝦夷地におりましたるとき、この目で、まざまざと、ロシアがわが国の北辺を侵そうとした、そのおそるべき攻撃を見てきております。いかにオランダへ渡すのだからというて、やすやすと国禁を破ってはなるまいかと存じますが……」

林蔵は、なおも念を押してから辞去した。

これで高橋景保もあきらめたと思っていたのだが、二年後の文政十一年三月になって、林蔵が、景保によばれた。

「シーボルトが帰国するそうじゃ」

と、景保がいった。

「間宮。おぬしの功績をシーボルトはひどく感服して、長崎から贈物をとどけようとしたぞ」

「ほほう……」

林蔵は、どきりとした。

(さては、やったな)

と、思ったが、さりげなく、

「異国人からの贈物ゆえ、奉行所立会いのもとに開きたいと存じます」

さぐりを入れると、景保は平然として、

「おぬしの気のすむようにせよ」

という。

むろん林蔵は、この贈物の荷を奉行所へ持って行き、目付の立会いのもとに開封した。

中にはオランダ更紗(さらさ)三反と一通の手紙がはいっており、シーボルトはこの手紙の中

でも、林蔵の探検が世界地理学に貢献したことを、ほめたたえている。

別に怪しいものがはいっていたわけではないので、林蔵は贈物を受け取ることをゆるされ、帰宅した。

たったこれだけの処置をしたことが、間宮林蔵へ密告者の汚名を着せることになった。

つまり、この年の八月に帰国するシーボルトの荷物を積んだオランダ船が長崎港外で難破し、積荷を調べた幕府役人の手によって、積荷中から、何と高橋景保がシーボルトへ贈った日本地図が発見されたのである。

一大事となった。

高橋景保は捕えられて投獄され、ついに牢中(ろうちゅう)に死んだ。その一族には入牢、遠島、追放などというきびしい判決が下ったのである。

シーボルトも日本を追放されたが、彼は積荷が幕吏の手に没収される直前に、すばやく日本地図の模写を終え、さらに蝦夷とカラフトの両図をたくみに隠してしまったという。

「高橋景保を売ったのは間宮林蔵だ」

という評判が立った。

(ばかばかしいにもほどがある)

林蔵は顔をしかめた。

「おれは、法にしたがって正しいことをしただけではないか……」

二年前に、オランダ宿から帰ってきた高橋景保との会話をいささかも林蔵は他にもらしてはいない。

それなのに、林蔵が密告したから、景保とシーボルトの秘密が摘発されたのだという。

ことに、知識階級からの指弾は、もっとも激しかったし、もと高橋の部下だった若い学者たちが林蔵の命をねらったことさえもあった。

このとき、間宮林蔵は五十四歳になっていた。

幕府からは本給として三十俵三人扶持、年金十両、足高二十俵をもらい、林蔵は深川の蛤町に小さな家をかまえて住んでいたが、このころから約十年ほどの間において、ときどき、ふいに彼の姿が江戸から見えなくなることがあった。

短かくて半年——長くて一年余も、林蔵は深川の家をとざしたまま姿を消しては、また戻ってくる。

林蔵は、幕府の隠密としてはたらくようになっていたのである。

八

高橋景保の末路が悲惨なものだっただけに、世の同情は景保にあつまり、間宮林蔵の立ち場は、彼が当然のことをしたにすぎない、その行動へ〔密告者〕とか〔裏切り者〕とかのレッテルをはりつけられるにいたった。

（ふふん……勝手に何とでもいったらよかろう）

林蔵は、別にくやしいとも淋しいとも思わなかった。

探検家としての〔名声〕をえてからの林蔵の言動に対しては、

「あれは大嘘つきだ。あの男の大言壮語は、まったく止まるところを知らぬな」

「人交際も知らぬ偏屈な男よ」

などというのだったが、世間の人が林蔵と同じ体験をしたわけではない。

狂熱をこめて、おのれの体験を語ったが〔大言壮語〕になってしまうのだから、仕方のないことであった。

そしてまた、林蔵のように大自然を相手に孤独の戦いをいどんできた男が、人づきあいなどというものを、うまくやれるわけがないのである。

幕府隠密となった間宮林蔵が、どのような仕事をしたものか、それは役目の性質上、不明なのは当然であろう。

長崎へは何度も出かけたらしい。

オランダや支那との交易の実態、その裏側の様相を探りとったり、これに対する長崎奉行の状態などを調べあげたりしたらしい。

シーボルト事件以来、幕吏が外国との交易に神経をとがらせはじめたのはいうまでもなかった。

（行く先はともあれ……いままでの、おれの体験によれば、ロシアやイギリスや、オランダが交易に事よせ、わが国へ伸ばそうとした手のうちには計り知れぬものがひそんでいたといえる）

新たな仕事――それも〔幕府の狗〕とよばれるスパイの役目を、林蔵は、たゆむことなくつづけた。

こんな話がある。

隠密にとっては、もっとも危険で至難だといえる薩摩国・島津家へ潜入した林蔵は、鹿児島城下の経師屋の弟子となり、ついに薩摩藩の密貿易の実情を探り出したのだが……。

このとき、経師屋として城内へはいりこみ、その形状をつぶさに調べあげ、後年になって、あることから城内某所の襖の下張りの内に〔大府探偵、間宮某〕と記した林蔵の筆蹟が発見された、などという話も残っている。

そして、林蔵は老いて行った。

石見国・浜田藩の密貿易を摘発したのが、その最後の仕事だったともいわれている。

となると、それは天保七年にあった事件だから、林蔵が六十二歳のときである。

この後、林蔵は深川の寓居に引きこもり、まったく孤独な生活を送りつづけたらしい。

このころ、徳川幕府の政治は衰微の一途をたどるのみとなった。

全国にわたる大飢饉は、米をもって国の経済の基盤としている日本にとって非常な打撃であり、消費のみを知って生産を知らぬ支配階級の力は、急激におとろえて行くのである。

諸国の百姓たちの暴動が続出した。

そして先進の外国諸国の文明に対する渇望は、日本の知識階級を止むに止まれぬ衝動に駆りたてた。

渡辺崋山や高野長英などの蘭学者たちが投獄され、幕府は目の色を変えて外国文明の侵入をおそれ、これを弾圧した。

幕府は洋学を、その軍事的な利用にとどめ、これが思想的なものに発展することを、もっともおそれたのである。

林蔵は、朝飯は自炊をし、昼はぬきで、夕飯どきになると、近くの富岡八幡宮参道・一ノ鳥居の傍にある〔伊勢松〕という料亭へきては酒を一本のみ、食事をすることが常となった。

この〔伊勢松〕の女中でおりきという陰気な女と林蔵とは不思議に気が合い、

「どうだ。わしの身のまわりの世話をしてくれぬかな」

と、林蔵はもちかけてみた。

「へえ……間宮さまが、そのお年で……」

おりきは目をまるくしたが、

「勘違いをしてはいかぬ。わしゃァ、お前を抱こうというのじゃない。ほんとの身のまわりのめんどうだけさ。どうだ、いやかえ？」

「どちらでも、ようござんす」

これで、きまった。

おりきは越後・津川の生まれで薄幸の身の上だったらしい。

彼女についてのくわしい資料は、あまりない。

とにかく、この女にみとられて、林蔵は死んだ。

それは弘化元年（西暦一八四四）二月二十六日のことで、林蔵の没年は七十歳である。

これより八年後の西暦一八五二年に、シーボルトが二十巻からなる〔ニッポン〕を出版した。

この最終巻において、シーボルトは間宮林蔵の地理学上における功績をほめたたえ、彼が命をかけて日本から持ち帰った林蔵の〔東韃紀行〕と〔北蝦夷図説〕を発表し、ここに林蔵の業績と〔間宮海峡〕の名は世界諸国に紹介されたのである。

翌嘉永六年六月――。

アメリカの使節・ペリーが軍艦をひきいて相州・浦賀へ来航した。

近代兵器に身をかためたアメリカ軍艦四隻の入港を見て、幕府は狼狽の極に達した。

「国をひらけ。そして、わが国との交易をすべし」

アメリカは傲然として、日本に迫った。

二百数十年にわたる徳川封建制度は、ここに崩壊の第一歩を踏み出すことになる。

○

間宮林蔵については、その上役だった中川忠五郎の述べたものがある。

「間宮林蔵は予が配下のものなり。このもの隠密御用相つとめ候事いと奇特なれど、その人となり、はなはだ奇人にして、我ままなる生れつきなれば制しがたき事なり」

とある。

江戸城中へ入るのに上下をつけずに出仕しようとしたり、転居の届けも出さず、ぷいと引越しをしてしまったり、上役が叱りつけると、すぐに「では辞職しましょう」といい、すぐに退身願いをしたためるといった硬骨ぶりで、上役も同僚も手をやいたものらしい。しかし、

「なれど、いと廉直なる人にて、倅（林蔵の叔父の子で養子となっていた）を召出さんといえば、これを固辞していうには、われらはもと百姓なり。かようなる危難の間に御奉公いたし候も、我能（才能）にてあれど、せがれが幾年生れかえり候とて、わが真似は出来まじ。もとより百姓のことなり。なにも子孫の栄達をのぞみ候心なし、と申せしとぞ」

と中川忠五郎は、このように林蔵の人柄をのべている。

ごろんぼ佐之助

一

そのころの伊予（愛媛県）松山あたりの言葉で「ごろんぼ」というのがある。「破落戸」とか、ならずものとか、悪漢とかいう意味だ。

原田佐之助は、十五歳にして「ごろんぼ」とよばれた。

後年、彼は、あの新選組隊士の一人として、

「おれも真剣をとったら、大方のやつには負けぬつもりだが……どうも、原田には斬られるかも知れんな」

新選組局長の近藤勇が、たとえ冗談にもせよ、こんな折紙をつけたほどの剣士となった。

少年のころ、佐之助は自分の将来に、そんな宿命が待ちうけているとは思いもしなかったろうが、

（おりゃ、本当のところ、御用人さまのごぼだったんじゃ）

信じてうたがわなかった。ごぼというのは「坊ちゃん」ということだ。

佐之助は、天保十一年五月に、松山藩の足軽・原田精五郎の長男としてうまれた。

父親は町奉行所附の足軽をつとめていて、城下の代官町にある東町奉行所内の足軽長屋に住んでいた。

佐之助の母は、同じ松山藩の足軽・玉井権介の娘で、たつという。

たつは、二年ほど殿さまの側用人をつとめる山田四郎兵衛俊徳の屋敷へ女中奉公にあがっていて、ひまをとると同時に、原田精五郎の後妻に入り、佐之助をうんだのである。

ときに、精五郎三十八歳。たつは二十歳であった。

精五郎は、病死をした前妻との間に、もんという娘をもうけていた。

もんは、佐之助が四歳のころに今治の町家へ嫁いで行ったものだから、佐之助も、この腹ちがいの姉については格別の印象をもってはいない。

そして、母は、佐之助をうんだ四年後に丑太郎という男子をうんだ。

やがて、父の精五郎は奉行所附から先筒足軽の組へまわされ、その組頭となったので、家も、唐人町の足軽長屋へ移転をした。

佐之助の耳に、あのことが少しずつ入ってくるようになったのも、そのころからである。

あのこと、というのは、

「原田の長男坊は、御用人さまの落し子ぞな」

というのだ。

つまり、用人の山田四郎兵衛に手をつけられ、子をはらんだ女中のたつが、それを承知の上の原田精五郎の妻となって、佐之助をうみおとしたのだ、というわさなの

である。

この「うわさ」は、佐之助がうまれて以来、強くなったり弱くなったりしたが、佐之助の成長につれて、また強まりはじめた。

「見ろや。原田の佐之は山田様に瓜二つではないか」

「月たらずの子が、あんなに丈夫に育つはずがないぞ」

足軽仲間のうわさにすぎないのだが、こういうことは、面と向って精五郎夫婦には言えなくとも、おせっかいなやつらが、道に遊んでいる少年の佐之助をつかまえては、

「お前も、うまく行けば御用人さまの御坊になれたのにな」

とか、

「お前の本当の父御は御用人さまじゃぞ。可哀相にのう」

とか、要らざることをふきこむ。

なるほど、佐之助は両親のどちらにも顔だちが似ていなかったことはたしかだ。

父の原田精五郎は醜男ではないにしても、顎の張った鼻のふとい、個性的ではあるが、およそ美男というには程遠かったし、母のたつも色白のぼってりした男好きのする容貌ながら、とてもとても美女とはいえない。

嫁に行った姉にしても、弟の丑太郎にしても、この両親のどちらかのおもかげをやどしているのだが、佐之助だけは別であった。

色白なのは母親似だとしても、ふっくりと下ぶくれのした顔だちで、鼻すじも品よ

くととのい、くろぐろとした眸をもつ両眼は、ぱっちりとすずしい。

そこへもってきて、山田四郎兵衛が松山藩にその美男ぶりをうたわれた侍であり、そのころは三十前後。用人といっても殿様の松平少将勝成の側近くはべっていて、その権勢には家老たちも一目おこうというほどだ。

いえば、佐之助も山田四郎兵衛も典型的な美男であったといえよう。

典型的な美男というものは、かえって通俗的なものだから、相似点を見出すことはたやすいともいえる。

だが、子供ごころにも佐之助が変だと思ったのは、父の精五郎が自分に冷たい……弟の丑太郎がうまれてからは、ことに、それと感じられるのである。

原田精五郎は藩中足軽の中でも勤務におこたりなく、温厚な人柄だし、佐之助をひどい目にあわすというわけではない。

つとめを終えて長屋へ帰って来ても、ときたま一合の晩酌をたのしむだけで、めったに大声もあげないのだが、

（どうも、変じゃ）

十二、三歳のころになると、少年期の敏感さで、佐之助は首をかしげざるをえなかった。

先ず、弟と話すときに、父親の顔中が輝くような笑いにみちみちていることを、佐之助は知った。

自分と向い合うときの父親には微笑の一片すら浮かんだことがない。

母親は母親で、妙に父親に気をつかいながら、それこそ佐之助をなめまわすように可愛がるのである。

（どうも、わしゃ、御用人さまの落し子らしいナ）

うわさも消えぬし、町を歩いていると、近くの足軽の女房どもが、佐之助を見ては、こそこそとささやきあい、くすくすと笑いあったり、そうかと思うと、いたましげな視線を投げてよこしたり……。

「わしゃ、ほんとに父さんの子なら？」

佐之助が、思いきって母に訊いた。

「何を言うぞな」

母親は、まっ青になり、むきになって、

「つまらんうわさを本当にするものじゃないぞな」

あたふたと、必死の体で叱りつけてきたその顔を、佐之助は成人してからも忘れなかった。

二

当時は封建の世であるから、子供たちも、それぞれの遊び仲間というものがきまっていて、足軽の子が上の身分の侍の子と遊ぶわけには行かない。

したがって遊び場所も、おのずときまっているわけなのだが、佐之助は平気で、一番町二番町あたりの上級藩士の屋敷がならぶあたりへ大手をふって出かけて行き、そのあたりの子息たちに喧嘩を売るようになった。

撲りつけられ、血だらけになって帰って来ることもあったが、佐之助は決して喧嘩をしたなどとは両親に言わない。

撲られれば撲り返すまで執念ぶかく、相手をつけまわすのである。

一度、寄合組頭・坂井伝十郎の子息で忠之助という少年を城の外濠の中へ投げこみ、大騒ぎになったことがある。

このときは、原田精五郎同道の上、町奉行所へ佐之助も呼びつけられ取調べをうけたものだ。

普通なら、これは大問題であり、原田家へも、きびしい罰が加えられる筈であったが、何となくうやむやになってしまった。

そこで、またうわさがひろまるのである。

「御用人さまの落し子だけあって、坂井さまも泣き寝入りぞな」

というわけだ。

佐之助は、もう、ふてくされて、あばれ放題となった。

父親がたまりかねて撲りつけると、

「何をするんじゃ。父親づらをして変なまねすると、只じゃおかンぞ」

「こいつは、こいつは……」
精五郎が、むしゃぶりつき、
「言わせておけば、おのれ、おのれ……」
なおも撲りつけたりしようものなら、
「本当なら、わしの頭に手をあげられぬ筈じゃ」
反対に喰ってかかり、父親を突き飛ばして寄せつけない。力のすごさは少年のものと思われなかった。
十六の夏になると、佐之助は家にある小金をひき出し、城下からも近い道後の湯にある松ヶ枝町の遊廓に出かけるようになった。
この遊廓は、いまも旧態をしのばせて残っている。道後温泉街の入口に近く、むかしは遍路宿が軒をならべていたあたりを右に切れこんだ細い道の両側にびっしりとたち並んでいて、往時の繁盛をしのばせている。
さて、こうなると、佐之助を放っておくわけにも行かない。
どういう手つづきをとったものか、十七歳の少年にすぎぬ佐之助が、藩の中間にとりたてられ、同時に、
「江戸詰めを命ず」
ということになった。
中間は、もとより武家の奉公人のうち、もっとも下級の者であるし、下士卒の足軽からくらべて、ぐっと差がつく。それでも渡り中間と違い藩直属の中間であれば、ときには役目にもつくし、奉公する藩によっては、それ相応の待遇もあたえられた。
「ふン。こんな小っぽけなところにいるより、わしゃ江戸へ行ったほうが、ええわい」
父親から先ずこのことを聞いたとき、佐之助は吐き捨てるように言った。
安政三年三月、十七歳の原田佐之助は、公用で江戸に向う家老・菅五郎左衛門一行に加わり、江戸へ向った。
松山藩の江戸屋敷はいくつもあったが、佐之助が入ったのは、三田一丁目の中屋敷である。
殿様が在府のときに居住する上屋敷は、すぐ近くの愛宕下にあった。
江戸屋敷で奉公するようになってからの佐之助について、松山が生んだ俳人・内藤鳴雪翁が、大正七年三月発行の〔伊予史談〕に、次のような談話をのせている。

私（内藤翁）が、三田藩邸にいた九つか十のころとおもう。そのころ、私の親は藩の目附役をつとめておって、この目附が当番のときに公用の使い走りをするため〔小使〕と称するものが、一名ずつ、目附の家につとめているわけだ。この〔小使〕は中間のうち心もきき、読み書きもいくらか出来た者がつとめることになっていて……
（中略）小使は手のあいたときには、目附の家来や家族たちと話をしたり、子供たちを遊ばしてくれたりする。この小使の中に、十五、六歳と思われる少年の中間がいて、

これが原田であったのです。

原田は、なかなかに怜悧な男で、かつ容貌万端、私の子供ごころにも美男子であったな、とおぼえている。その上に愛嬌もあり、気もきくし、なかなかよく働きもするしで、私宅の家族も目をかけて可愛がっていたものです。

私も、原田が父の当番の日に来てくれることをのぞみ「佐之助、佐之助――」といって、ことさらに面白く遊ばしてもらったものだ。中間でも、この〔小使〕役をつとめるときは二刀を腰におびることをゆるされ、公用の書面をもって諸方に往復したものです。

ある時のことだが、私の住いしている役宅（屋敷内の長屋）より少し離れた〔お中間部屋〕で何か騒がしい物音がしたもので、私は外に遊んでいたのだが、さわぎが次第にやかましく、人々の口々に叫ぶ声もしたので、ふっと〔お中間部屋〕をのぞいてみたものです……。

松山藩の中間部屋は、大きくて広い二階建ての長屋が二つあって、一棟には藩直属の中間が居住しており、別の一棟には〔江戸抱え〕といって、いわゆる渡り中間が起居していた。同じ中間でも、この二組に区別があるのは当然であって、一方は、松山出身のものばかりだし、心がけによっては足軽にも若党にも身を立てることが出来ようというわけだ。そこへ行くと渡り中間は、江戸の口入屋から雇い入れたものばかりで、世馴れているかわりには、すれっからしも多く、飲む打つ買うの三拍子そろった

手におえぬものがいくらもいた。

松山藩では、藩の中間には、紺筒袖の上着に、膝までの短い袴のようなものをつけさせていたというが、渡り中間には赤く染めた法被を着せ、ために渡り中間は〔赤蜻蛉〕とよばれた。

まだ子供だった内藤翁がのぞいてみたとき、佐之助は下帯一つの裸体にされて後ろ手に縛りつけられ土間にころがされ、血だらけになって倒れていたのだ。

これを取巻いて十数人の古手の中間たちが手に手に棍棒をもち、かわるがわる佐之助を撲りつけ、そのうちに桶にくみこんだ水をざぶざぶとあびせかける。

気をうしなっていた佐之助が息をふきかえすと、またも棒をふるって撲る。また気絶をする。また水をかけるというわけで、戦前の日本海軍における〔制裁〕と称するものに、やり方がよく似ている。

とにかく、口にサルグツワをはめられている佐之助は、叫ぶことも泣くことも出来ない。

おどろいた内藤翁は家へ飛んで帰り、

「佐之助がひどい目にあっていますから助けてやって下さい」

と、母堂にたのまれたそうだ。

内藤家でも、かねがね可愛がっていた佐之助のことだから、藩の〔内用方〕の侍にたのみ、いろいろ聞いてみてもらったところ、

「あれは、中間部屋の掟にしたがって制裁を加えたもので、何、大したことではありませぬ。そもそも、佐之助めが若年に似合わず、目上のものに対し傲慢すぎるようでしてな。万事にさからう様があって、前々からみなに憎まれていたらしいのです。ことに、あのときは、昼間から酒に酔って御屋敷へ帰って来たというのでして、だいぶ挙動が荒々しく、中間部屋の目上の者がこれをたしなめたところ、かえって喰ってかかりましたそうな。その結果、ああいうことになったので、何、別に大したことではありませぬ」

内用方のものは、そう言って内藤家に報告をしたが、

「あの佐之助が、そのようなことを……」

内藤家の女たちは、非常におどろいた。

佐之助が、内藤家のような、上級藩士の家に出入りするとき、別人のような愛嬌と気ばたらきを見せたのには、理由があった。

上司にみとめられ、何としても身を立てて一人前の侍になってやろうと思いつめていたからだ。

そしてまた、時代の様相は、佐之助の野望を可能ならしめるものをふくんでいたのである。

三

数年前の嘉永六年に、アメリカ艦隊が浦賀に入港し、通商と開港の実施を幕府にせまった。

このときから、二百五十余年もの間、日本の政権をにぎり、天下に号令しつづけてきた徳川幕府の土台がゆるぎ出した。

もはや〔鎖国〕の夢を見ているわけには行かない。

アメリカのみか、ロシアもイギリスも、この東洋の小さな、美しい島国へ食指をのばしてきつつあった。

しかもそれは、恐るべき科学文明と財力を背景にした、傲然たる武力による威嚇をともなっていたのだ。

日本の海へあらわれた外国軍船を一目見ただけで、もう幕府は肝をつぶしてしまった。

すでに、幕府政治も飽和の極点に達していたところだし、何をするにも泥縄式な政策で尻ぬぐいをするのが精一杯というところで、

「これ以上、幕府に政権をゆだねておくわけには行かぬ」

「天皇を中心とした政権をつくり、合せて外国勢力を追い払わねばならぬ」

幕府のおとろえ方を見てとった水戸、薩摩、長州などの雄藩が、いっせいに起ち上り、幕府を糾弾しはじめる。

これら諸大名を押えつける力も、幕府には残っていない。

同時に、諸国にひろまりつつあった尊王思想が激しい運動に変って幕政の乱脈にせまった。

どこにもみちあふれていた浪人たちもこれに呼応し、あるいは憂国の情に駆られ、またはこの機会に立身の糸口をつかもうとして、

「幕府を倒せ、外敵をしりぞけよ!!」

と、いわゆる〔尊王攘夷〕の叫びを諸方にあげはじめる。

徳川幕府が最後の権力をふるい、これらの革命派を弾圧したのが、あの安政の大獄であったが、そのため、時の大老、井伊直弼が水戸の浪士たちに暗殺されたのは、万延元年三月三日である。

そのころになると、原田佐之助は、すでに松山藩を脱藩してしまっている。

彼もまた時代の風雲に乗じ、一旗あげようという野心に燃えていたわけだが、それはさておき、松山藩にしても、今までのようなやり方では行きづまってくる財政の打開もできないし、幕府から命ぜられる課役をつとめることもむずかしい。

もともと松山藩・松平家十五万石は、譜代の大名であるし、原田佐之助が三田藩邸の中間部屋で半死半生のおもいをしたころ、松山藩は幕府の命によって、江戸湾警備の任務をあたえられたものだ。

異敵にそなえるための品川砲台も、松山藩がつくったのだし、そのために必要な資金のやりくりにも、藩は大いに頭をなやませた。

同時に、急激に増加した種々の役目をおこなうための人材が、たちまち不足になった。

これは、当時の、どの藩でも同じことで、今までのように、禄高だの家柄だのと言ってはいられない。才能があるものなら、どんどん下から抜擢しなくては間に合うものではないのだ。

こういう気運になり、また事実、名もない軽輩から藩庁の重要な役目についた者も、かなりあったのだ。

「よし!!　おれもやるぞ」

佐之助は、彼なりに努力もした。

学問の方にはまったく自信がないから、ひそかに稽古をしている剣術と、天性そなわった気転の応用で、すでにのべたように、

「あやつは役に立つ男じゃ」

上司の人々からは、みとめられつつあったらしい。

ところが、足軽とか中間のような身分の低いものに向い合うと、佐之助は、とたんに傲慢な態度を見せた。

（おれは、うまれがちがう。本来なれば、御側御用人の家にうまれていたところなんだぞ）

と、まさか口に出しては言えぬが、そう信じきっているから、しぜんに言動があや

しいものとなるわけであった。

「あれをせい、これをせい」

と、年輩の足軽などが用を言いつけても、

「ふン」

せせら笑って相手にもしない。そして同じ中間同士なら、いくら先輩であろうと年かさであろうと、

「わしに用事を言いつけるなンて、お前さん方、頭がどうかしてやしないか」

十七や八の若僧が肩をそびやかして、うそぶくのである。

中間たちから見れば、どうかしているのは佐之助だということになる。

「佐之の奴め、気がふれているのじゃねえか」

御用人の落し子だなどというわさは、江戸では通用しない。松山は松山、江戸は江戸である。殿様は参覲で領国と江戸を行ったり来たりするが、家来たちの役目は二つに分れているのだ。

それでも佐之助は、

(今に見ていろ。おれは、皆々さまに可愛がられているし、御用人さまの息がかかっている。きっと出世できるンだ。それが証拠に、松山で、あれだけあばれまわったのに、何のおとがめもなかったじゃないか)

うそぶいていた。

中間部屋で制裁をうけたのも、佐之助のこうした言動がもとになって、中間たちの怒りが爆発したにすぎない。

間もなく、佐之助は、ふたたび松山へ送り返されることになった。

「ごろんぼの佐之助が帰って来たぞな」

「精五郎さんも、また気がもめることだろう」

「きっと、また何か仕出かすぞ」

唐人町の足軽長屋では、佐之助を迎えてやかましかったが、今度は、佐之助のほうで相手にもしない。

二年間の江戸暮しは、さすがに佐之助の美男ぶりを垢ぬけさせていた。

江戸の中間長屋にいたころ、女も酒も博打打ちも、ひと通り卒業している佐之助だから、

「ふン、田舎ものめ」

胸を張り、ふところ手をして悠々と町を歩いて行く姿は、とても二十前の男に見えなかったという。

そして、佐之助は、自分ひとりの才覚でもって、馬廻役・長沼蔵人の屋敷へ足軽奉公に出たものである。

以来、佐之助は懸命にはたらき、一年後には若党にとりたてられ、主人の長沼が公用で江戸へおもむいたときには、その供をしている。

二年目に、佐之助は恋をした。
相手は、主人の次女であって、名を正子という。
十七歳の美女である。
だが、この美女は佐之助をきらった。
そのころの身分関係からいえば当然なのだが、佐之助は大いに怒り、
（本来ならば、そっちから縁組をたのみに来るべき家に、おれはうまれていたのだぞ）
一度、強引に正子の寝所へ忍びこもうとしたことがある。
見つけられたばかりではなく、長沼家を追い出された。
追い出されただけですんだのも、ふしぎである。
（やはり、おれには御用人様の息がかかっているンだ）
と、またも佐之助の信念は強固になるばかりであった。
ひまにまかせて、佐之助は鉄砲組・足軽の倉庫から大太鼓をもち出し、これを肩から革帯をもってつるし、上半身は裸体という格好で、しかも手ぬぐいで頬かぶりをし、城下町を、
「それっ」
気合いをかけながら、ドンドコドンドコ太鼓を打ち鳴らして歩くのである。
原田精五郎夫婦も困りはてた。

しかも道行く藩士たちは眉をひそめ舌うちをして、佐之助の狂気じみたありさまをながめはしても、一片の注意すらあたえないのだ。
佐之助の〔ごろんぼぶり〕には、何か異常な気魄がみなぎっていて、
「あのような下郎を相手に喧嘩をしても、つまらぬわい」
と言いわけはするが、内心、佐之助の乱暴が怖いのだ。
そのころの侍なぞというものの大半は、もう事なかれ主義が身にしみついてしまっている。
しかし、たまりかねて、一人出て来た。
安政六年の夏もすぎようという或る日のことだ。
太鼓を鳴らしつつ、鮒屋町の通りを歩いている佐之助の向うからやって来た中年の藩士が、
「下郎つまらぬまねをするな」
いきなり叱りつけてきた。
興奮で、その藩士の顔がまっ赤になっているのを、ちらと見やって、佐之助が冷然と、
「私は、下郎ではない。侍だ」
と、やり返した。
「ふうむ……」

一呼吸あってから、その藩士が、押しころしたような声になり、
「侍なら、腹が切れるか、どうじゃ切れまい」
つまらぬことを言ったものだが、この言葉を聞いたとたんに佐之助の顔に、かあーっと血がのぼった。
「おどろくな!!」
佐之助は太鼓を放り出し、脇差を引きぬくと、
「おれァ立派な侍だ、腹が切れンでどうする、どうする、どうする!!」
わめくや否や、ぬいた脇差を逆手に、ぷすりと、むき出しの腹へ突きたてたものだ。
ぴゅーっ……と血がはしった。
今度は、藩士が蒼白となり、がくがくふるえ出したかと思うと、物も言わずに逃げた。

四

「馬鹿なことをしたものさ。おれにはどうも狂気の血がまじっているらしいぜ」
原田佐之助は、道場の床に薄べりをしき、下帯ひとつで寝そべりながら、となりに、これも寝ころんでいる永倉新八に言った。
稽古をすでに終り、夕暮れ近い風が、窓からそよそよ吹きこんできはじめ、小さな庭で、しきりに茅蜩が鳴いている。

「だがなあ、永倉氏。その、おれの惚れた正子という女は、ふるいつきてえほど、いい女だったよ」
佐之助は、腹に残った傷口を撫でながら、そんなことをつぶやいた。
あれから、まる三年もたっていた。
腹切り事件があって、傷が癒ると佐之助は奉行所の取調べがやって来る前に、まだ痛む腹を押えて、松山城下からぬけ出し、江戸へやって来た。
一応は脱藩ということだから、罪は重いのだが、もう藩庁は〔ごろんぼ〕の佐之助なぞを追っかけているひまはない。それでなくとも人手が足りず、金がたりないのが幕末の大名である。
「あんた剣術は、何流で、どこでおぼえたんだ?」
これも松前藩・江戸屋敷から逃げ出して来た永倉新八が訊いたとき、佐之助は、
「原田流よ」
にやりとして、
「おれはね、永倉氏。もう十何人も斬っているよ」
「ふうむ……」
嘘ではないと、永倉は思った。
永倉は、神道無念流・岡田十松門下で免許をもらったほどの腕前である。
その永倉が佐之助と稽古をしてみて、そう思うのだから、この三年間に、佐之助の

剣術というものが実際的な修錬をかなりつんできていたことはたしかなのであろう。

いま、二人が居候をきめこんでいる道場は、小石川・柳町にある近藤勇のものであった。

近藤は、武州多摩の農家にうまれ、天然理心流の近藤周助に見こまれて養子となり、道場をついだ男だけに、野性的な好漢である。

道場は小さいが近藤をしたって集まった土方歳三、井上源三郎、沖田総司、山南敬助など、剣をもって世に出で、乱世に身を立てようという連中が、いつも、ごろごろしている。

みんな剣術が飯より好きな連中だし、毎日の稽古は火を噴くような激烈なものであった。

この道場へころがりこむまでの原田佐之助が何をしていたか、それは不明であるが、永倉新八と酒をくみかわしているときに、一度だけ、

「そりゃねえ、いろいろなことをやったさ、まあ、岡場所の用心棒なんていうのは、まだしもいい方だった。だいぶ、悪いこともしたよ」

首をすくめて見せたことがある。

佐之助の風貌もだいぶ変っていた。

体つきも、堅肥りながら、でっぷりとした感じになっていた。色白の肌も浅黒くなり、眼光もするどく、よく言えば美男ぶりがたくましくなったとも言えるし、悪く言えばおそろしくなったとも言える。

それでいて、笑うと右頬にふかく笑くぼが出て、人なつこい感じであった。

言葉つきも、松山なまりがほとんどなくなり、伝法な、ときには柄のよくないものに変ってしまっている。

佐之助、ときに二十三歳であった。

仲のよい永倉は一つ上の二十四だ。しかし、どちらかと言えば童顔の上に育ちがよく、おっとりとした性格の永倉新八よりも、佐之助は三つ四つ上に見られたものだ。

近藤勇の道場〔試衛館〕にあつまる連中が、幕府の浪士隊募集に応じ、近藤と共に京都へのぼったのは、文久三年二月である。

この浪士隊が〔新選組〕となり、京都守護職たる会津侯の庇護のもとに、勤王志士たちと血なまぐさい争闘をくり返したことを、ここに、くだくだしくのべるまでもあるまい。

京へ来てからも、佐之助と永倉新八は仲がよかった。

はじめ、浪士隊が二つに割れ、近藤派と、もう一人の隊長・芹沢鴨（水戸出身）一派があらそい、ついに芹沢が近藤派に暗殺されて、ここに新選組が誕生し、近藤勇の独裁となったわけだが……。

この粛清事件に、永倉新八も巻きこまれそうになった。

つまり、永倉は芹沢鴨から大いに可愛がられていたので、

「気の毒だが、永倉君にも死んでもらおう」
副長の土方歳三が、しきりに言うのを、
「まあ、私におまかせなさい。きっと引きうける」
原田佐之助が請け合い、永倉は難をのがれた。
近藤も土方も、佐之助には一目おいていた。
秘密な用件でも、近藤は佐之助に必ずうちあけたものだ。
芹沢を暗殺したときも佐之助は加わっていたし、あの有名な池田屋斬り込みの際に、三十人もの勤王志士たちが集まっているところへ、十名かそこらで斬り込まねばならなくなったとき、
「まあ、原田君と永倉君がいれば大丈夫というものだ」
と、近藤勇は隊士の大半を土方にあたえ、別口の四国屋に集合する勤王志士を襲撃させたほどであった。
四国屋には、集合がなく、すぐに土方は池田屋へ引返して来たが、それまでの四半刻（三十分）ほどの間、三十対十の斬り合いのすさまじさは言語に絶するものがあった。
「あのときは、もう駄目かと思ったねえ」
後になって、佐之助は、ぼろぼろに刃こぼれした愛刀をながめ、
「どうも、おりゃ、なかなかに死なねえ生まれつきらしい」

ふっと言った。
「ふふん。腹を切っても死なぬ男だものな」
永倉がからかうと、
「その通りだ」
佐之助は笑いもせず、まじめくさっていた。
池田屋における勤王志士たちの謀議というのは——強風の日をえらんで天皇おわす御所へ火をかけ、混乱に乗じて、幕府に味方をする大名や公卿たちを殺し、同時に、天皇を御所からおつれ申し、これを長州へうつしまいらせようという大変な計画であった。
それだけに、彼らを一網打尽にした新選組の功績は幕府からも大きくみとめられ、月々の給料もゆたかになった。いや、ゆたかすぎるほどになった。
ことに、副長助勤といって幹部級にある佐之助や永倉などは、月に十五両以上の手当が出た。
そのころの町人たちの暮しの一年分にあたる金が毎月もらえたのである。
そのかわり、いつ勤王方に斬られるか知れたものではない毎日なのだから、緊張の連続でもあるし、この緊張をほぐすためには、どうしても酒と女よりほかにないということになる。
何しろ、口では〔勤王〕をとなえながら、御所に火をつけ、天皇をさらってしまおうというのが勤王志士たちのやり方である。

「当然ではないか。天皇を幕府の手からお救い申すのだ」
と、彼らは言うのだが、革命のための理屈は、いくらでもつく。
だからこそ、革命が内蔵するエネルギイは激しくて強烈なものとなるのだ。
こういう相手と毎日のように斬り合いをするのが新選組の役目だ。
「勤王浪人どもをやっつけた後には、我々も、かならず公儀の御取立にあずかることができる」
という立身出世への希望もあったわけだが、それを忘れるほど夢中の毎日でもあった。
新選組の幹部たちは〔休息所〕と称して、妾宅をもうけ、非番のときは息ぬきをしてくるのだが、佐之助は酒にひたっても、女には、あまり興味がなかったようで、
「おい、いい男。島原では原田先生を連れて来てくれと、女どもが大変だぞ」
永倉が、よく冷やかしたが、
「ふうん……」
気のなさそうな返事ばかりで、壬生にある新選組屯所から目と鼻の先の島原遊廓へも、あまり出かけようとはしない佐之助であった。

五

原田佐之助は、ひまさえあれば、屯所内にもうけられた道場へ出て来て、

「片っぱしから、かかって来い!!」
隊士たちを相手に、いくらでも稽古をやった。
その上、宝蔵院流の槍をよくつかう谷三十郎という隊士に、
「おれア、あんたに弟子入りをするぜ」
たゆむことなく、谷から槍術をならって、
「もう、立派なものですよ、原田さん」
半年もたたぬうちに、谷のほうが音をあげるほどの上達をしめした。
そのころの京の町は、勤王、佐幕入りみだれての暗殺流行で、
「新選組の近藤を斬れ」
と、長州藩がさしむけた刺客が、ひそかに、隊士募集に応じて入りこんできたこともあるし、
「一人歩きを禁ずる」
近藤局長の命令も出ていた。
ともかく、幕府を奉じ、ひたむきに勤王志士たちと闘うものは、会津藩と新選組だけといってもよい。
こういうわけで佐之助は、新選組が演じた乱闘事件にかならず参加しているし、そのはたらきぶりも、図ぬけていた。
佐之助の剣術は、正規の修行を経てから実戦へ移ったのではない。

江戸での無頼暮しの中で何人も斬ったのちに、近藤の道場へころがりこみ、これも実戦的な猛稽古によって鍛えられたものである。

「おれは、もう何といっても、出来るものは剣術一つきりしかねえのだよ、永倉君。だから、おれは、これ一筋にみがきをかけるつもりだ。ぶじに生き残り、世の中がおさまれば、おれも徳川の侍だ。人にア、負けねえつもりさ」

永倉新八も剣術は飯より好きだが、佐之助の飽くことなき貪欲さには何度も目をみはったものである。

ひまさえあれば、道場へ出て行く。

原田に用があるときは、先ず道場を見ろ、と言われた。

稽古相手がないときは、一人きりで居合をつかう。

これは、まことに見事なもので「真剣が原田の両腕にみえる」と、近藤勇がもらしたほどだ。

鞘走って空間を切り裂き、たちまちに鞘へ吸いこまれる閃光は、道場の床を右に左に飛ぶ佐之助の体軀の奔放自在なうごきと相俟って、見るものに息をのませた。

「おれはねえ、どうも女はいかん」

と、佐之助が永倉に言ったことがある。

「どうして？　江戸にいたころは、よく遊んだじゃないか」

「あのころは、まだ、よかった」

「……？」

「このごろは、いけねえ」

「何が？」

「ふふン……」

くすりと苦笑をもらし、佐之助は声をひそめ、

「他人には言えねえが……新八さんならいいだろう。おれア、このごろ、とんといけねえのだ。肝心の一物が、いざというときの役にたたねえのだよ」

「まさか――」

「本当だ」

佐之助は眼をむいて見せ、

「女遊びをしに出かけて、ものの役にたたねえなぞというのは……ばかばかしくて話にもならん。だから、ついつい御無沙汰しているんだ」

「どうしてだ？」

「わからん。あわれや、その気が起らねえのだ」

「まさか――まだ二十六じゃないか」

「老ける年でもねえのだがね」

「は、は、は……貴公、どうかしているのだ。しっかりしろよ、おい――そうして、早く休息所をこしらえるんだな」

永倉は冗談にしてしまったようだが、これは事実であった。

佐之助の筋肉は、剣ひとすじに、こりかたまっている。

佐之助の神経という神経は、剣ひとすじに磨ぎすまされている。

武術に対して、異常なほどの執着を見せる佐之助の肉体機能は、性欲にはたらきかけるそれとは別のところで活動をしていたものらしい。

むかし、塚原卜伝なんどという剣術の名人は、生涯、女色を絶って修行にはげんだという。

（卜伝という人は、絶ったのじゃアなくて、気が向かなかったのじゃアねえか……!?）

ふっと、佐之助は思ったことがある。

なるほど、現代でも、たくましいスポーツのチャンピオンかならずしも性欲が旺盛でないことは、よく知られているところのものだ。

ことに、佐之助は一剣をもって身を立てようと決意し、そのためには人一倍のはたらきもしたいという意欲が異常に激しい。

はたらきといっても算盤をはじいているのではない。

勤王志士たちを京の町から絶滅しようとする役目についている新選組の一員として、はたらくわけだ。

命がけである。

闘争に対して絶えず緊張している佐之助の交感神経は、生身の女のからだを抱こうという感覚に反撥していたのかもしれぬ。

ところが、佐之助の身に変事が起った。

慶応元年の夏の或る夜のことである。

このころ、幕府は、長州藩征討の軍をおこそうとしていて、物情騒然たるものがあった。

新選組の威勢が、その頂点に達していたときである。

その日の夕暮れに、原田佐之助は、ぶらりと一人きりで、屯所を出た。

非番でもあったし、何かうまいもので酒が飲みたくなったので、佐之助は、永倉ともよく行ったことがある〔いけ亀〕という料理屋へ出かけて行った。

〔いけ亀〕は、四条と五条の橋の間にある松原橋の手前にあって、川魚料理が自慢の店である。

鮎で酒をのみ、飯をたべてから、佐之助は帰路についた。

高瀬川べりをぶらぶらと下り、五条通りを、しばらく行ってから北へまがった。

月もなく、どんよりとした蒸し暑い夜であった。

左手に因幡薬師の土塀があって、佐之助は、この土塀に沿ってまがるつもりだ。

あたりには寺院が多く、宵の口なのに人通りも絶えている。

行手に四条通りの灯が、ちらちらと見えもするが、闇は濃かった。

（ふふン。今に見ていろ、松山のやつらめ、原田佐之助、立派な旗本にもなって見せてやるからな）

にやりにやりと、そんなことを思いながら土塀をまがったとたんに、

「む!!」

曲り角に待ちかまえていた白刃が佐之助の面上へ打ちおろされた。

六

ぱっ……と、佐之助は敵のふところへ飛びこんでいた。

敵の刃をかわすのではなく、反対に飛びついたのである。

女も抱きたくないまでに磨ぎすましてきた反射神経の見事な反応であったといえよう。

がつん、と、敵の振りおろした刀の鍔が、佐之助の左肩に当った。

痛みを感じる場合でもなかった。

するりと、佐之助は両手を敵の胴にまわしながら、うしろへ擦りぬけた。

「おのれ!!」

向き直って斬りこもうとする敵に、

「くそ!!」

必殺の一刀が佐之助の鞘から走り出た。

「ぎゃっ……」

棒を倒したように、ひどい音をたてて、敵が転倒した。

「狗め!!」

「覚悟!!」

敵は、まだいた。

細い道の三方から、敵は突風のように佐之助を目がけ、殺到して来た。

前にも、二度ばかり、佐之助は一人歩きをして刺客に襲われたことがある。

「自重してくれ給え、原田君。一人歩きはいかん。隊士たちのためにならんではないか」

副長の土方歳三が苦虫を噛みつぶしたような顔つきで、何度も叱った。

新選組を、勤王派は蛇蝎のように憎んでいる。

佐之助のような腕きをうしなっては困るので、近藤勇も、

「大丈夫なのはわかるが、鉄砲をうちかけられるということもあるぞ」

と、佐之助をいましめたことがある。

この夜も、原田佐之助は四人のうち、三人までを斬り倒したが、最後の一人が、ひどく手ごわい。

さんざんに斬りむすんだあげく、呼吸をととのえるために飛びはなれた幅二間ほどの間合いを、一気に双方から詰め合い、

「たあっ!!」

「ええい!!」

同時に、刃をふるい合った。
佐之助の一刀は、敵の横面から喉にかけて、ざっくりと割りつけたが、敵が送りこんで来た一刀も、佐之助の左肩を斬っていた。
（やられた!!）
そう感じつつ、飛びぬけておいて、振りむきざまに刀をかまえて敵を見ると、
「う、う、むゥ……」
反り返った敵の手から刀が落ち、そのまま敵は、くたくた崩れるように地に伏し、うごかなくなった。
ほっとした。自分の傷口をさぐってみると、さして深くはないので、そのまま手ぬぐいを当てて歩き出したが、ばかに出血がひどい。
このとき、原田佐之助が飛びこんで傷の手当をした町家が、東洞院五条上ルところの古着屋・山崎屋文蔵宅であった。
佐之助は、この山崎屋で医者を呼んでもらい、手当をうけると、血だらけのかたびらのかわりに山崎屋の古着を買って身にまとい、壬生の屯所へ帰って来た。
すぐに隊士たちが出動し、現場へ行ってみると、佐之助に斬り倒された筈の四人の刺客の死体は、どこかに消えてしまっていたという。
「仲間のものが運び去ったのだ。原田君、だから……」
と、土方歳三が言いかけると、

「言わぬこっちゃアないというわけですか。はい、はい、気をつけます」
佐之助も頭をかいて、永倉新八に、
「今度は、ちょいとおそろしかった。池田屋のときよりも怖かったよ」
ぺろりと舌を出して見せた。
それからは、佐之助もだいぶ気をつけるようになった。
翌々日、佐之助は屯所の下男に言いつけて、三条通り小橋にある〔浅田香菓軒〕の蒸菓子の箱を取りよせ、これを抱えて、山崎屋へ礼に出かけた。
部下の隊士五名が附きそっている。
「大げさだな。みんな、少し離れたところで待っていろ」
佐之助は苦笑しつつ、山崎屋ののれんを肩で割って、中へ入って行った。
「ま……」
ちょうど、店先にいた女が、あわてて奥へ入り、主人の文蔵を呼んで来た。
この女の名を、その日、はじめて佐之助は耳にしたものだ。
女の名は、まさといった。
松山城下で佐之助の恋をはねつけた長沼家の娘、正子と同じ名である。
まさは、仏光寺上ルところの薬種問屋椿生堂の娘で、未亡人であった。
二年前に嫁いで八日目に、新婚の夫が急死をしたのだという。
椿生堂と山崎屋は親類でもあり、そのころ、山崎屋の女房が病臥していたところか

ら、まさが家事を見るため、山崎屋に来ていたのである。
そうした事情は、もっと後になってわかったことなのだが、以来、原田佐之助はひまが出来ると、山崎屋を訪問した。
市中見廻りの途中でも、
「茶をのませていただけまいか」
いつもの荒っぽい口のききようではなく、おっとりとすましこんで、山崎屋へ入って行ったものだ。
表に待っている隊士たちは、佐之助の気どりぶりを見て、くすくすと笑い合った。
「どうも、山崎屋の女に惚れこんだらしいですよ」
中村金吾という隊士が、永倉新八に告げた。
「美人なのか、その女……」
「京の女は、みんな、きれいですよ」
「ふうん……原田がねえ……」
まさは、二十一であった。
京女にしては、肌が少し浅黒かった。
その肌にみなぎる健康な血のいろも、飾り人形のような京の女には無いものである。
化粧もろくにしていないのだが、
（いや……何とも言えぬ、いい女だ）

佐之助は、いっぺんに参ってしまったらしい。
まさ、という名が、佐之助の心をひいたのかどうか、それは知らない。のちに佐之助は、まさ女に二人の子をうませている。
おそらく、佐之助は、まさのすべてが一目見たときから気に入ったものであろう。
気に入ったとたんに、あの夜、あわてもせずに甲斐甲斐しく傷の手当をしてくれた彼女の印象を、あらためて強く思いおこしたに違いない。
（あのときは、おれも夢中だったが……）
じいっと見つめる佐之助を見て、まさも、また血がさわいだ。
何しろ、島原の遊女たちが、原田先生に抱いてもらえるなら身銭を切ってもいいとさわいだほどの美男である。
無理もないところか——。
間もなく、佐之助とまさはむすばれ、本願寺筋鎌屋町に世帯をもった。
〔休息所〕ではない。ちゃんと夫婦になったのである。
夫婦誓いの盃は、〔いけ亀〕でおこなわれた。
近藤、土方以下、新選組の幹部が列席して、佐之助夫婦を祝ってくれた。
「ふうむ……ああ見えて、原田君という男は、思いもかけぬ生一本なところがあったのだな」
皮肉屋の土方歳三が、しきりに首をかしげては、傍の永倉新八にささやいた。

「あの人は、思いつめた一つの事だけしか出来ない人ですよ。二つも三つもいろいろなことを同時にはやれぬらしい。見ていてごらんなさい。これからあまり道場へも出なくなりますよ」

「そりゃ困るな。原田が隊務をおろそかにしては……」

「は、はは……そう大げさに考えることもないでしょう」

翌慶応二年の秋に、早くも長男がうまれた。

この子に、佐之助は〔四郎兵衛〕と名をつけた。

これには、まさが反対をして、

「そないに、じじむさい名は厭どす」

しきりにせまるので、佐之助も、

「この名は、おれの本当の父親の名なんだが、いけねえかなあ」

しょげた顔つきになって「じゃア、やめようよ」と言った。

七

薩摩藩と長州藩が手をむすぶに至り、徳川幕府の崩壊は、雪崩のような速度を見せ、明治元年一月、鳥羽伏見の戦いに、幕軍は勤王軍に大敗を喫した。

つづいて、徳川征討大号令が発布され、錦の御旗を押したてた官軍は、一挙に江戸城へせまる、ということになる。

鳥羽伏見の戦いには、むろん、新選組も幕軍の一部隊として参加をした。

出陣の前に、原田佐之助は釜屋の自宅へ駆けつけ、

「ゆっくりもしていられねえが、子供をたのむ。腹の中の子も、な……」

まさの手をにぎりしめ、

「腹の中の子を大事にしてくれ」

何度も、くり返した。

まさは、二度目の子をみごもっていたのである。

「あなた、生きて帰れますのやろな?」

「あたり前だ。おれも、もう無茶はしないよ。お前もいるし、子供もいるんだからな」

と、佐之助は笑って、

「何、軍勢をくらべても、こっちの方が多いんだ。勤王の奴らに負ける筈がねえ」

勝とうと思えば勝てた戦いであった。

しかし、天皇をいただき、錦の御旗をおしたててくる官軍を見ると、どうも幕軍は二の足をふみ、ことごとに機先を制せられてしまった。

何よりも時の将軍・徳川慶喜が、幕軍を放り出して、さっさと大坂から江戸へ逃げ帰ってしまったのでは、幕軍たるもの戦闘意欲をうしなうのが当然である。

この戦いでは、新選組も多数の死傷者を出した。

そして、敗走する幕軍と共に、新選組も、江戸へ逃げ帰るのである。

これから後の戊辰戦争のいきさつは、誰も知るところのものだ。

新選組も、ばらばらになり、近藤勇は、甲州での戦いに敗北し、つづいて下総・流山へ逃げ、ここで官軍に捕えられて、首をはねられた。

原田佐之助は、その前に、近藤たちと別れ、仲よしの永倉新八と共に同志をあつめ、一度は、奥州にたてこもった会津軍と合流して、最後まで官軍と戦うつもりであった。

ところが、佐之助は、どうしたことか、上野の彰義隊に飛びこみ、あの上野の戦争で銃弾を受け、これがもとになって死亡したということになっている。

死亡したときの年齢は、二十九歳と、官軍の記録にも残った。

かくて、徳川幕府も、そして新選組も、怒濤のような時代の変転の中に消えつくした。長州・薩摩の藩勢力を中心として明治新政府が誕生し、日本は、いよいよ近代国家に生まれ変るための苦難の道へ、足を踏み出すわけである。

明治二十七、八年の日清戦争につづき、三十七、八年の日露戦争における日本の勝利は、後進国の日本を、にわかに世界の檜舞台へ押し出すことになった。

成長期の活力が、日本にみなぎっていた時代である。

汽車も走る、電灯もつく、洋食も食べられるという文明開化が、ようやく板についた時代である。

明治三十九年十二月六日の夜のことだ。

愛媛県・松山市となった旧城下町の〈伊予・農業銀行〉につとめる大原丑太郎の自宅を訪れた老紳士があった。

大原丑太郎が、佐之助の弟であることを、読者は思い出して下すったろうと思う。

佐之助の両親は、いずれも前後して、明治維新直後に病死したため、丑太郎は、「原田の家は、兄が継ぐのじゃから――」という気になって、城下の質屋へ聟養子に入った。そのときは佐之助死亡のことを知らなかったらしい。

ために、丑太郎は大原姓となったわけだ。

当時の丑太郎の家は、市中の南半里ほどのところ、温泉郡・石井村にあって、丑太郎は、ここから自転車に六十三歳の老軀を元気に乗せて、毎日、銀行へ通っていた。

「ごめん……」

冷たい冬の雨が降りしきる玄関口に馬車がとまり、降りて来た老紳士が、家の土間へ入って来たとき、丑太郎夫婦は夕飯の膳をかこんでいた。

「どなたで？」

丑太郎老人が声をかけると、

「わからんかのう」

老紳士が、にこにこと言う。うすい頭の毛も、あごにたくわえた立派なひげも、ほとんど白くなっているが、血色のよい、とても七十に近い老人とは思えぬつやつやした顔つきで、堂々たる体軀を背広とマントに包み、手には洋傘をさげていた。

「わからん筈じゃ、おぬしとは、もう五十年近くも会うてはいなかったのだからなあ」
丑太郎老は、はっとなった。
「あんた、佐之助兄さんぞな？」
「おう、おうおう」
うれしげに、老紳士はうなずき、
「お前も、じじむさくなったのう」
と、顔をしかめて見せた。
兄弟が、その夜、どんな語らいをしたか想像にまかせよう。
「兄さんは、死んだと聞いたが……」
丑太郎が言うと、
「何、死んだことにしたのよ。生き残っていることが官軍に知れて見なされ、佐之助の首が、いくつあっても足りぬ、足りぬ。何しろ、わしは、もう勤王志士を何人斬ったか、おぼえがないほどじゃもの」
「もう大丈夫。政府は旧幕府の士を、すべてゆるされましたものなあ」
「うむ……」
「ところで、兄さんは、いま何処におられますぞな？」
「当ててごらん」
「さあて……？」

「上野の戦争のどさくさまぎれに逃げたが、もう体を隠す場所もない。京都にある女房や子供に一目会ってからと思いはしたものの、京都へ戻るなぞということは、危険中の危険じゃった」
「フム、フム……」
「おりゃ、越後へ逃げたよ」
「ほう……？」
「越後から満州へ逃げた」
「げえっ――」
さすがの丑太郎も目をまるくした。
「そ、そ、そうでしたか……」
「いま、馬賊をやっとってな」
「バ、バゾクを？」
「満州の馬賊の頭目じゃよ、おれは――」
「ははあ……」
「日清、日露の戦争には、おれもこれで日本軍のために、ひどく骨を折って、ひそかに働いたものだ。まあ、罪ほろぼしというわけかなあ。は、は、は……」
両親のことに佐之助は、ふれようともしない。
たまりかねて、丑太郎が口をきった。

「兄さんは、まだ、あの御用人様の落し子だと思うとられますかな？」
「あたり前ではないか」
「そりゃちがう」
「何!!」
「母が亡くなるとき、私に何も彼も話してくれましたぞな」
佐之助の顔色が変ってきた。
「そりゃ、どんな話だ？」
「母と御用人さまは兄妹じゃったそうな――」
「兄妹とな……」
「御用人さまの父御の大弐さまが小間使いに生ませた子が、御用人さまとわれらの母ですがな。そのうち、男の子がないため、兄の方は山田家の後をつぎ、立派な御用人となり、われらが祖母さまは、母を腹にみごもったまま、玉井権介どの、すなわち祖父さまの嫁御となったわけぞな」
「ふうむ……」
佐之助は、がっくりと肩を落し、茫然と空間を見つめたまま、ひくひくと唇のあたりをうごかし、しきりに白いひげをしごいた。
丑太郎は微笑して、
「ごろんぼの佐之助には御用人さまも手をやかれたらしいが、何せ実の妹の子供、御

自分には甥にあたる兄さんゆえ、いろいろとまあ、かげになって庇立てをして下されたそうな……」
「むゥ……」
「それがのう、兄さん。明治の世となり、この松山も新政府のもとになったので、母も安心し、やっと私にも打ちあけてくれたというわけぞな」
しばらくは、低くうなりつづけていた佐之助が、ややあって、
「それにしても……それにしても、あの両親の子供にしちゃ、おりゃ少し美男すぎる。これは少々妙じゃないかね」
と言った。
丑太郎は、ぷっとふき出したが、
「そういうことも、世の中にはありましょうよ」
「そうかのう……」
「けれども、兄さん……」
「もし……」
と、佐之助は言った。
「もし、御用人さまの落し子でなければ、母は別の男と……」
「何を申されます」
「いや。おりゃ、あんな親父の子じゃない。おりゃ、もっと美男だよ。あんな両親の

子であるわけがない。おふくろは、おやじと一緒になる前、ともかく別の男と……」
「しかし……」
「おやじは、おれに冷たかった。お前だけは猫可愛がりにしたものだが……」
そう言われて丑太郎も考えこんでしまった。
「ま……まあ、いい。いいさ」
佐之助は、いきなり快活な調子をとりもどして、
「おりゃ死ぬ前に一度、祖国の姿を見ておきたいと思い、やっと、ひまを見つけてやって来たのじゃ。そんなことよりも、もっと互いに話すこともあろうじゃないか、丑太郎」
「はあ」
「さ、一杯ごちそうしてくれんかい」
「はい、はい」
丑太郎の細君が、酒肴の仕度にかかった。
二人の娘は、それぞれ、市中の商家へ嫁いでいるし、丑太郎夫婦には孫が六人もいた。
「それよりも、兄さん。京都の……」
「女房と子かい？」
「はあ」
「たずねて見たが、むろん駄目じゃった。どこへ行ったものか……京都も、江戸も変

ったのう」
「会うてみたいでしょうなあ」
「いや、それも考えものよ。女房も……まさも、子供をつれてどこかへ再縁ということになっとるかも知れん。そこへ、このじじむさい馬賊の親分があらわれ出て見ねえ。とんだことになろうよ」
兄弟は夜を徹して歓談した。
丑太郎がふと思いついてそのころ松山の人々の口からも、
「坂本竜馬を暗殺したのは、ごろんぼの佐之助じゃそうな」
と、うわさされていることにつき、
「本当だったので？」と訊くと、
「ちがうよ」
「しかし、兄さんの刀の鞘が現場に落ちていたそうで……」
「馬鹿な」
佐之助は大笑して、
「この佐之助が差料の鞘を落してくるものか。ふざけちゃアいけねえよ」
坂本竜馬は、勤王志士中の大立者である。
それだけに、彼を暗殺した数人の下手人について、論議は昭和の時代に入るまで、やかましく、くり返されたものだ。

「だが、兄さん。近藤勇は板橋で官軍の取調べをうけたとき、やはり兄さんが下手人だと白状したそうな――」

「白状じゃない。きっと近藤さんは、もうめんどうくさくなったから、いいようにしておけと思われたのじゃよ」

「なるほどなあ……うわさというものは、いろいろと違うものですなあ」

「うむ……おれも誰の落し子やら……」

と、まだ佐之助は〔落し子〕説を変えようとはせず、

「これで、おれも少し狂気の気味があってな。一つのことを思いつめると、もう我慢がならない。思ったことは良い悪いの判断がつかずに、かならずやってしまう。満州へ逃げようかな……と思いついたとたんに、おれはもう、すぐに越後の港から密航するがよいと決意がきまったものじゃ」

「ははあ」

「そうなったら他人のことなぞ、爪の垢ほども考えぬのじゃ」

「なるほど……」

「これが、ごろんぼというものかなあ」

翌朝も雨であった。

ゆっくりと朝飯をすましてから、

「今日は銀行を休みます」

と、丑太郎が言うと、

「そりゃいかん。おれも帰るよ」

「しかし、せっかく……道後の温泉にでもお供しますぞな」

「いいんだ、いいんだ。おりゃもう、これで満足。たった一人の肉親のお前と生きて会えて、ほんとによかったなあ。よかった、よかった」

大きな祝儀袋に金二千円也（現在の百万円ほどか）を入れたものを、

「お前の孫どもに何か買ってやってくれ」

と、丑太郎夫婦に渡し、原田佐之助は「送らんでもよいぞ」と、飄然と雨の中へ出て行った。

柄の長い洋傘をさし、黒皮の鞄をさげ、松山の駅に向う佐之助を、市中の人々の何人かは見かけたが、わかろう筈もなかった。

その後の原田佐之助は、行方不明である。このときの佐之助訪問を、後に、大原丑太郎は、まさ女の遠縁にあたる渡部某と会ったとき、渡部へ語って聞かせたという。

解説

池波さんには『蝶の戦記』『忍びの女』など忍者ものも多い。『忍びの旗』（読売新聞昭和五十二年九月から約一年）の連載を担当したのが機縁で、この解説を書くことになった。

原稿締切になっても原稿を書かない作家を〝編集者泣かせ〟という。池波さんは〝喜ばれる〟作家で、締切より一週間前には、作品が出来上っている。作品は原稿用紙のマス目におさまらない大きな字で書かれている。原稿用紙三枚で、と依頼すると、三枚半位あり、活字で拾うと、ちゃんと三枚分になっている。長年のカンによるものだろう。さらに、原稿を手にすると、元来は編集者がするべき、改行や句読点を明確にするマークが、色鉛筆ですでに記されている。池波さんは「作品は、編集者に手渡す二、三日前に出来ていて、直前にもう一度読み返す」という。

こうしたナマの原稿にふれ、芝居、酒、食事、雑談を通して人柄にふれると、担当編集者としての目がくもっていくような気になり、『忍びの旗』連載中は、意識的に目を大きく開いていた記憶がある。

ところが、この本にある四編については、すでに活字になっていて、編集者としてではなく、一般読者として接すればよいという安心感があった。しかも、池波さん自身、「つまらなければ、つまらないと書いてくれてもいいんだよ」と、淡々としていた。

この四編は、いずれも歴史上の人物を主人公にしているという共通点がある。が、これは重要なことではない。それよりも、この作品が書かれた時期である。

池波さんというと、忍者ものはさることながら、読者の人気を得ている剣客商売、鬼平、梅安であり、池波さんにとっては、初期作品の集大成のようにとれる『真田太平記』だろう。私自身が、池波さんをこのように理解していて、実のところ、この四編は初めて読むものだった。当然、いつ書かれたものか、池波さんの作品をさかのぼってみた。鬼平ものなど人気作品が書かれる数年前のことだった。

さらにさかのぼって、直木賞受賞作品『錯乱』や『真田騒動』を読むと、この四編が浮き上がってくる。『錯乱』は周知のように、真田信之と、幕府が親子二代にわたって真田家に送り込んだ密偵との葛藤が描かれている。スパイ・スリラーを読む感じを受け、それなりに面白い小説だが、史実と行間が詰っていて、読む者に重さを感じさせる。池波さんに意地悪な質問をしてみた。

「『錯乱』のリズムで書き続けたとしたら、いまのように作品は読まれないのではないでしょうか」と。池波さんは「ウーン、だけど初めはあれぐらいでないとネ」という。

試みに、作者名を伏せて、鬼平ものの一つ、四編のうちの一つ、それに『錯乱』を読んでみたとする。極端かも知れないが、『錯乱』の著者が、他の二作と同一著者によると、見破れるだろうか。『錯乱』の重さに対し、この四編を含む近作には肩の荷を下ろしたような軽快さ、がある。この四編の中に、人気流行作家の地位にある池波さんのスタートを見たようだ。

もう少し具体的にすると——。『忍びの旗』をひき合いに出す。担当していたとき、人から「どんな忍者もの？」と、よく訊ねられた。「人間忍者」と答えた。忍者だから人間であるのは当り前だが、喋るときは〝人間〟にストレスを置いた。超能力をもつ人間離れしたスーパーマン的忍者でないという意味でだ。主人公の忍者は、秀吉の配下にある甲賀から、敵の北条方に潜入した人物だ。この忍者が、ある武将のもとで働くのだが、武将が自分の父親を殺した元忍者であることを知る。さらに、武将の娘を妻にし子供も出来る。甲賀からは、武将暗殺の指令がくる。しかし、その任務を果せない。がんじがらめに縛られ悩む忍者である。この人間の苦悩は現代小説にも、そのまま通用する。天正時代という時代背景がありながら、読者はいつの間にか、忍者の身になって悩む。巧みに作品の中に釣り込まれてしまう。

例えば、ここにある「炎の武士」だが、主人公の鳥居強右衛門は、武田勢に包囲された長篠城を抜け出し、援軍の約束をしたまま姿を見せない織田、徳川軍の陣地へ、その確認に行き、帰城途中に捕えられ殺される。危険を承知で強右衛門をこのように

かりたてたものは、時代も時代だが、自分自身の出世のためであり、ひいては妻子のためにもつながる。処刑されるとき、強右衛門は妻子の姿を頭に浮かべ、

（加乃。子どもたち……おれは、とうとう、こんなことになってしまった。なぜかわからぬが、ゆるしてくれい。だがな、あの若殿は、きっと、おまえたちのことをしあわせにしてくださるだろうよ）

と、池波さん特有のカッコの中にいれた独白で、主人公の心のうちを示す。ここで、〝武士たる者が、なんたる弱音を〟などといわせない。いま街を歩いている多くの男が考えるように主人公も考えるのだ。「ごろんぼ佐之助」では、原田佐之助の〝悪漢〟ぶりが、面白く作品を貫いている。「色」では、土方歳三の色、恋が流れている。池波さんは、作中に歳三の句帳「豊玉集」から

しれば迷ひ、しなければ迷はぬ恋の道

を引用しているが、この句に触発されて、この作品ができたのではないかと想像する。新選組の黒幕というイメージの強い歳三像は拭い去られている。

参考までに、池波さんの師、長谷川伸さんは「色」を読んで、「なにかふっ切れたようだネ」と、感想をもらしたという。池波さんにとって、四編のうち、とくに「色」は、記念碑のような作品らしい。

なお、池波さんがよく読まれる理由に、作品内容に魅力があることが第一だろう。が、この他に、独特なカッコの使い方があり史実そのままの解説が極力避けられ、登

場人物の行動や会話の中に、いつの間にかすべり込ませるテクニークがあるようで、読み易さへの配慮は人一倍払われている。『忍びの旗』担当中、池波さんは「漢字がむつかしければ、どしどしルビをふって下さい」といわれたことがある。

宮部修司

本書中には、今日の人権擁護の見地に照らして、不適切と思われる語句や表現がありますが、著者自身に差別的意図はなく、また著者が故人であること、作品自体の文学性・芸術性を考え合わせ、原文のままとしました。

炎の武士

池波正太郎

角川文庫 14764

昭和五十四年九月二十日　初版発行
平成十九年七月二十五日　改版初版発行

発行者―井上伸一郎
発行所―株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話・編集（〇三）三二三八―八五五五
〒一〇二―八〇七八
発売元―株式会社角川グループパブリッシング
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話・営業（〇三）三二三八―八五二一
〒一〇二―八一七七
http://www.kadokawa.co.jp
印刷所―旭印刷　製本所―BBC
装幀者―杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本は角川グループ受注センター読者係にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

©Toyoko IKENAMI 1979　Printed in Japan

い 8-14　ISBN978-4-04-132340-3　C0193

角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及渗透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日